
AYAKA

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AYAKA

【Nコード】

N7793C

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

今をときめく高校生芸能人彩華。とその幼馴染の歌手の悠治。だけど、七年前にその魂は入れ替わってて・・・その効力が切れる前の大騒動。色んな想いが交錯する中、前代未聞のような、アップテンポのハチャメチャラブコメディー（ライトノベル）です。

#1 プロローグ

人は、人の魂を愛するのか？それとも見た目を愛するのか？

大事な人は、一目惚れでも良いのか？それとも、長く連れ添った者を言うのか？

秘密を共有する者同士は愛しあえるのか？それとも、それは不可能なのか？

誰かを好きになるのに理由がいるのか？それとも理由は必要では無いのか？

永久に友人でいなければならないのか？それとも愛は芽生えるのか？

その答えは誰にも出せないから、この世は楽しい。そう、いつでも誰かを求めている。求める事を忘れる事は出来ないのである。

ミルク『今日、発売した雑誌カン口の彩華見たかい？』

ケイ『勿論見たぜ！最高に良い女だよな！あんなイケてる美少女いたらさ、是非彼女になってもraitaiもんだぜ』

カイ『だよな』グラビアや画像で見るだけってのは勿体無いぜ？身近にいたらさ、モノにしたくなるってもんよ』

ここ、彩華公認ファンクラブのホームページでは、毎日多数のファンが集う。彩華は十歳の折り、モデルデビューした後。演劇、テレビドラマと多才に実力を発揮している今光り輝く一押し of 芸能人その上幸運な事に、大手プロダクションでプロデューサーとして活躍する父と、映画を主として仕事をしている名女優の母親を持つサ

タブレット。はつきり言つて、親の七光りも有りバックアップも伊達ではない。

しかし、そんな彩華にも或る秘密が有った。

彩華『みんな、ありがとう！』

今迄、彩華は一度としてこのホームページに書き込みなどした事は無かった。よくこのサイトを訪れては、自らのポジションを冷静に把握して来た彩華ではあったが、やはり、こういう場に降臨してしまつたら有らぬ話題が起こってしまう。だから、今迄は自らの身の振り方を考えて慎重に行動して来た。しかし、ある事情を抱えて彩華はついに降臨してしまつたのである。

今日は六月三十日。後一ヶ月後には！その事を考えながら……そして再び書き込みを行った。

彩華『実は今迄このサイトには来てたの。そして重大なお知らせがあります。その具体的な事は明日の9チャンネルのお昼のワイドショーで明らかになるけど、興味が有つたら是非見てね！じゃあこの辺で失礼します！グッドラック！』

その後に書き込まれた掲示板の内容は、突然の本人自らの書き込みなのか？それともガセか？その話題で多くの者達が賑わつた。それほど大変な騒動になつていながら、それを楽しむように見ながら、彩華はほくそ笑んでいたが、『カタリ』という物音が聴こえ、慌ててノートパソコンの電源を切つた。

日課になつている訪問者が彩華の二階のベランダに現れたからである。『ガ拉里』と窓が開かれる。すると、ちよつと癖のある茶色い柔らかかそうな髪を掻き上げ、細身の眼鏡を掛けた一人の少年が彩華の整理された自室に入り込んで来た。

イケ面と言うには少し違うが、お姉さん辺りに好まれそうな甘いマスクをしている。

「何やってたの？」

こんな時間に、女の子の部屋に上がり込む男つてのは問題では有るが、それも仕方ない事であつた。そしてちよつと、女言葉で不思議

議なテノールの声が彩華に話し掛けた。

「別に？」

彩華は、先程迄の事を思い返しながら笑った。これからする事が……明日の昼に何が宣言されるのか？この少年にどういう印象を与えられるのか？その事を考えながら、より、ケタケタと笑った。

「何か隠してるでしょ！」

少年は何か苛立つと言うよりは、ちよつと心配げなそんな表情で問いかけた。でも、当の彩華は笑って誤魔化した。

「悠治は、心配性だね」

彩華は相変わらず融通がきかない悠治と言うその少年、にそんなとこに突っ立ってないで。とベッドに座るように指示した。彩華と悠治の背の高さは同じ。同じ目線で話が出る。

「もう！茶化さないで！それに、忘れないでちょうだい。私達は魂が入れ代わっていて、本当は私が彩華で、あなたが悠治なんだから！二人でいる時くらい自分達をちゃんと位置付けたいのよ！」

ちよつとヒステリックに言っているみたいだが、実の所精神はかなり繊細でか弱い。それがこの悠治の短所だとも思える。そして、重大な秘密とは、悠治が彩華で、彩華が悠治と言う事である。

どうしてこんな事になったのか？それは……

「へいへい、分かてるよ。彩華が言いたい事はさ？でも、容姿は、僕が彩華で君は悠治だ」

不自然だが突然男言葉に戻る。透き通るようなソプラノの声。そう、彩華の中にいる悠治の性格はこうだ。あけっぴるげで、何にでも真正面から接する。その中身とは裏腹に容姿的には、かなりの美少女。色白のモデル体型で、手足が一般の日本人の体型より長い。そして、切れ長の瞳は知的感を出している。その上、長いストレートの黒髪がキューティクルで、光の下では 天使の輪を幾重にも形どるくらい艶が有る。

そんな少女であっても魂は男。何がどうしてこうなったのか？そしてこの二人、彩華と悠治の関係は？それは、今から7年前に遡る

事となるのである。

#1プロローグ（後書き）

初めまして。こちらでの投稿は初めての翼です。
愛の形。

色んな形も有って良いかなと思い、書き始めた作品でもあったりします。

魂の入れ替わりと言う物で、人の心を何処まで客観的に且つ主観的に表現できるか？

また、二人（彩華と悠治）の気持ちがこれからどう変わっていくのか？

そう言うものも含めて描いて行きます。

かなりハチャメチャな展開ですが、楽しんでいただければ嬉しいです。

もし宜しければ、ちょこつと感想など頂けると嬉しかったり。

これから宜しくお願いいたしますm（- -）m

2七年前

7年前。それは、彩華9歳、悠治8歳の七月三十一日の事であった。今でも脳裏を駆け巡るくらいハッキリと思い出す事ができる。悠治の誕生日を次の日と迎えていたのだから。

その時は今のように魂は入れ替わってはいなかった。隣同士の御近所様。そして、同じ小学校に通っていた。彩華の父も母も多忙で、隣の悠治の家の御厄介になっていた。何でも一緒に行動する事で、二人は仲良し姉弟のように、育つて来た。

生まれた時からその事情は変わらない。それだけ一緒に接していれば、周りの者達は何も申し分が無かった。彩華の家庭事情を汲む者を考えると、悠治を羨む者がいないとは言えないが……

それでも暗黙の了解のように二人の仲を翻す事が出来ない事だけは事実であった。

そして当時、悠治は空手を習う為に道場に通っていた。自らの意志と、喧嘩で負けたく無いと言う思いが強かったからである。小柄だけど性格は大変負けず嫌いで荒っぽい。可愛い外見からは想像出来ないけれど。そして、それに便乗するように、彩華も悠治と同じ道場に通っていた。この年頃の女の子としては異例な習い事だったが、悠治と同じく行動するのであれば……ということと、自らも少し身体を鍛えたいと言う思いがあったのかもしれない。

両親は、その意向を飲んで許可した。悠治とは相反して彩華は身体が少し弱い。それならば、こういう経験をしていても良いかも知れないと軽く考えていたのである。少し自律的に考え方が弱く、自ら進んで行動するような子供では無かった為、それを自分でも何とかしたいと言う気持ちはあった。だから、毎週水曜日のこの日にいつものように二人は道場に足を運んでいた。

いつもの稽古は別段何も変わらなかった。悠治は、この年で既に全国少年大会に名前を轟かせる程空手の腕は上がっていた。彩華は

それを凄く褒めていた。自分には無いモノを手に入れている悠治が誇りであったからである。しかし、その帰り道に二人の魂が入れ替わる重大な事件が起こったのである。

帰り道は、いつもの道。何も変わる事の無い道。しかしこの日、悠治はかなりお腹を空かせていた。稽古で体力を使い果たした感じだった。だけど、手許には何か食べ物を買う為のお金は無かった。

悠治の家は彩華の家とは異なり、ごく一般の家庭環境。サラリーマンの父と、専業主婦の母親が、悠治の生れ育った環境であった。だから、渡されているお小遣いは知れている。そして、運悪く今月分のお小遣いは既に底をついていたのであった。

そんな時、ふと道脇の祠に収まっているお地藏様の前に備えられている団子が目に入ったのである。事実、美味そうに感じられた。何故か引き付けられるように、操られるかのようにフラフラとその地藏様の前に歩を進めた。彩華は何をするつもりなんだろう？とその悠治の行動を見守っていたが、御供えされている、供物を手に取っている悠治に気が付き、

「何をしてるの！」

と、駆け出して止めようとした。しかし、悠治はその手を払い除け、一個団子を口に放り込んだ。そして、

「彩華！お前も腹減ってるだろ？食べよ！ほらっ！」

よほどお腹が空いていたのか？少し徹臭い味はしたが、美味しかった。そして、彩華にも一つと思つて有無を言わさないように、悠治は彩華の口にまた一つ驚掴み取った団子を放り込んだ。彩華は突然の事に、その団子を飲み込んでしまった。その瞬間だった。いきなり頭上に……天に黒雲が立ち籠め、雷が二人の下に落ちたのである。

「愚か者め！」

確かそんな言葉が頭を過った。そして、電撃が二人を痺れさせた。死ぬかと思う程のショックが二人を包み込んだ。そして同時に二人は地面に倒れ込んだ。意識を失ったのである。

暫くの間その状態が続いた。すると、再び目を開けた時、そのシヨ

ツク状態から解放されたのである。

「？」

倒れ込んでいた二人は同時に目を醒ました。しかし、二人はお互いを見た時、合わせ鏡を見ているかのように、放心状態に陥ったのである。

「私は、誰？」

「僕は、誰？」

こうして、今の状況下のように二人の魂が入れ替わったのである。

#3 約束

「毎日、あのお地蔵様の所には行っているの？ちゃんと行かないと私達いつまでもこのままだよ？このまま人生生きて行くのなんて考えたくも無い！」

彩華は、真剣に悠治に向き合って、毎日の動向を確認しあっている。倒れた時、耳に流れ込んだ言葉。それはお地蔵様の駆け引きだった。天から罰されたこの仕打ちを、二人は意識のない頭できちんと聴いていた。

そう、お地蔵様からの要求は三つあった。

毎日欠かさず、供物を捧げる事。それは何でも良かった。とにかく、それを続ければ、二人の魂を元に戻すとそう耳に焼きついている。そして、二つ目に二人に囁いた言葉。

7年。

それが最終期間だと言う事だった。しかし、その事をあの時彩華であつた悠治は何故か覚えていなかった。その事を覚えているのは、今の彩華。そう、制限のある約束。それを知っているのは、今の彩華なのである。そして最後にもう一つ……

「もちろんさ。それに間違つても、自分が悠治だって事は言わないようにしてるしさ。安心しなよ？」

そう、この事は誰にも言えない秘密。それが7年の日々を作り上げている。誰かに知られたら最期。一生このままなのである。

「信用して無い訳では無いけど……私達は只でさえ芸能人なんだよ？いつ、この事がバレでもしたら……」

悠治の容貌をしている彩華も実は芸能人。ジェイズと言うユニットで歌手をしている。それは、入れ替わりが済んだ後でも、悠治がちゃんと自分の位置を確保したかった為である。だから、二人が入れ替わった後、悠治は彩華に歌手になる為の一般募集のオーディションを無理矢理受けさせた。

悠治は芸能界で働きたかった。そして、歌手志望であった。空手を習っている傍ら、ピアノも嗜んでいた。その為、音感やリズム感が良い。そして、夢は歌手。いつの日か、大きなステージできらびやかなライトの下で唄を歌いたい。ある意味目立ちたがり屋なのかも知れない。だから、彩華のこの身体でモデルと言う仕事をしている内に色々勉強しておきたかった。そして、演劇やテレビドラマで培いながら、日々歌手になった時の事を思い浮かべながら、芸能界に慣れておくのは手っ取り早いと思っていた。

それは今、叶わないけど、それが夢であった。

それとは相反して、彩華は平凡な生活を送って大好きな人と巡り逢い、そして結婚する事を望んでいた。

親の七光りのような仕事はしたく無い。それが望みだった。それは多分、両親の仕事に対する情熱を幼い頃から見て来た為と、その中で独り寂しい想いをして来たせいでもあった。温かい家庭を持つのが夢であった。

それに輪をかけて、悠治の家で生活している内により気持ちはそちらに流れ込んでいた。そう、二人は全く異なった考え方をしている。彩華は、魂が元に戻ったら、直ぐに芸能界から足を洗うつもりだし、それに実はもう好きな人がいる。それは今はどうしてもその本人に伝える事が出来ない相手。同じユニットを組んでいる、英二と言う青年である。

心は女でも、身体は悠治。つまり、どうやっても想いを伝える事が出来ない相手な訳で、毎日仕事で逢う度に、喉から声が出そうな気分で見ている。好きなんです。と……

その事は、悠治にも分かっていた。直接、彩華から事情を聞いていたからであった。でも、悠治はその事が面白く無かった。それは、実は悠治が彩華を好きだ。と言う気持ちこそそうさせている。複雑すぎる、想いの交錯がそこに有った。空手を習い始めたのも、実は、彩華と一緒に遊ぶ為の工作。二人で行動する事に文句を言う者はいなかったが、それでもいつどんな苛めを受けても耐えられる様にな

つておきたかったからであつた。

しかし、彩華は、まさかそんな気持ちを悠治が抱いているとは微塵も思っていなかった。ただの幼馴染み位にしか思っていなかった。だから何でも悠治には話せた。そして、英二の事も応援してくれるに違いないと、気軽に話したのである。

その時の悠治の気持ちは？そう、憤慨する訳にも行かなかった。嫉妬と言う気持ちは有りはしたが……でも、告白する気にはなれなかった。振られて、自らより去って行く彩華を考えたくは無かったのである。

だから一つの賭けに出たのであつた。たった一ヶ月の賭け。それを最期に彩華を諦める事ができるか？それとも振り向かせる事が出来るか？その結果は、一ヶ月後。出来れば自分の気持ちを知って欲しい。でも、彩華の想いは一途。不器用だし、引っ込み思案だし……実る恋かどうか怪しいが……

「大丈夫だよ。分かつてる。絶対バレない様にするって！約束するぜ？」

今は安心して寝かし就けなければならない。彩華に負担が行くようにはしたくは無いが、でも、もう、悠治の気持ちは揺るがない。明日からは戦闘だ！と分かっている。これが、彩華の為だし自分自身の為だった。

「うん。じゃあ、おやすみ……悠治」

彩華は、ちよつと不安そうではあつたが、自分の部屋に戻ろうとする。

「良い夢見るよな？おやすみ彩華」

#4 ジェイズ

彩華が悠治として芸能界に足を運んだのは、強制的な事でもあった。実際、御団子を口に放り込んだ悪の張本人だとしても……未来を、悠治の夢を押し切る事は彩華の性格からは出来なかった。それに、悠治自身の夢は小さい頃から知っていた。

何故お互いが違う環境で生まれて来なかったんだろう？想い望む環境に？そう考えても、今さらどうしようもない。だけど、悠治と言うキャラを演じる事で、何となくこういう環境を楽しまなかったとは言えなかった。

実際嬉しかった。

特に、オーディションで出逢った、英二と言う存在は彩華を向上させてくれた人物だった。

オーディションを受けたのは、二人の魂が入れ替わってから三年後の十一歳の時だった。何に対しても消極的だった彩華がこんな大舞台に立つ事は、凄く無謀な事だった。まず、書類に関しては難無く通過。悠治の口添えも有り書かれた書類は、一次審査を軽くパスした訳である。

しかし、その後の二次審査の実技試験は、人前での面接のようなモノであり、彩華を不安にさせた。悠治に言わせれば、そんなモノ適当にやれば良いんだよ。だったが、適当と言われても？番号札3番を渡され緊張している彩華には、もう何を喋れば良いのか？そんなこと判るはずも無かった。

そんな緊張している時、自分の出番を待っていたが、緊張し過ぎてトイレに行きたくなり、慌てて駆け出した。しかし、その駆け出した足が、同じく緊張していたオーディションを受けに来た者の足に引っ掛かり、なんと顔から思いつき転んでしまったのである。

本当だったら、足を出していたその者が助け起すくらいするものだが、それ所じゃないと無視された。端の方では面白可笑しく笑って

いる者の声さえ聴こえた。しかし、そんな悠治に肩を貸してくれた者がいたのである。実際こんな場面で……自分以外は敵だと認識しているだろうそんな時に、当事者以外で優しく助け起してくれる者なんていないであろう。

「大丈夫か？緊張してるのかい？あ、これ……」

ぶつ倒れていた彩華は助け起してくれたその人物を目を丸くして見た。黒髪が捌けた感じで目つきは少し三白眼。一見恐いイメージはあったが、しかし、この時の笑顔は最高に優しくて……立ち上がると自分よりタツパがあつて、男らしい。きっと二つか三つ年上だろう。包容力が有る感じに見えた。

一目見て良い人なんだなつてそう思えた。だから、素直にお礼が言えた。

「あ、ありがとう。こういう所つて、緊張するんだよ……経験なしさ……」

「経験なんてみんな無いに等しいよ。素人ばかりのオーディションだしね。どっかのプロダクションに入ってる奴なんて、数えるくらいだ。そういう俺も一般応募だしね……で、これさ……転んだ拍子に飛んだぜ？」

白い小さな手作りのお守り袋。その中に入っていた白い小ウサギのぬいぐるみが袋の入り口から顔を覗かせている。その事に気が付き、彩華は真っ赤になつてそのお守り袋を早くしまわないとと『アワアワ』と慌てて奪い返した。

「見た？」

「あ……悪い。見たけど……可愛いお守りだな？少女趣味なのかい？何だか面白い奴だな」

頭をポリポリと掻きながら、少しはにかんで答える。その仕種がとても可愛く見える、と思った。端正な顔なのにだ。一瞬馬鹿にされるかも知れないかもつて思ったから、

「可愛い？面白い？」

彩華は余計に真っ赤になった。曲がりなりしも今の彩華は悠治の姿

をしている男だ。そう言う者に対して可愛いと言われた。それに少女趣味……

確かに可愛い物が好きな彩華ではあったが、そう言う所を見られる訳にはいかなかった。入れ替わりが完了した時、勘違いで悠治はそんな趣味を持っているなんて事を周りに知られたく無いだろうから。「……君は歌手志望？」

その人物は、笑顔を絶やさず話を逸らせた。バツが悪いので話をかえたのかも知れない。そう考えると、彩華ももうその事に触れなかった。そうする方が自然だし、人のプライバシーに触れない様に気づかせてくれたのが少し嬉しかったからである。

そして、歌手志望だからこのオーディションに応募した。と当然の事を伝えた。その頃にはもう、トイレに行きたいと思う事なく緊張感さえも消え失せていた。

「え？うん。そうだけど……君は？」

「俺は、実は役者志望。でも、姉貴が勝手に応募したんだよな。このオーディションに。大体姉貴の魂胆は見え見えなんだけどね？」
少し赤くなって笑って答えた。彩華はこの青年を意外に照れ屋なのかなって思った。

「そうなんだ……僕もちよつと同じような所、有るんだけどね……」
自分とさほど変わらない動機なんだと思った。自分の場合は、芸能界には無関心だけど、悠治の為にこのオーディションを受けている訳ではあるが。そうか、そう言う理由で応募してる者もいるんだ。と思うと、少し肩の荷が下りた気がする。

「君の名前は？俺は英二って言うんだ」

「あつ。僕は、あ……、悠治」

「じゃあ、また三次審査で会える事を祈るよ。もう出番だろ？またな！」

英二と名乗ったその青年は、まだ先の番号札を引っさげてその場を立ち去って行った。そして、この後二人とも合格する事となる。運命の悪戯か？今ではジェイズと言うユニットで活躍していた。

#5ゲーム

「この後どうする？」

英二と彩華は共に歌番の録画を終え、事務所へと帰る途中だった。二人の所属するプロダクションは、そんなに有名では無い。どちらかと言うと弱小プロダクションだ。でも、この頃売れて来た二人の活躍で、うなぎ上りになって来てその名も大分知られて来た。ジェイズ様々である。

「そうだね。何か食べてから帰ろっか？お腹空かない？」

彩華は、昨日の悠治の意味ありげな笑いをまだ気にしており、朝御飯もろくに喉を通らなかった。何か企んでいるに違いないとそう睨んでいた。ああいう笑いをしている時の悠治は、絶対何か隠している事は判り切っている。そんな少しピリピリしている彩華を感じ取っていたのか、英二は気を利かせて、

「そんじゃあ、そのファーストフード屋で食ってくか？」

と、言ってくれた。芸能生活四年目。でも、まだまだひよつこの二人だから、未だにこんな感じの食事。

だけど彩華はそれでも良かった。二人でいられる時間が嬉しかった。内気な悠治に対し、英二は何でも気づかって接してくれる。そして心配事が有ると、背中を押してくれる。時にはボケ突っ込みのような漫才をしているかのような二人。しかしこの時、その英二の口からとんでもない事を聞かされたのである。

「確か悠治って、彩華の幼馴染みなんだったよな？それに学校も一緒？」

「そ……………そうだけど？」

ドキンと心が鳴った。まさか自分の事を言われているのかと思ったからである。

「昨夜から、彩華ファンが騒いでるぜ？今日のワイドショーで特別告知をやらかすってさ」

「え？」

彩華には何の事だか解らなかった。そのせいで思わず、ハンバーガーの具を『ポトリ』と落としてしまった。

「知らなかったのか？」

「何？何の事さ？何をやらかすって？」

彩華は焦った。何も聞かされて無い。でも、思い当たる事は有る。

昨日の不審な悠治の行動を考えてみたら……

「今日の9チャンネルの昼のワイドショーで、明らかになるとかならないとか？そんな事言ってたようだぜ？」

それを聞いた彩華は、スクッと立ち上がり、身近に時計が無いか探した。それを見ていた英二は彩華がはめている腕時計を指し示して「これは何だい？今は2時だよ。どうした？気になるのか？」
ちよつと訝しげに英二は慌てている悠治を見た。

「あ、うん。その……やはり幼馴染みだしさ……後一時間有るよね？これ早く食べてさ、事務所のテレビ見ない？」

落ち着かない悠治を見て英二は、フツと息を吐き出すと、

「分かったから、今は集中して飯食えよ。ほら、こぼしてるぜ？」

『ポトポト』落としてしまった具を指差しながら呆れて見てはいるが、悠治のそう言う所が可愛いとでも言わんばかりに、肘杖ついてはにかんでいる。

「あ、本当だ……ごめんみつともなくって！」

彩華は真っ赤になって自分の注意力散漫さを恥じたが、英二は非難せずに笑っている事に気が付き、何だかホッとした。

こんな風に接してくれると有り難い。そして、それが彩華にとってまた好きになる要因だった。そして、食べ終えた二人は、その場を後にした。

事務所に戻った二人は、彩華を先頭にテレビが有る部屋を借り切った。しかし噂を聞き付けていた事務所の者や、その他のタレント達も駆け込んで来て野次馬の輪が出来上がった。

そしてついにその時刻が来てテレビは、ワイドショーに切り替わった。

「今日は、突然に番組の内容を変更しまして、彩華特集を組んでおります」

女性アナウンサーが、特別呼び寄せていた彩華に顔を向ける。笑顔でこれから何を話してもらえるのか？それを期待しているようだった。

テレビの中の彩華はそれを営業スマイルで受け答えるようにしているようだが、テレビの前に陣取っている彩華は、気が気で無かった。何を言うつもりなんだろう？それが頭の中を駆け巡っていた。変な事を言わないかと不安だった。

まさか……バラすつもりじゃ？

「では、彩華さん？宣言して下さい！」

男性アナウンサーも微笑んで彩華の言葉を待っているようだった。

「では、この場を持ちまして、宣言させて頂きます」

かじり付いて彩華は悠治の言葉を待っていた。どうか変な事を言わないように！という祈りの気持ちばかりだった。

「今日から一ヶ月間、私、彩華は全ての仕事スケジュールをキャンセルします。そして、一つのゲームをしようと思っております」

にこやかにそして、意味ありげに微笑んでいた。

「ゲーム……ですか？」

女性アナウンサーは、不思議そうに彩華を覗き込むようにして見ていた。

「そうです。この一ヶ月間で私を見つけ出し、私の唇を奪った方に永久保存版の恋人になってもらうと言う無謀かつ極悪なゲームです」

「！」
これには、テレビの前の彩華、アナウンサー、そして誰もの口からも言葉が出なかった。

「冗談じゃ有りませんよ？本気のゲームです。言っておきますが、

私は空手も柔道も黒帯です。それを肝に命じてこのゲームに参加してくれる方を応募しております！そして、こちらで細かいルールを決めさせて頂きました。それは次の事項です」

誰も、一言も言わずにその説明を聞いていた。こんな状態で、芸能界に新風を巻き起こす者が出るとは……しかも、彩華みたいな、見た目から想像する事が出来ないような子が？みんな目を丸くして見ている。

「私は変装しますし、実家には帰りません。もちろん情報を流す事もしませんし、捜し出してもらわなければなりませんよ？そして、一ヶ月間どんな事しても消す事が出来ないマジックペンを持って行動します。そのマジックで顔に『x』を付けられた者は、その時点でゲームオーバーとなり、二度とゲームには参加は出来ません。そして、目的が達成出来た暁には必ず約束を果たします。それではゲーム、スタート！」

彩華はそれを合図に席を外し、スタスタとスタジオを去ってしまった。

「！」

悠治は何を考えているんだろうか？と彩華は思った。そんな事をしたら、魂が戻った時、その最悪な状況下にいる私はその者と一生共にしなければならぬと言ふ事ではないか？沸々と悠治に対する怒りが沸き起こっていた。今から、スタジオへと駆け込んでやろうかとさえ思い立ち、腰を上げかけた時、

「悠治？彩華のところにいくつもりなのか？」

英二が、さっと彩華の腕を取った。

「あんな事許せる訳ないじゃないか！よほどの阿呆しか考え付かないようなことするなんて！」

憤慨している悠治を落ち着かせる事が出来ない事を悟ったのか、英二は、

「じゃあ、行ってくれば良い。だけど、きっとこのまま彩華は失踪するつもりじゃないかな？今からじゃ間に合わない。彼女は賢いし計算高い。自らをそうそう安く売ったりする事はないと思うけど？」この言葉に、彩華はグツと言葉を飲み込んだ。確かにそうだ。何の勝算も無しにこんな事を言い出す奴じゃない事は分かっている。きつと何か目的があつてこう言う事を言い出したに違いない。だけど目的は？彩華には解らなかった。前代未聞。芸能界から追放されても決しておかしくないゲーム。

それを今から行つと言うバカげた発想。そんな事を、悠治がする訳がない。と思いたい。すると、彩華は側のソファ―にドカツと腰を掛けた。

「英二つてさ？彩華のこと好き？」

その問いは、本音を訊きたいと思つた訳ではなかった。何となく口を付いて出た言葉だった。

「うゝん。美人は苦手なんだけど。彼女の賢さは凄いなって思うよ。周りを引き込む力つてのは、憧れだね。天性の素質つてのを持ち合わせていると思う……だけど、性格を分析すると、悠治の性格の方が好きかな？俺的には……」

『悠治の性格の方が好きかな』

彩華は一瞬顔から火が出そうなくらい恥ずかしくなった。

「ごめん。変な事訊いた……」

「謝んなよ……こつちが照れる。でも、このままにしておきたくはないんだろ？悠治？……悠治、実の所は彩華のことが好きなんだろう？」

「え？」

彩華は否定したかったが出来ない。好きな人は、英二だつて言えれば楽だけど、この状態じゃ、言えない。でもなんでそんな風にとらえられているんだろ？私が、悠治を好きだなんて？そんなに気に

掛けている所を英二に見せて来た事があっただろうか？

「幼馴染みだよ。好きって言う感情より、心配している父親みたいなもんだと、思う……」

自信なさげにそんな事を言ってみせた。完璧に否定は出来ないし。肯定も出来ない。だって、悠治の事を特別な意味で好きだと言う感情は無いのだから。だから、一番納得が行く言葉を選んだような気がする。

でも、このパニックっている頭でよく思い付いたものだと自分を褒めたい気分であった。

「……そうだね。彩華のことだし、何とかしているよね……」

そして、視線をテレビに移した。もう、彩華の特集どころか、現場は速やかに立ち去った彩華の事を批評や批判している番組へと詣が変わっていた。

一瞬の出来事で、番組を建て直す事が出来ないの、番組はそのまま垂れ流し状態であった。悠治は今頃何処にいるんだろう？

彩華は、その行方を調べなきゃならない。その事だけは、確かなのであった。

#6 桐原奈々子

その頃の悠治は、スタジオを飛び出し、直ぐさま私服を放り込んでおいた駅構内のロッカールームから荷物を抱えて渋谷の街を闊歩する事にした。

堂々と変装して誰にも分からない様に、渋谷の街を徘徊する楽しみなんて滅多に味わえない。と嬉し気に思っていた。これが開放感つてものだとでも言わんばかりに色んな所を見て歩いた。そして街頭の液晶パネルで放送されている、今自分が行っているゲームの批判がされている事を知り、また嬉しくなった。

「これくらいやっておけば、彩華が引退してもおかしく無いだろう？」

独りゴチながら、液晶画面に見入っている人々の間をかいぐり、歩いた。すると、何処もかしこも彩華のポスターが貼られている事に気が付く。へーと言う感じで周りを見渡した。そして、ある一点に……その壁に並んだ彩華のポスター前でそれを眺めながら肩を震わせながら立ち尽くしている、一人の女の子に注目した。

小柄なのはすぐに分かった。自らの背より、二十センチは違うであろう？中学生では無かろうかと思った。

今日は学校が休みなんだろうか？そんなはずは無いんだけど、今日を曜日を確認する。今日は、月曜日。時間的にはまあ、学校帰りと言う事も頷ける。しかし、何であんな所で突っ立っているのだろうか？悠治は、気になってその少女の動向をじっくり観察する事に決めた。ま、時間潰しにはもってこいの人間ウォッチングである。

すると、二十分くらいの時間が過ぎた。しかし、少女は依然とそのまま突っ立っている。悠治は余計に気になってきた。何しているんだろう？彩華のファンなんだろうか？しかしそんな感じは見受けられない。

着ている服はゴスロリ系の黒いフリルのワンピース。シックでスト

イックなスタイルが売りの、彩華が着そうに無い系統の服装であった。そして、三十分が過ぎる頃、やっと身体を動かした。動かしたというか、鞆から何かを取り出すと言った感じであった。そして、ポスターに向って、何かを書き始めたのである。何を書いてるんだろう？

今まで道端に座り込んで見ていた悠治ではあったが興味深くスタスタと歩き出す。そしてその少女の横まで歩いた。

しかしその事に少女は気が付いて無かった。そして悠治はちらりと覗き込んだ。

『バカ女』

ひとことポスターの端にマジックペンで小さく書き込んでいた。悠治はその通りだと思ってクククと軽く笑った。そして、その横に有るジェイズのポスターに気が付き、今度は悠治が、ゲームで使用する為に備えていたマジックペンで英二の顔に思いの丈の悪戯書きをしてやった。

「あのさ、これくらいやんないかね」落書きしたのは！思いの丈を込めてトコトンやらないとねえ？」

少女に聞こえるように、悠治は言ってペンをポンポン手の平で跳ね上げながら、この場を立ち去ろうとした。満足だった。

少女は、驚きの表情で悠治を見たが、こんなに悪意の込められている落書きをする。サングラスをして深々と帽子を被っている怪しくスタイルの良いお姉さんを横で見てしまった為、放心状態だった。しかも女性が、英二という、今、人気が出ているユニットの男性に對しこんな事をするのはおかしく感じられた。この英二を知っているのか？それとも何かの恨みでもあるのか？だから立ち去って行く悠治に向って声を掛けようとした。

「あ、あの、待って！」

後から通り過ぎてゆく……ポスターを見て過ぎ去って行こうとする若い女の子達が、英二への落書きに気が付き立ち止まって非難している中、呼び止めようとした。が、突然後方から走り込んで来た一

団にぶつかり、その少女は思いっきり壁に激突してしまった。そして、その拍子に支えようとした身体に負担が掛かり、足を挫いてしまったのである。

「な、なんなのこの連中は！」

少女は、痛い足首を座り込んで摩りながら、突然今まで落書きをしていたその女性を取り囲むように現れた一団を、見守っていた。

当の悠治は、もうこの一団がどう言う者達が察しが付いていた。ゲームに参加した者達であるのだと……しかし、見渡した限りかなり色んな年齢層である事に気が付き呆れてしまった。

「あら、一番乗りの一団かしら？ 凄いわね〜どうやってここにいる事がばれたんでしょ？」

少し茶化してみるが、この人数は少ししんどいかなと考えてしまった。しかも、こんな渋谷のど真ん中で事を起せば、また一段と参加者が増えるだろう？ でも、逃げるのはしゃくだなと思った悠治は、張り切ったように、

「じゃあ、ショータイム！ レッツ・ゴー！」

それを合図に突然悠治に飛びかかる一団。

少女は、何が始まったんだ？ と見ていたが、サングラスを外し、激しく動く事で帽子がずり落ち長い黒髪が露になった悠治を見て、

「これってもしかして……彩華の？」

間近で見えていてハッキリとその女性がお騒がせ芸能界人と化した彩華だと知り、呆氣に取られた。

眺めていると、素早い身のこなしで、挑戦者である一団の一人一人の顔に『x』マークを付けて行く。

皆、自分の事しか考えて無い為、押したり引いたりしながらの乱闘が綴り広げられている。よってこれだけの人数がいても、彩華対一挑戦者の図にしかない。その上柔道、空手共に黒帯と言う実績が伊達じゃ無いらしく、交わす度にもつれて来る腕を軽く技で引き離す。

少女は、凄いと思ってその乱闘を見詰めていた。周りの者達も、何

だ、何だとその乱闘している者達を取り巻くように集まり始めた。ざわめく声に、少女はドキドキしながらそれを見ていた。彩華の事は嫌いだ。でも、こう言う所を見せられたら……正直かつこいいと思っただ。

どれほど時間が過ぎ去ったんだろうか？次第に人数が減って来ている。既に、印が付けられた者達は諦めてその場から離れて行く。きちんとゲームのルールを守っている証拠であつた。そして、挑戦者が誰もいなくなったところで、悠治はフウ！と息をつき、投げ捨てたサングラスを取り上げたのである。

「何とかなったわね？」

悠治は、格闘状態のその状況から解放され、言葉を漏らした。

やはり結構しんどいものだなんて思った。が、やり始めた事とはことんやり尽くさなければ気が済まない。それが、このゲームを始めた自分の責任。そう改めて思った。

そして、この場を速やかに去ろうとした時、さっき落書きしていた少女が座り込んでるのが目に入り、

「大丈夫？」

と、声を掛けた。きっと今の乱闘で、被害にあつてしまったのだとハッと気が付いたからである。申し訳ないと言う思いがあつた。しかし、少女はそんな彩華の声を無視するように顔を背けた。

怒っているのかと思い、悠治はちよつと躊躇いながら、少女の周りに散らばっている物達を拾いながら、何とかしようと心の中で色々考えた。が、とにかく謝らなければならぬなとしか考えようが無かつた。

そんなちよつと躊躇っている悠治に、少女は本当はバツが悪い思いだつた。彩華本人の前で『バカ女』とポスターに書いた事を思い返していた為である。どうか、このまま立ち去ってもらいたいと思つていた。

しかし、当の本人の思惑とは反して、
「桐原奈々子さん。っていうんだ？」

突然自分の名前を呼ばれて少女は、声の主の方を見た。驚いた。何で分かったんだろう？

『ギクリ』として、ちょっと身を引いた。悠治はというと、散らばっていた物の中に生徒手帳を見つけて中を拝借したのである。名前を知らないのは当然の事だが、何となく今は話のきっかけを作ろうと思った。そうしたら気をこちらに向けてくれる。謝れるチャンスだとちょっと考えて、覗いたのであった。

しかし、その中からヒラリと出て来た一枚の少年の写真に気が付き、コソツと見て元に戻した。彼氏かな？位の軽い気持ちだった。

「足、大丈夫？」

少女がこつちを見てくれたので『ホッ』と一安心した。だから、今拾った全ての物を、この少女、奈々子の前に落ちている鞆の中に戻し、捻挫したであろう、その足を見ながら言った。

「ごめんね？こんな事に巻き込んでやって？」

悠治はなるべく気軽に言った。余り心配している様子を見せるのは、奈々子の為にはならないとそう思ったからである。どうせ、今の乱闘で自分が彩華だとバレているはずだし。

「……」

当の本人の奈々子と言えば、放心状態でただ彩華を見ていた。

「足、大丈夫？」

繰り返されたセリフに気が付き、奈々子は、ハッと我にかえた。

「え？あ、平気平気！」

突如立ち上がった。立ち上がれる足でも無い事くらい判っていた。彩華の乱闘現場を目撃している内に立ち去る事だっただけ出来たはずだし。

でも、ここで彩華に対し弱音を吐きたく無かったし、同情を買いたく無かった。だから、思いつき捻挫した足を地面で踏みならした。すると、今まで緊張していたはずで痛く無かった足に、『キーン』と脳天に響くほどの激痛が走ったのである。

奈々子は、直ぐにその場に座り込んだ。もう立ち上がれないとそう

思った。すると余計に自分が惨じめに感じられたのである。奈々子の、この異様な様子に、悠治は笑って良いものか？悩んだ。しかし、余り追求するのもなんだし、ここは流しておこうとそう思った。

「ほらっ、無理しないで肩かしてあげるわよ！ついでに、送って行つてあげるか……」

その言葉を掛け終わる前に、奈々子の手が悠治の頬を鳴らしたのである。

悠治は何が起こったのか解らなかった。突然右頬に『ピリッ』と効いた刺激を受けたくらいであつたが、確かに叩かれたのだと気が付いた時、

「触らないでよ！あんたなんか嫌いなんだから！あーもう、サイテくく！最悪！」

突如奈々子が泣き出しそうな声色で叫び始めたのである。思いの丈言いたい言葉が口から漏れたかのようにだつた。

「あたしの初恋グチャクチャにされた上に、このザマ？もうー大っ嫌い！」

声が街中に響き渡つた。悠治には何がなんだか？言っている意味さえも解らないこの状況下に頭の中が空白状態になつた。そして、周りのざわめきが耳に届き始めた時、このままここにいたら注目の的になつてしまい、また乱闘騒ぎを招きかねない。と判断が下つた。

「私の事嫌いでも良いんだけどさ……その、注目されてんのよね……」

奈々子は、ハッと我に返つた。そして、辺りを見回す。行き交う人々が、確かに二人に注目し始めていた。『ジロジロ』見て行く者もいれば、訝しげに見て行く者もいる。中には、

「もしかしてさ、あれって彩華じゃない？」

と、見て通り過ぎて行く者までいる。今自分が何を言つたのか？咄嗟に出てしまった言葉が頭を駆け巡り、この状態から回避する事と相まって、よけいに混乱した頭が、この後の彩華の行動を受け入れてしまつたのである。

突然、身体がフワリと軽くなり、自分が空中に舞い上がったような感覚が起こった。

「え？」

奈々子は、何が起こったのか理解できなかったが、自らを支える腕に気が付いた。そして、空が動いている。周りの風景が動いている

……

「ちよつと！」

焦った。彩華が、自らをお姫さまだっこして動き始めたのだと気が付いたからであつた。

「小さくて、軽い子で助かったわ〜」

悠治と言え、あつさりしたものである。ま、ここから立ち去る事だけを考えればこれが一番手っ取り早い方法だと気軽に考えた結果であつた。

「家は何処？あ、その前に病院に行かなきゃね〜？」

その言葉に、奈々子は呆気にとられていた。言葉が紡げない。この人は、一体どう言う神経をしているんだろうか？グルグル頭の中を駆け回る。自分をこれだけ貶した人間を、何故こんな風に扱えるのだろうか？自分だったら絶対こんな風には接せられないであろう。

とそう考える。何か不思議な感覚だつた。だから、

「教えるから、せめてだっこじゃ無くて、おんぶにしてくれるかな

……」

赤面しながら、言葉を発したのであつた。

#7 同居生活

奈々子の家は、渋谷から山手線新宿駅乗り換え中央線から八王子まで下った所にあつた。まず、近くにある診療所に行き捻挫の手当てをしてもらった。奈々子はたまたま、保険証を持ち歩いていて良かったと思つた。でも、

「この怪我は、私のせいだから！」

と、彩華は自腹を切つてその代金を払つた。はじめは、良いよ。と突っぱねていた奈々子であつたが、余りに彩華がその必要は無いから！と押し切るので、その勢いに飲まれて結局支払つてもらつた訳である。

その後、自宅まで彩華に運んでもらつた。医者言葉が、二週間安静との事だつたからであつた。

「一人暮らしなの？」

部屋の中にまで運んで、何とかベッドに腰掛けさせた奈々子に悠治は問いかけた。

「……そうよ……」

奈々子は気が無い風に言葉を発していた。

「ごめんね。中学生かと思つてたよ……」

悠治は、素直に思つていた事をそのままに奈々子に笑いかけた。

「……中学生だよ」

「え？」

悠治は耳を疑つた。

「何で中学生が一人暮らしなんかしてるの？」

正直、悠治は驚くしか出来なかつた。狭いけど何だか広く感じられる部屋。でもこれ以上突っ込んだ事を訊いて良いのかどうかなど、考えなかつた。それこそ不自然だと悠治は思つたからである。

「……恵まれた家のお嬢様には解らないわよ」

奈々子が皮肉ってそう言ったものだから、一瞬さすがの悠治もムツとしそうになった。だけど、

「あたしの家は、今離婚調停中で、両親別居中なの……あたしはそう言う環境に居たく無いから、一人暮らしを言い出したの。一人の方が気が楽だしね。そしたらこのアパートをあてがってくれた……変な話だけどね」

一瞬シーンとした空気が二人の間に生まれた。さすがの悠治も、これ以上は何も言えない。そう言う環境で育った事など無かったからである。

無いけど……考えてみれば彩華として過ごしている間は両親が揃った試しなど無い事は良く分かっている。本当の両親と言う訳では無いけど……他人ではあるけど、彩華としてここ数年その環境で育った事を考えるとその気持ちは良く解る気もしないこともない。

ふと、視線を真っ黒いカラーボックスの上に向ける。幸せであった頃の奈々子と両親の様子が写し出されている木枠の写真立てが目に入った。

悠治はそれを見て一瞬良案が浮かんでいた。

そんな中奈々子は思っていた。彩華は何も言えないだろうと。そうせせら笑いたい気分だった。しかし、その思いを遮る言葉が彩華の口から漏れ出た。

「じゃあさ、二週間ほどここに泊めてよ！その足じゃ、学校行くの大変じゃ無い？」

「な……」

彩華は良い案が浮かんだとばかり手の平をポンと打ち、につこりと笑ったのである。だから、奈々子は頭の中が真っ白になった。一体何を考えているんだ？出会ったばかりなのに……この人は常識的な物の考え方が出来ないのか？それとも、私の考え方が間違っているのか？目眩がしそうだった。

「送り迎え、料理、それから……そうそう、ここに泊めてもらう間の家賃と食費は入れるから」

「……」

奈々子は呆氣に取られて口をあんぐりと開けていた。その事に気が付いてるのかいないのか？彩華は言葉を紡ぐ。

「私、今失綜中なのよね」バレないようにするから、御願い」助け
ると思つて！」

次から次へと勝手に事を進めて行こうとする彩華に何も言えない奈々子は頭痛がしていた。

「そうそう、この近くに衣料品を扱っている店在る？早速行かなきゃあ、カード使えるかなあ？」

奈々子の返事を聴く事なく彩華は勝手に話を押し進め、そして、そそくさと部屋を出ようとしていた。その氣になつてゐる事がその行動に現れ始めた時、奈々子は、観念したのか溜め息まじりに、

「分かつたよ。良いわよ。うちに居ても……」

この一癖も二癖もある芸能人彩華を受け入れたのである。

かくして一方的に始まつた同居生活一日目がバタバタとして過ぎて行く。

そんな中、悠治が良案と目したそれは、この奈々子を寂しく感じさせない時間を与えたいと言う事が念頭にあつた。

彩華を嫌いだと言つた奈々子ではあるが、押し駆けてしまえばこちらの思う壺になる事だけは分かつた。それは、捻挫事件の時と、ポスターの件で分かつた。普通、あんな落書きしか出来ないのはおかしい。本気で嫌いだつたら躊躇つたりしないであらう。この年の子であれば。ハデに落書きしても破り捨てても、感情つてモノはもつと素直なはずだと思う。それが、あの程度で済んでゐるって事は、彼女の的に何かしら押さえているモノが有るからだ。と悠治は思つていた。それは、この奈々子と言う性格だろう。だから悠治は、興味を持った。

考えてみれば、彩華以外の女の子と接した事はほとんどなかった。仕事で接する女の子はライバルだし、仲良く話をする事など無かつ

たし、仲良くしようなどと考えた事も無かった。

そう鑑みると、これは良い機会かも知れない？自分の視野を広げる事も必要かも知れない？そんな事を思い耽ると、悠治は張り切れる気がした。これからの一ヶ月間、色々と何かを楽しむ事ができる。

何しろ今は彩華の皮を被っている訳だし、女の子を知る丁度良い機会では無いか？そう思うと、解放感に合わせニタニタ笑いが顔を作る。

「何笑ってるの……？」

無気味だと言わんばかりに、一DKの自分の部屋から覗き見る勉強中の奈々子に気が付き、

「あ……これお砂糖と塩どっちかと思って？」

慌てて話をそらす。今は晩御飯を作っている最中であつた。

「あの……舐めれば解ると思うけど……それがそんなに面白い事なの……？」

「そうね、舐めれば解るよね、あはは」

そそくさと、舐めてみる振りをする、

「彩華……ちゃんと料理出来るんでしょうね？家、燃やしたりしないでね……」

奈々子が立ち上がりうとしたので、

「あ、平気。大丈夫！任しておいて！」

慌てて、座るように促した。

解らないはずは無い。実際自宅で両親がいない時は悠治自身が御飯を作る。

インスタントやコンビニの御飯は食べたくは無い、それは意地であつた。自らの信念でもある。そして実の所、料理は得意だつた。だからこの同居は上手く行くと思つていた。

そして、ここまで突飛ないことをやっているのだ。奈々子は彩華が本当は変な人だと思つてゐるはずだ。ならば、徹底して変な人を装うのも良いだろう。世間知らずで図々しい人。それが自分。

という人格を演じてみるのも面白い。また一つ楽しみが出来た気が

したので悠治は満面の笑みで、目先の料理にその思いを注ぎ込んだのである。

「あ、美味しい……」

意外そうに奈々子が言葉を発する。奈々子は、小さいテーブルに乗っているオムライスと、サラダなどがバランス良く配置され、見た目と味が一致した事が不思議だった。本当は、とんでもないモノを食べさせられるのではないかとヒヤヒヤしていたからである。

「そんなに、心配だったの？」

彩華はクスクス笑っていた。そりゃ、作っている最中に塩と砂糖がどちらかなど訊かれれば誰だって不安になるものだ。その上、彩華は親の力も有る芸能人。そんなお嬢様である彩華が料理などやった事が有るのか？それが淒く気になっていた。

「私、ちゃんと自分で御飯作っているわよ、簡単なモノだけだね？」

「あ、そうですか……」

そう言われてちよっと、複雑な気分だった。自分でも同じ物をここまで美味しく作れるであろうか？そう考えると、悔しく思える。同じ女性として。

でも心とは裏腹にきちんと最後まで食べた。美味しいし、お腹は正直だったからである。

「あのさ……何で、こんな事してるの？」

食事を済ませた後、不思議に思っている事を彩華に訊いてみる事にした。

「こんな事って、ゲームの事？」

「それしかないじゃない……」

「奈々子の世話の事かと思っちゃった」

また、クスクス笑われる。何でこの人は当然の事がごくこうやってふざけるのだろうか？

「楽しいからよ、って、奈々子、勉強終わったの？ゲームしようゲ

ーム！」

突然、テレビ横に置いているテレビゲームに目を付けたのか、彩華が話をそらした。何処までも勝手な奴だと思ったが、何か訳でもあるのかも知れないと、今回はこの辺にしておく事にした。

大体、初対面で話してもらえる訳も無いだろう。でも、ここまで人懐っこく接せられたら（勝手な奴では有るが……）何だか古くから付き合っている友人のような気がするから不思議である。

悠治のペースにハマってしまった奈々子はこの日は結局自分が持っているゲーム機で悠治と対戦ゲームをし、夜は更けて行った。

8 合鍵

『悠治の莫迦！阿呆！脳足りん〜！』

と、心の中で叫びまくっている彩華は、その夜眠りに就く事が困難であつた。

何故あんな莫迦げた事をし始めたのか？その事が解らなくてイライラしていた。それが自分の勝手なら立ちだとしてもだ。こんな事をしていると言う事は、悠治自身にも何かしら考える事があつたはず。それなのにその事を追求する気にはなれなかつた。悠治よりも自分の事を考えている。しかしその事には気が付かない。端から見れば、自分勝手が本当は誰なのか？この状況ではわからないかも知れないだろう。どちらもどちらである。

そして、彩華は明日からの事を考えていた。悠治が行きそうな所。まず、お地藏様の所には現れるはず。今日も訪れた様子があつた。そこを押さえさえすれば、悠治を捕まえる事はできるはず。しかし、一日中見張っている訳にはいかない。明日は、学校に行かなければならない。悠治と同じ学校ではあるが、一ヶ月間来る事は無いだろう。きつと……

ま、心配しなくても悠治は頭が良い。単位さえ落とす事が無ければ、まるまる一ヶ月欠席しても授業には付いて来る事ができるであろう。そんな事を考えていると、

『そう言えば、何で悠治は都立になんか通っているんだろう？』
ふと疑問が生じた。

『芸能界にいたいから都立なんだろうか？』
他の芸能人には悪いけど、悠治は私立の良い所に通う事ができる位出来の良い頭を持っている。もとの脳味噌を持っていた彩華にとって情けない事だけど、それは本当だった。頭だけでは無い、スポーツまで万能だ。自分の本来の身体でそこまで出来るなんて。と思っくらい……

「うーん。考えれば考えるほどわかんないよ」
彩華は蒲団に包まって、頭を抱えた。そして、もう一度明日からの悠治追跡の算段を少しでも練ろうとした時、眠気が襲い見事に眠ってしまったのである。

「朝だよー御っ飯だよーん！」

痛快、爽やかな声が部屋中に響いた。昨夜遅くまでゲームの対戦に夢中になっていた二人であったが、こうも朝早くに起こされると奈々子はゲッソリしてしまった。

「あのね、彩華……今何時だか判ってる？」

「六時だけど？」

悪びれる風も無くニコニコして彩華は楽しそうにフライパンを持って現れた。

「学校は七時半なの……まだ寝かせてよ……」

脳天気極まりない彩華によけい脱力してしまう。心のママにあくびを連発してしまった。

「でも私、学校に行く為の道知らないよーん。早く行こう！奈々子は道案内のナビゲーターだよん？よろしく！」

奈々子の事などお構い無しにますます張り切っている。そのテンションに仕方ないから付き合う事にした。足を床に着けた時、昨日より痛みが有る事に気が付き一日が不安になった。

「朝はご飯が一番！ちゃんと食べなきゃ倒れるからねー」

と、運んで来た物は、ごく普通の日本の朝食だった。

「……………はいはい」

呆れてしまうが、口には合う。だから、文句は言えない。奈々子は、徹底した彩華のこの様子に、

「無理はしないでよね？彩華、何時に起きたの？」

「五時だよ？何か不満でも？」

『五時になんか起きて、働かなくても……………』

と言いたい所だが、その言葉を封じ込めた。

「道案内はできるけど、どうする気？まさかおんぶして運ぶとか言わないよね？」

食べ終わった食器を彩華が運ぶ、

「自転車あるよね。確か？それで二尻して運ぶわよ？何？おんぶで学校通いたい？」

また茶化している。この人は、冗談しか言わないのだろうか？と、また脱力してしまった。

「……よく自転車がある事分かったね？」

「昨日、ここに来た時、自転車置き場に名前が有ったからね〜久しぶりに乗るわ〜」

何だか不安になってしまった。でも彩華は楽しそうだ。よほどの変人かも知れない。

「くれぐれも、自転車壊さないようにね……」

引導を渡してみる。しかし、その事に気を配るところか、

「そう言えば、ここに帰って来たら鍵無いと入れないね？奈々子、鍵貸しておいてくれるかな？合鍵作って来るから〜」

そう言えばそうだ。鍵が無ければこの家に入れない訳だし。まあ、いくら何でも彩華の稼ぎを考えれば奈々子のなけ無しの預金なんかに手を出すとは思えないし……

「しょうがないから、貸してあげるよ。彩華は隠れなきゃならないものねえ〜？」

皮肉粉れに言ったつもりなのだけど、

「今日は、ちよつと原宿にでも行こうかなと思ってるよん〜行った事ないからね〜」

ニコニコしている。

「さいですか……」

その後奈々子は何も言えなかった。

学校は、ここから自転車で十分。少しふらついてママチャリを運転している彩華は鼻歌混じりに歌っている。その後ろに乗り込んだ奈

々子は、そんな彩華の様子に気恥ずかしい気持ちになった。

彩華の姿と言えば、紺のチャイナドレスに黒くて丸いサングラスを掛けて、バンダナを頭に巻いている。何処から見てもスタイルの良
い変な中国人だ。

道を歩いている人は、不思議そうに振り返って行く。学校近くにな
ると、登校しているクラスメイトやその他の学生がいるので奈々子
は落ち着かなくなっていた。でも、そんな視線を気にしないのか、
彩華は教室まで奈々子を送ってくれた。御丁寧におんぶして……

「無事到着！何時に学校終わるの？帰宅部？」

廊下側の机の椅子まで運んだ後、腰をかけたのを見計らって彩華は
間いかけて来る。クラスの者達は不審げに彩華と奈々子を遠巻きに
見ていた。

その視線に気付いていた奈々子は、早く去って欲しいばかりに、

「……今日は、四時頃終わるよ。帰宅部だからそのまま帰れると思
う……」

「そっか〜んじゃその頃に迎えに来るよ〜ん。んじゃ！……と、あ
そうそう。絶対安静にしておくのよ？ちゃんと迎えに来るから、こ
こで待つてなさいね！」

念を押されてしまった。だけどこの足で無理な事は出来ない事は分
かっていたので、

「はいはい」

適当に相槌を打って苦笑いで彩華を見送ったのである。

#9 原宿

さて、今日は何をしようか？悠治の頭の中は色々考えていた。

原宿に行く事は考えていたので実行するつもりである。その後、お地蔵さんの所に供物を持って行って……そう言えば学校どうしよう？行ったら行ったで、彩華に逢ってしまう。それはちょっと控えた。絶対批難するだろう事は明白だった。今は彩華の言葉は聴きたく無い。聴いたら今の自分を否定される事は明らかだ。そんな話はしたく無い。せっかくの自由なんだし……近寄らない事が一番の得策である。勉強遅れるかなあゝ単位危なかったっけ？

余り、単位の事は考えていなかった。どうにかなるだろう？と安易な考えしかなかった。それに目先の方が大切だった。勉強は二の次だった。どうせ、芸能界でやって行く訳だし、そんな事よりもっと自分の為の事をした方が有益である。

原宿を闊歩しながら、変装バッチリな姿で悠治は普段は入り込まないだろう所を見て回った。

ウィンドーショッピングも面白いものだ。何も買わなくてもそれだけで楽しい気分になる。今の若者のファッション。そして、雑貨。目を肥やしておく事も時には必要である。そしてちよっと一息入れて、喫茶店で一杯のコーヒーを頼んで一服している時であった。

一人の男が近づいて来た。どうやら、芸能界へのスカウトの男らしい。わざわざ御丁寧に名刺を見せられた。

「こう言う者だけどさゝ芸能界に興味ある？君みたいな面白いと思うんだ。是非一度事務所に来てくれないかな？」

えらく乗り気で話し掛けて来る。しかし、悠治はサングラスを外し、

「あいにく、間にあつてますんで」

につこりと男に微笑んだ。男は、その人物が、既に芸能界で有名になっている彩華だと判り、あっさり身を引いた。そして、ちよっと慌てて笑いながら、

「あははゝそうだねゝではゝ」

手を振りながら、そそくさと去って行った。

また一人ここに彩華がいる事を知ってしまった訳だ。いつ、また騒動が起こるか判らない。だから早々にこの喫芥店を去る事にした。今の所は追っ掛け連中や、芸能記者には遭遇して無いし、つけられてスクープ狙いの者はいないようだ。ま、少々追っかけられてもビクともしない心臓を持ち合わせている悠治では有るが、奈々子みたいに巻き込まれる者が出たら困る。表参道を歩きながらそれは気になった。早々にこの原宿を立ち去るべきかも知れない。それに、合鍵も作らないといけないし。お供物を買って、あの場所に行かなければならない。そう考えると、早速この原宿を立ち去ったのである。取り敢えず、先にお地藏様の所に行く事にした。今なら学校は終わって無いし、彩華に出くわす事も無い。近くのコンビニでお供え用の毎大福を購入し悠治は直ぐさまその場所に行った。

厄介な事を言ってくれるよなゝこの地藏は。毎日通っている場所ではあるが、心の中は悪態をいつもついている。そうしないと、自分のこの状況を受け入れてしまいかねない。

始めは戸惑ったし、彩華の成長して行く身体を感じなければならぬい。『心は男だぞ?』

いつもトイレに行く時も、風呂に入る時も、凄く緊張する。目を閉じられればいいが、そんな器用な真似など出来ない。自然と目に入ってしまう。彩華には悪いが、これもしょうがない事だと、今では慣れて来ていた。

それに、彩華だって同じ境遇だ。自分の裸を見られている訳で……複雑な気分だ。ある意味裸の付き合いをしている訳である。彩華はどう思っているんだろう?その事は、全くお互い話そうとは思えない。照れくさいし、今さらな感じがしていたからだ。

もしかしたら、それも有って、悠治を男として見ていないのかも知れない。が、そこまで彩華が頭を働かせているとは思えない。色々考えていると、よけい腹が立っていた。あの時、お小遣いさえ持つ

ていれば！お腹が空いていなければ！しかし済んだ事を今さら言っても仕方ないので、祈りを捧げてこの場を速やかに去ったのである。時刻はもう、四時前。早く合鍵を作って奈々子を迎えに行かなければならない。電車を乗り継ぎ八王子の駅近くの鍵屋で、合鍵を作ると一目散、駅に止めておいた自転車で奈々子の通っている学校に直行した。

「奈々子迎えに来たよーんーちゃんと安静にしてた？」

「痛いのに安静にしてなきゃ困るのはあたしなんだよ？……当然じゃない！」

「なら、よろしい！」

まるで、母親のような接し方。またまたゲッソリしてしまう。そんな奈々子に、

「お姉さん？桐原さんにお姉さんが居るなんて知らなかった」

今朝、遠巻きに眺めていた何人かのクラスメイトがこれ幸いとも言つかのようになんて近づくて来たのである。

「あ、えつと……」

奈々子が返事に困っているのを、

「そうなのー奈々子を宜しくねー仲良くしてね？」

サングラスを掛けっぱなしの怪しい彩華は、口元を引き上げ微笑んだ。

「これから二週間、奈々子の足の怪我の為に送り迎えするので、皆さんにも協力してもらおう事になるかも知れないけど、御了解いただけると幸いだわ？」

彩華は、既にクラスの女の子に打ち解けている。サバサバしたこの女性に興味があるみたいだ。

そう、クラスの子達は、そんな明るい彩華に好意を持っているようだった。自分にはこういう接し方をクラスの友人に出来ない。だからちよつとそう言う彩華が羨ましい。でも、もしこの人物が彩華だと分かったら、こつはいかないだろう。直ぐさま引くだろう。彩華

の存在は、クラスの女性陣に嫌われている。奈々子のように。

「じゃあ、失礼するわね」奈々子、はい、鞆！」

鞆を受け取ると、少し前屈みになり、奈々子をおんぶする。そして、学校の自転車置き場まで歩いて行った。

「合鍵作ったから、この健は返すわね」

早速忘れないうちにと、鍵を奈々子の補助鞆にしまい込む。

「今日は、格闘しなかったの？原宿って人集まるしさ……」

心配をする必要はないが、自転車の後部に取り込んだ奈々子は自宅に着くまで、今日彩華がどう行動したのか気になっていた。別に奈々子が気にする必要なんかはないけれど、何だか気になった。

「あ、今日はなかったなあ」これだけ嚴重に変装してたらまさかって思うでしょ？」

確かにそうだ。こんなイカレタ格好してたらまさかって思うだろう。現に、クラスの皆だって騙されていた。

「でも、スカウトされちゃった」

「はあ？」

「サングラスとったら、そそくさと逃げちゃったけどね」

そりゃそうだ。でも、そのスカウトの人も凄い感性の人だなあとは思ったが、敢えて口には出せなかった。

それから少しすると、

「あ、ちよつと待って！」

突然軽快に走らせている自転車が急停止する。

奈々子は何故彩華が突然ブレーキをかけたのか解らなかったが、止められた自転車の荷台に座って待っていると、

「あはは」拾っちゃった」

まだ子猫なのか？ミャーミャー鳴きながら、彩華の腕の中にチョコと包まれていた。

「連れて帰ったら、だめ？ペット厳禁？」

薄汚れ綺麗とはいえないが、小さい身体で力なく鳴いている。お腹をすかしているのだろうか？捨て猫か？奈々子は不欄になった。ま

るで親に見捨てられた、今の自分の境遇を見ているかのようで。

「ペットは厳禁だけど、良いよ。ばれなきゃ良い訳だし……」

すんなり受け入れた。今までの自分だと、こんな子猫の一匹くらい気にも留めなかったであろう。可哀想。でも、力無きものは死ぬのが自然淘汰だ。そう思って、その場を立ち去っていたら。でも、それを彩華は見つけては世話をしたいと思っっているらしい。こう言う事で、奈々子の心を後押ししてくれる。それも全て彩華と言うキヤラクターなんだろう。

まだ出会って二日目。それなのに、奈々子の心は何だか満たされている。不思議な女性と出逢ったものだ。鞆は自転車の前籠の中。子猫は奈々子が抱きかかえ家路に着く。

玄関の鍵を開け、彩華は奈々子を部屋まで送り届けてくれる。内服薬は欠かさず飲んでいる。外用薬は、彩華が取り替えてくれた。もし、奈々子に姉がいたらここまでしてくれるだろうか？一人っ子の奈々子には想像がつかない。

甲斐甲斐しく世話をしてくれる彩華が本当の自分の姉だったら……
と思っ頭を横に振る。

私はこの人が嫌いなんだぞ？

自分勝手な彩華のおせっかいや、言動。なのに、今はそう感じなくなっている。どころか、身近に感じ始めていた。これって彩華を受け入れているってことなんだろうか？不本意だけど、だんだん混乱して来た。

「猫の餌買って来たいんだけど。ちょっと近くのコンビニに出て行って良いかな？」

彩華の言葉が聞こえているのかいないのか？奈々子は複雑に頭を捻らせていた。

「奈々子、聞いている？」

もう一度問いかけられて、ハッと我に返った。ドキドキと胸の鼓動が鳴り止まない。

「あ、うん良いよ！行つて来て、行つて来て！」

この様子を少し訝しげに見ていた彩華であつたが、

「……やはり迷惑なの？」

「そんな事ない！行つて来て！私がこの子猫見てるから！」

慌てて言い返した。迷惑がるのは、猫の事なんだろうか？彩華自身考える所が有るのだろうか？ちょっと自己嫌悪しそうになる。謝つては欲しく無いし。奈々子はそう思つて言つたのに当の彩華は、

「そうだよね〜迷惑だったら初めから断るもんね〜ふふふ」

騙された。やはり彩華は彩華だつた。心配する必要なんか無かつたんだと改めて思った。そして苦笑いが溢れてしまった。

彩華が買つて来た猫の餌は、コンビニに置いているお手軽な缶詰め
で……

「賢沢な奴よのう〜猫つて食べたら美味しいかな〜？」

含み笑いをしている彩華に、

「彩華ねえ〜食べる為に育てるなんて言わないわよね〜牛や豚じゃ有るまいし……」

冗談で言つてるとは思うが、彩華は何をやらかすか判らない。

でも彩華は、その缶詰めを別のトレイに移して猫に餌をやっている。猫の餌代は莫迦にならない。でも凄く楽しそうだ。何に対しても楽しそうに接しているが、どういう状況下でも、やはり彩華は楽しそう。そう楽しく生きてるんだと実感してしまう。

またまた羨ましく感じられた。自分はどうかろう？何でも楽しく感じられるだろうか？いや、そう言う感情は芽生えないだろう。そして、再び彩華を嫌っている自分の過去を振り返った。

初恋。それは、中学一年生の時だつた。

同じクラスの学級委員長だつた岸田明彦君。

今では生徒会長をやっている。まだ、少女だつた奈々子は何にでも優しく接してくれていた岸田に思いを寄せていた。

奈々子は余り器用じゃ無くて、感受性が高い方だった。だから、クラスの皆からも一步引いて接していた。全く友達がいなかった訳では無い。ただ、親友と言う存在には恵まれなかった。自分から話し掛ける事は無かったし、依頼心の方が大きかったのかも知れない。それは、家庭環境がそうさせた。

仕事事で、家に止まっている時間が少ない父親に、それを快く思っていないかった専業主婦の母。家庭を顧みない父では無かったが、奈々子を、そして母をいつしか遠退けて行ってしまった。そして、そのうち母の心は父から離れて行ってしまう、浮気相手に心を奪われてしまった。それがついには父にはばれてしまったのである。

親権問題。こう言う場合、父方に子供の権利を譲るものだが、母は断固拒否。仕事で、奈々子の世話ができるのか？それが当面の問題だからと言って、母方に養育するだけの財力も無い。それがこじれて長期戦に持ち込み今に到っている。

そんな奈々子の支えが、岸田であった。幼馴染みと言う訳では無いが、そんなちよつと意識暗めの奈々子に気軽に接してくれた。だから、期待していたのかも知れない。もしかしたら、岸田も自分の事を思っていてくれるのかも知れないと。

でも、岸田は誰にでも声を掛ける優等生。見た目も爽やかで、女の子には勿論人気があった。困った人には必ず手を差し出していた。それが、返って奈々子には不満だった。心の寄り所を奪われてしまっているかのようで……

もしかしたら、奈々子自身、独占欲と言うものが強いのかも知れない。自分だけを見て欲しいと言う気持ちがそうだ。だから、思い切って二年生の時、また同じクラスになったバレンタインデーの時、思いを込めて告白したのである。心を込めた手作リチョコと、気持ちをしたためた手紙を添えて。

だけど、その時岸田は、

「ごめん。僕、彩華みたいなタイプの子が好みなんだ。だから、君の気持ちは受け入れられない」

あつさり振られてしまった。

それからである。彩華に対するライバル心が沸き起こったのは……絶対彩華みたいなタイプにはならない！憧れの人が彩華だと分かっているがそう思った。ある意味、反抗心からだっただろう。

普通だったら好きな人の好みを研究するくらいするはずだ。でも奈々子は違っていた。着る服、考え方、振る舞い方。全て意識して彩華みたいにはならない！と思った。

そして、不運な事に、告白場面をクラスメイトに見られていたのである。

その事は、直ぐにクラス中に広まった。噂は、あらぬ事まで伝わって、奈々子が岸田に泣いてせがんだ。などと言うとんでもない物まてになつていた。クラスで人気者な岸田であつた為か、憧れている者は多い。だから、妬んだ者が、要らない尾ひれを付けて回つたらしい事は分かつた。

ヒソヒソ話しが独り取り残された奈々子の耳に入つて来る。普段仲良く話してくれた友人さえ離れて行つた。結局友人なんてそんなものだ……

世の不条理を感じていた。奈々子はその年が早く過ぎれば良いとさえ思っていた。そうすれば、春の新学期に向けたクラス替えが有る。このクラスメイトもそして、岸田とも離ればなれになれる。ひっそりとした学生生活も後一ヶ月間の辛抱だと、奈々子はその年は過ごす事になつてしまつたのである。

そんな過去を持つている奈々子には、彩華みたいな今光り輝く人気ある芸能人のゲームが余計に許せなかつた。何でそんなことをして恋人を決めなきゃならないのか？彩華が好きだと言えば、誰だって喜んで恋人になるであろう。でも、こんな性格だと逆に幻滅するか？実際接してみて、彩華がまさかこんな変人だとは思っていなかった。もっとお淑やかで、男性を引き立てて、後ろで励ますタイプだろうと思つていた。

それが……ギャップが有り過ぎて面喰らっている。

「性格隠すの上手いよね〜芸能人って、皆そうなの?」

ちよつと興味半分で訊いてみた。

「うん?さあ〜ね〜?人それぞれじゃ無い?それよりさあ〜この子に名前つけてやらなきゃね?」

子猫の顎を撫でながら彩華は幸せそうに笑いかけて来る。またはぐらかされた?でも、そうなのかも知れない。みんな仕事で自分を表現してる訳だし、テレビだけが全てじゃ無い事くらい考えてみれば判らなきゃならない。

じゃあ、彩華はそれをひた隠して今までいたのか?何だか虚しい人生だなと思つた。

「彩華はそれが地なの?あたしの前で、演技なんかして無いよね?」ふと心配になった。彩華は演技が出来るはずだ。なんたって、テレビドラマで女優も演じている。

何回か見た事が有る。見たくは無いけど、何故か彩華の出ているドラマは、奈々子の好きなドラマだった。嫌でも目に入るのだ。でも、感情を凄く作品に合わせて変えられる凄く柔軟な演技力は目を見張る事ができる。どうしても引き付けられるのだ。天才なんだと思う。これが血の繋がりがだったら母親譲りであろう。

「演技なんかする訳ないじゃん〜私はこんな奴よ〜」

内心悠治は焦っていた。何かばれるような事したかな?奈々子是不審がつてなかったし、別段変わりが無かったはず。莫迦な事はいくらもやってきたし定着させたと思つただけだなあ〜?もしかして勘が良いのかも知れないよなあ〜?

「そんな事考えるよりさ〜名前考えようよ〜名無しじゃ可哀想じゃん?」

またはぐらかされた。でも、今ここにいるのは、確かに彩華だし、出逢つた初めから知っているままの彩華だ。そう思い直すと、もうどうでも良くなった。

「ポチなんてどう?」

「それは犬につける名前でしょ……所でこの子、女の子かな?」

「うゝん？玉は付いて無いようだから、女の子じゃ無い？」

「彩華って下品だね……」

「え？じゃあどう言えば良いのよ？」

「そ、そんな事知らないわよ！女の子か男の子かそれだけ言えば良いの！」

やはり、彩華は彩華だ。そう思うと何故だか安心した気がする。不思議だ。この人といると、自然体でいられる。奈々子の心の中が軽くなっていた。

「じゃあ、ナナで行こう！」

「何だよ？あたしの名前から取るなんてー！」

「良いじゃん？ナナゝ奈々子が良いってさゝ！」

了解も得ずに名前を決めている。相変わらずの身勝手さ。

「あ、ダメじゃない！ナナゝおトイレはこっち！全くちゃんとしてけないとねゝ」

何だか腹がたって来た。そして、前言撤回したい気分になった奈々子であった。

#10月島

その頃の彩華は、学校の帰り道であった。いつも通り、お地蔵さんにお供物を持って来ている。ふと目の前に行くと、既に尊大福が供えられていた。悠治はこれしか供えないのですぐにここに悠治が来たのだと判った。

「すれ違っちゃったかなあ」

彩華は凄く気分が落ち込んだ。悠治に逢えるとは必ずしも思ってたが、それでも一纏の望みは有った訳で……そう考えているとまたまた、悠治に対し恨めしい気持ちがぶり返して来たのである。きつと私と逢いたがらないんだ。色々頭の中で考えられる事を思い巡らせた。でも、怒りが先立ち考えが纏まらない。一言で良いから恨みごとの一つを言ってやりたい気分だ。

明日は学校には立ち寄れない。仕事が入っている。今度の新曲の為のレコーディングが有る。

だから鞆の中からルーズリーフを取り出し何やら書きはじめるとそれをお供物の下に敷いた。明日もきつと悠治は現れるはずだ。だからその為の置き手紙を残した。

夕方の淡い日射しが彩華を包み込み、そして家路に着くようにと背中を押して来ている。だから、お祈りをしその場を去った。明日になったら、悠治のことが解りますようにと思いを込めて。

「彩華？この問題なんだけどさ？」

その頃の悠治は、奈々子の家庭教師兼家政婦をやる事になっていた。「何でこの公式じゃ解けないの？」

奈々子は余り頭が良い方では無かったらしく、宿題に追われていた。それをカバーするのが、夕食を終えた後の今日からの彩華の仕事となった。

「これはね、まず公式を使う前に一つ計算しておかなければならな

いの」

ノートの切れ端にその計算式を書き写す。

「あ、なるほど……」

スラスラと書き出されているその様子を見て、才色兼備って本当にいるんだな〜とか思いながら奈々子はその計算式をノートに書き出して公式を当てはめた。そして、その問題を解く事が出来た。

世の中は不公平に出来てるんだ……それが奈々子の心を落ち込ませる。

「わかんない事が有ったら、何でも言ってね？」

そんな奈々子の心情を汲み取るどころか、彩華はにこやかに微笑んでいた。その微笑みは嫌みが無くて、奈々子は少し反省した。勉強まで教えてもらっているし、家事もこなしている彩華はやはり凄い人物に思えたから。

「彩華は、学校に通わなくて大丈夫なの？仕事キャンセルするのはまあ解るけど、学校は行くべきじゃ無い？あ……でも、そんな事したら、学校がパニックになるかもね？」

「そうねえ〜行かなきゃいけないとは思うけど、行って逢いたく無い人物もいるしさ？勉強が遅れて単位落としても、行きたくは無いなあ〜」

珍しく、悠治は奈々子に本音を漏らした。別に知られて困る事は無いし、この問いに対する答えをはぐらかす必要は全くない。

「逢いたくない人物？彩華が逢いたく無い人物って一体どんな人？」

「それは秘密〜あ。ナナが寝てる〜寝顔が可愛いね？」

少し突っ込んだ話は流石に答えを貰えない。まだそこまでは話してもらえないんだと思ったら、奈々子は溜め息が出た。

「明日も同じ時間に起きた方が良い？」

そして、話をそらされた。

「……七時に起してくれたら良いよ。六時は早すぎるしさ。もう、あたしの通っている学校は判るでしょ？」

今日の朝のドタバタはこりこりだった。

「そう？分かった。じゃあ、奈々子の宿題も終わったようだし、また対戦ゲームしよっか！」

いつもの彩華がそこにいた。だから再び奈々子は彩華に付き合う事にした。

眠りに就く時は、奈々子がベッド、悠治は絨毯の上でと決まっていた。初めは交代制でと奈々子は勧めたんだけど、悠治はそれを拒否した。御厄介になっている身だし、奈々子が絨毯の上で寝る必要性なんて無い。悠治の男としての面子がその辺りに出ている。女の子に絨毯の上でなど寝てもらいたく無かった。

悠治には体に掛けるタオルさえ有れば十分だった。今は夏なんだし、よほど寝相が悪く無ければ風邪をひくと言う事も無いだろう。それにこういう待遇も面白い。何だか寢床の決まって無い自由人のようなだから、逆に今の悠治にとって気楽だった。

それにしても、あの時の奈々子の言葉は、今でも心に響いている。彩華には幼い頃からざっくばらんに接して来ても、それが悠治としての本心だと思われて来た。本心でも有るけど、それでも、悠治の心の中まで入って来ようとはしなかった。時間ってなんなんだろう？悠治の内心を暴く事が無かった彩華。なのに、まだ逢ったばかりの奈々子はその辺りを察して来た。

上手く自分を作っているハズなのに……それなのに、演技しているんじゃないかと訊き出して来た。自信が有ったからこそあの時ははぐらかす事で、何とか乗り越える事が出来た。バレたらバレたでそれはそれで良いのに。何だか肯定出来なかった。

その方がこの同居生活は上手く行く感じがしたからである、自ら安心して生活出来る場よりも、もっと刺激が欲しかったのかも知れない。ドキドキしながらそして、次の瞬間わくわく出来る場所。それがこの二週間生活で得られれば何かが変わるような気がしていた。そんな事を考えると、今頃彩華が何を考えているかが気になった。きつと、お地蔵さんのお供物には気が付いているであろう。悔しが

っているだろうか？それとも心配しているだろうか？悠治は、前者だろうなと苦笑いする。

学校でも、家でもきつと自分に考えを走らせているだろう。一つの事にしか頭を働かせる事が出来ない不器用な彩華だから……だからこのゲームは一つの賭けだ。さあ、彩華は自分を捜し当てられるだろうか？

夜は更けて行く。今日の事を考える事も出来なくなった今、悠治は固い床を感じながら、眠りに就いた。

「おい悠治？一昨日渋谷に彩華が現れたってさ。で、昨日は原宿だよ」

レコーディングスタジオでプロデューサーや各スタッフに挨拶を交わして回った彩華は悠治の動向をここで知り得た。

「どこだった？」

「だから。渋谷と、原宿……」

問い返されて、英二は何だか心ここに有らずの悠治に少し苦笑いしていた。

「渋谷では、乱闘騒ぎを起したらしい。でも彩華が勝ったらしくって、ファンがすごすごと諦めたってさ。原宿では起こらなかったらしいなあ」

「……ふん。あ、でも、英二ってさ、一体何処でその情報を手に入れているのさ？」

一瞬ホツと胸をなで下ろしはしたが、それでもまだ落ち着く事は出来ない。あの悠治のことだ、次もまた事を起さないとはい限らないからだ。

それにしても、自分では知り得ない情報を英二が知っているのは腑に落ちない。悠治は彩華の幼馴染みで、且つ同じ秘密を持ち合わせている同士だ。その本人が知らないのに、英二は事もなしげに知っている。

「インターネットだよ。悠治はやらないのか？それに、彩華お前に

は何も連絡よこして無いのか？」

「そうか、インターネット……僕やらないし。当の彩華からは連絡ないし……」

インターネットは情報の溜まり場だけど、わざわざやる環境を作って無い。そう言えば、悠治はインターネットをやってたな……あの時も、電源切ってたようだし。それで、慌ててたんだと気が付くと、イライラした感情が沸き起こった。

彩華自身に何も悟られないようにしてまで、手を回してコソコソしてたなんてと思うとよけい腹立たしくなった。彩華はいつも悠治に隠し事などした事なかったからである。

「なあ、悠治？そんなに気に掛かってるんだったら、彩華の行方捜し俺も手伝ってやろうか？レコーディングどれだけ掛かるかは判らないけど、力になってやるよ……」

何故英二が語尾を弱めたのかは解らないが、彩華は、英二が進んで言ってくれた事が有り難かった。

「有難う」

彩華はにっこりと笑った。

「でも一つ言っておくからな？俺は彩華の為にするんじゃない。悠治の為にするんだと言う事忘れないでいて欲しい」

今度は真直ぐ彩華の目を見てそうはつきりと言った。一瞬シリアスにそう言った英二がどう言うつもりでそう言ったのか不思議だった。でも、彩華は嬉しかった。仕事以外でも彩華が英二と一緒にいられるのだと思えたからであつた。

同居三日目。悠治は月島に本場のもんじゃ焼きを食べに行く計画を立てていた。昨日買いだめしておいた、東京ぶらり歩きのカイドブックを見ながら既に心に決めていたのである。

この日も変装ばっちり、上から下まで真っ黒な服を身に纏い奈々子を学校に送り届け、自らの時間を有意義に使う。電車を乗り継ぎ一人で近場の旅行。一人と言う時間がまた一段と楽しい。何処で

も人の目にさらされて来た事を思うと、こういう時間って実は必要だったんだと改めて思えるほどにその事に思いを馳せた。

ガイドブックで気に入った店に入る。香ばしい匂いが悠治の心を掻き立てる。早く食べたいなと思った。

もんじゃ焼きの心得は余り理解して無くて悪戦苦闘していたが、周りを見渡しながらか、どうすれば良いのかは把握出来た時にはもう既に箸の使い方は一流だった。

満足した後は、横浜まで足を伸ばした。そして、桜木町の中華街に足を向ける。面白い雑貨が至る所に有り、気に入ったものを買ひ揃えると中華まんを頬張りながら歩く。

今日はこの中華まんをお供物にしようと思った。ちょっとばかり賛沢かと思えたけれど。

そして誰も、自分を彩華だとは気が付かない。

悠治は満悦していた。が、ちよつと気に入ったサングラスに手を掛けそれを掛けようとした時、視線が自分に注がれるのに気が付いた。店の中だった為、直ぐにその場を離れる。その後直ぐさま中華街を離れようと、電車に乗り込む時、何人かが自分を追っかけるように電車に乗り込んで来たのを感じとった。

実際慌てた。が、どうにか振り切ろうと思った。まさか、電車の中で乱闘騒ぎは出来ないだろう。そこまで、一般人を巻き込む事は出来ないし、追っ掛けの者達もそのつもりは無いハズだと信じたい。しかし、思惑は外れ駅構内でその乱闘は起きてしまった。乗り換えの駅で降りたとたん、一気に押し寄せて来たのである。ここは流石にまずいと思い、悠治は駆け出した。事故が起きたらとんでもないと言うその思いから。

そして、あの宣伝の中にこういう事を想定して忠告しておかなかった事を後悔した。悠治が後悔などする事は滅多に無い事ではあったが、それでも流石の悠治もこの状況下に置かれると後悔せざる負えなかった。

そんな中、一縷の望みは次の電車の中に紛れ込む事だった。幸い今

日は高いヒールの有る靴は履いていない。だから動きやすい。瞬発力に関しては人一倍自信が有る。それに、細い身体は人込みを掻き分けるには良い。

駆け込み乗車にはなつたが、スルリと発車する直前のドアをすり抜ける。それを追っかけていた何人かが見逃さず乗り込む事は出来たが、混んでいる電車の中までは悠治を捜し出す事は出来ない。悠治はその事を考えると、少し安心した。ホッと肩をなで下ろしていた。新宿まで出るとまたもや乗り換え。中央線の電車に乗り込まなければならぬ。そして降りたとたん、また視線を感じた。どうやらその中の数人は諦めた様子はないらしい。中央線の電車まで乗り込んで来た。でも、一応常識は有るらしく、空いた電車の中で事を起す事は思っていないらしい。安心出来た。そして、八王子で電車を降りると、一目散に改札をぐり抜け、自転車置き場まで駆け出した。取り敢えずその事でもう追っかけて来るものはいなかった。でも、ここで自転車に乗ってる事で八王子付近に彩華が拠点としている隠れ家が有る事はバレてしまった。

明日からは待ち伏せされる恐れが有る。が、だからと言って、逃げ出す事は出来ない。それは、奈々子に対する礼儀であると思つている。乱闘に巻き込まれ怪我をした奈々子を放つておいたら自分の汚券に関わる。いい加減だけど、これだけは守りたかった。だから、直ぐさま奈々子のいる学校に足に向けた。

#11 英二からの告白

今日はまだ彩華はここへは訪れていないらしい。しかし、昨日のお供物が有る所を見ると、きちんとこの場所には来ている事は伺える。そして、そのお供物の下に敷かれている紙切れに気が付いた。それを手に取る。

『悠治へ。今何処にいるの？連絡下さい！』

ただそれだけの短い文章だった。連絡取りたがるのはよく分かっている。その辺りの彩華の考えはお見通しだった。でも、悠治はその紙切れをポケットに押し込み笑っていた。

携帯は自宅に置きっぱなし。絶対連絡が取れないように封じ込めておいた。でも、こういう形で連絡を取れるようにして来た事は、意外に彩華の頭も回るものだ。と感心はした。だけど悠治は彩華がその足で自分を捜し出さなければならぬようにしむける事にした。いつまでも甘えられては困る。彩華は依頼心が強すぎるのだと思ったからであった。

「さて、行くか！」

悠治は中華街で買い込んだもう既に冷めきっている中華まんを供えると、思う事は他には無いと踵を返し、即座に奈々子とナナの待つ家へと足を向けたのである。

「たっだいまー」

夕食の買い出しを終えて帰宅した悠治は、奈々子のエプロンを借りてキッチンに直ぐさま足を向ける。

「ごめんごめん！今すぐ作るからね！お腹減ったっしょ？」

「……野暮用は済んだの？」

「そんなものはすぐ済んだわよ！それより、この海老はどうだね？サラダだけど、オードブルのマリネ風にしようかなって思ったのよ！ふふふん」

鼻歌紛れの彩華は、奈々子の思感には乗らない。彩華はいつもの通り気持ち良さそうに料理を始める。

少しくらい、本音を吐いても良いのと思う。いくら、ゲーム中だと言っても年下の女の子の……それも自分の事を嫌っているであろう女の子の身の回りの世話なんてしたく無いはずだ。と自分だったら思う。義務感なんだろうか？でもこの彩華にそんなものを感じる事が有るだろうか？どう考えたってそんな気の利いた事は考えないだろう。

そんな事を考えていると、宿題が手に付かない。思わずテレビを点けた。

テレビは今の時間はニュースを放送していた。ちゃんと見なきゃならない事だけど、今はそんな気分じゃ無くて、思わず民放に変えようとそのリモコンのスイッチを切り替えようとした時、自らが住んでいる八王子の駅前の画像が目に飛び込んで来た。

「え？何か事件でもあったの？」

思わずスイッチを替えることをやめた。

『今日、この八王子に今話題の彩華が現れて自転車で走り去った模様です……』

アナウンサーはそんな事を報じていた。奈々子は絶句してその画面とアナウンスを聴いていた。

ワイドショーでも無いこんなニュースに何故彩華のことが報じられているのか？まさか、何か事件を起したの？

料理に夢中の彩華の後ろ姿を目で追った。でも、今日の彩華はそんな特別な事が有ったようには思えない。野暮用とは言ってたけど、それがそうとは思えないし……

『それでは、目撃者の一人に声を掛けてみました……』

『中華街で彩華を見たんよ。そして追っかけたら、この駅で降りたんすよね』

『追いかけたって事は、あなたはあの、ゲームの参加者でしょうか？』

『そうっすよ！こんな機会ないしさ！始めはマサカって思ったすけど、みんな追い掛けてるしさ。これは絶対そうだって思ったね。で、上手く逃げられたってわけ！ちくしょう！って感じっす！』

『では、放送席お願いします』

画面は既にスタジオに戻っていた。

『彩華旋風って所でしょか？まだ大きな事件にはなっていないよんですが、始めて三日目ですから、まだこの話題は続く事でしょうね？あちらこちらで目撃証言は有るようですが、当の本人の彩華さんはこの先どうするつもりなのでしょうか？まだまだ目が離せません。では次の事件です……』

奈々子は次の事件の事などもう頭に入ってた。どうしよう？と言う気持ちの方が大きかった。まさかこの家まで押しかけたりしないだろうか？そんな事になったら、対処しきれない。

「彩華！今日中華街行ってきた？」

次の瞬間、直ぐさま奈々子は問い掛けた。料理が出来たのか、彩華はお盆に乗せそれを運んで来た。良い匂いがする。

「あ、行って来たよ！凄いわね。何で分かったの？」

「今、ニュースで報じられていたわよ！それも、八王子駅まで！どうする気なの！」

奈々子は、バレないようにするからと言う条件付きで彩華を受け入れた。でも、こうなったら、『ウカウカ』出来ない。

「ニュースで？ありやまた困ったね！あ、冷めないうちにどうぞ？」絨毯の上に正座すると、彩華は箸を操り既に食べるモードに入っている。緊張感なんて微塵も感じられない。そんなのんびりした彩華に思わず乗せられて、

「あ、そうだね……」

一口炊き込み御飯を口にする。

「美味しい……じゃなくて！バレたら、ここにまで押し駆けて来るじゃない！」

乗せられてしまった奈々子は、そんな彩華の様子に苛立ったかのよう
に返した。が、全く気にしていない様子である。

「奈々子は私を追い出したい？」

突然目を瞬かせて懇願するような視線を奈々子に向けてきた。これ
は、彩華の罠だと思っただ、ここを直ぐに出ていけなんて言える訳
ない。追い出して困るのは奈々子自身だ。

「迫り出したい訳じゃ無いけど……その……目立たないように行動
出来ない？」

一体外での彩華はどう振る舞っているんだろう？自分の知らない、
目の届かない所での彩華は？

「目立たないように行動してるんだけどなあ？滲み出てるのかしら
？」

「あたしには、変装してるところから既に目立っていると思うけど
？普通の服着たら？その方が溶け込めると思っけど……」

「普通の服ねえ」

食事の途中で、彩華は自らの服を取り出し始めた。

「これなんかは？」

「……」

「じゃあ、これ？」

「……彩華？訊いたあたしが莫迦だったわ」
どの服も普通の服には思えなかった。

「うーん。もう外出禁止にしようか？」

奈々子は頭が痛かった。

「外出禁止になったら、奈々子を送り迎え出来なくなるわよー私は
嫌だもん！」

それもそうだ。彩華の言う事は正しい。

「じゃあ、せめてここ、八王子から出ない事にしたら？」

「それは無理。私はそんな事出来ないもん。色々用事も有る訳だし
？」

既に関き直り始めているらしい様に見えるかも知れないが、悠

治には大事な毎日の日課が有る。

「そんなに出不きやならないの？大人しく静かにしておけば良いだけじゃない？」

奈々子はそんな彩華になんとか思いとどめられる事を考えてもらいたかったが、そう言う訳には行かないらしい事は分かった。それが野暮用なのだろう。

「やりたい事はやらなきゃ勿体無いじゃない？」

「勿体無いって……人生長いんだよ？まさか、不治の病とかいうんじゃないよね？」

嫌味のつもりだったが、

「そんな所かも知れないなあ〜人生長いようで短いんだもんね〜楽しむ事はいつでもマジでやりたいのよ」

不治の病なんてのは嘘だろう事はすぐに解る。ただの言葉のアヤであるう。だけど奈々子には解らない。何をそんなに思う事が有るんだろう？

でも、悠治は彩華としての今の自分の姿が後一ヶ月を切っている事を知っている。今が正念場だ。自分と彩華の問題は解決出来ない。それにまだ、この場所を突き止められた訳ではない。ギリギリまでこの生活を楽しみたい気分だった。

「大丈夫よ。奈々子は何も考えずにいて良いよ。私は何とでもなるからさ？」

悠治は再び食事を摂る事にした。これ以上言っても水掛け論だと察していた。

その事は、このゲームの被害者である奈々子にも判っている。だけど、間違っていると思う。キスで……、ゲームなんかで自分の好きになる相手を決めるなんておかしい。一体彩華の頭の中はどうなっているのだろうか？もしかしたら、エイリアン？地球外生物なのではなかるうか？

そこまで考えていた時、ふと我に返った。何で、このあたしが彩華

のことを心配しなくちゃならないんだろう？ そうだ、今こういう事になっている時点で、迷惑を被っているのは奈々子自身だ。怪我させられて、家にまで人を入れ込んで。

そりゃまあ、彩華の御飯は美味しいし、勉強見てもらえるし。得してないとはいいい切れないが、奈々子にとってみれば、恋敵みたいなものである。それなのに何故？

食事を摂りながら考えてはみるが、全くその答えは出て来はしない。そんな奈々子に気が付いてないのか？ 彩華は色んな事を話し掛けて来る。奈々子はその事に適当に答えてはいたが心はそこには無かった。

彩華のことを、受け入れている？ それとも、気に掛けている？ 何でこんな気持ちになっているのよ！ 奈々子は、混乱した頭で片づけられている食器類を目で追っていた。

悠治、来たんだ…… お決まりの苺大福は無かったが、彩華は、夜にこのお地蔵様の所に来て悟った。手紙が無いからであった。なのに、それに対する返事は何処を見ても無い。徐に自らのズボンに隠し持っている携帯の着信を見てみても、悠治からのものはなかった。意地でも彩華には逢いたくは無いらしいし、連絡を取るつもりも無いらしい事がこれではつきりした。

「何考えてるのよ！ あの莫迦」

一瞬そう叫びそうになったが、突然の着信に気が付き、受話器をとった。思わず携帯を落つことしそうになった。

「もしもし、悠治か？」

着信の名前と、その声で直ぐに英二だと分かった。

「今話して大丈夫か？」

「あ、うん。外に出てるけど大丈夫だよ？ どうしたの？」

さっきまでの憤りが消え失せていた。

「あのな、彩華が八王子駅周辺に現れたって事だぜ？ ニュースで言ってたから確かな情報だろう。ネットでも大騒ぎみたいだな」

「は、八王子？何でそんな場所に、ゆ……彩華が？」

思わず悠治と言ってしまいそうになった。

「さあな？自転車で逃走した所を見るに、その辺りに隠れてるんだろ？悠治？行ってみるか？付き合うぜ？」

「あ、……うん。そうしたいけど、明日から二、三日は僕の学校試験なんだよ……」

「あ、期末試験か……そう言う時期なものな。じゃあ、俺が行って張り込んで来ようか？」

「でも、英二の学校は？試験無いの？単位は？」

何だか気が引ける。これは悠治との問題なのに……こんな形で、ましてや彩華がやらなければならぬ事なのに。

「俺の方は試験来週からだから。別に問題は無いさ。悠治に問題なければ、明日から八王子駅周辺を当たってみるよ」

「でも、悪くない？せつかくの学園生活だろ？僕がいる訳でも無いのに、そんな……」

「悠治に問題無いんだったら、気にするなよ？これは俺がかって出てるんだ。気にしなきゃならないのはもっと他に有るぜ？彩華とられてしまうよりは、良い事だろ？」

英二は、彩華の想いを知らない。だからこんな事を言ってしまうるんだろ？……ちょっと切なくなった。

「あと、言っておかなきゃならない事もある。俺……お前の事が好きなんだぜ？」

「え？」

耳を疑った。今なんて言った？

「二度言わせるなよ……だから、お前が好きなんだってば」

「え？……え……？」

突然の告白に訳が解らなくなった。それは、恋愛対象として言っているのか？それとも友情なのか？

「それって、告白してるって事……なのかな？僕、男だよ……」
いや、中身は女なんだけど……

「三度聴きたいのか？安っぽくなるぜ？」

「でも……変じゃ無い……？英二って、男が好きなの？」

「……お前だから好きなの！こつちだつて悩んでたんだ。でも彩華には取られたく無いって気持ちの方が勝つて……今言っておかないと、何だか取り返しが付かない気がしてな。それに、お前が悩んでいるのを考えると、悠治は彩華が好きなんだろう事は、一目瞭然だし？で、お前の気持ちを知りたい。嘘は付くなよな？」

「ぼ、僕は……」

言つてしまつて良いんだろうか？でもこんなの変だし……彩華の心は揺さぶられた。心は両思いなのに、嬉しく感じられない。それは、悠治の皮を被っているからなのか？

この先、入れ替わつた時、英二は悠治を好きになつたままでいる事になるんだろうか？そんなのは許せない。し、悠治もそんな事は望んで無いだろう。返事が出来ない。でも今しておかないと、この先こんな話をできる機会は無いかも知れない。

「僕は、その……彩華のことは……何とも思つて無い事は確かだよ。それ以上の事は何も言えないけど。でも、英二の事は好きだよ。友人として……でも、解らない……何て言えば良いのか……」

最善の事を言おうとして自分でもこんがらがった。こんな時、悠治がいたら何て言うだろう？自分を上手く操る事ができる悠治なら？一体どう対処するだろう？そう言えば、悠治から恋愛の相談なんてされた事など無い。その必要性が無かつたからなのか？それとも、自分で解決して来たのだろうか？自分が知らない悠治がいる事に気が付き、少し虚しく感じられた。

「悠治？困っているのか？……悪かつたな。でも、今言っておかないと、こちらの気持ちを彩華にぶつけそうなんだ……それだけは分かつていて欲しい。女に焼きもち焼くなんて変だよな？ははは……」
乾いた笑い声だった。

「良いよ。今の言葉で十分だ。明日から暫くの間、彩華を張つてみる。じゃあ、また連絡する」

「あ、うん……ありがとう」

結局、自分ではどうする事も出来ず、英二が話を切り替えてくれた。自分の性格を知っているからだとそう感じると、よけいやるせなかった。

何でこんな事になったんだろう？今のまま自分が悠治として生きてら、英二は自分の事を愛してくれるのか？だったら、このままでも良い事なのかも知れない。

でも、それには覚悟が必要だ。自分はもう彩華として生きて行く事は出来ない、そんなのは嫌だ。

「悠治……聞いて欲しい事がたくさん有るのに……」

彩華は天を覆う星空を一度見上げて、そして家路を急いだのである。

#12 探偵・アンティーク・ゲーム

四日目。それは昨日と何も変わらない朝だった。忙しそうに朝御飯を用意してくれる彩華は、今日の予定を考えながらイソイソとしている。

「今日も出かけるの？」

「そうねーちよつと出かけるかもー駅前にアンティーク屋さんがあったでしょ。結構店構えがイケてるし？そこで面白い物ー奈々子って、ゴスロリ系っしょ。そう言うので私が見繕って買って来てあげるよ」
「買って来てもらっても、使えるものにしてね……彩華のセンスってちよつと考えものだもの……」

「まあー！失礼ねえーこの私のセンスを疑うの？」

「今着ているもの考えれば、誰でも疑うわよ」

今日の彩華は、ヒッピー系の服装をしている。この服装から考えて、ゴスロリを理解出来るとは思えないからだ。

「ゴスロリは確かに理解出来て無いわよ？でも、奈々子に似合う物を買ってくれば言い訳じゃ無い？簡単、簡単！」

「簡単って……」

奈々子はそこまで言っただけを嚙んだ。確かに変な格好をする彩華ではあるが、それでもモデルでデビューしてる訳で。着こなしは上手い。センスが無ければあの業界で生きて行く事なんて出来ないはずだ。

「良いよ。任すわ」

結局奈々子は肯定した。それに昨日の今日で、遠出するような事はしそくに無い。ホツとしているのも確かだった。

「じゃあ、決まりねー！さあ、学校急こう！」

彩華はそうと決まったら奈々子をおぶってドアを開けた。また一日が始まる。

悠治は奈々子を送り届けたその足で、駅前近くに有るアンティークショップを訪問した。外観は今時の子達の心を揺さぶるような、そんな店構え。思わず足を踏み出した。が、オープンするまでに時間がまだ有る。考えてみたら、普通お店って言うのは十時から開くものであつて……今はまだ八時前。仕方ないので、一度奈々子の家に戻り洗濯物をし、ナナの世話をしして出直す事にした。

再び訪れた時は、もう人がその店に足を運んでいた。悠治も負けじとその中に入ると、色んな物を見て回る。しかし、今一つこれと思うものが無かった。外観と人の入り具合に惑わされたなと思い、仕方なく中央線に乗り、吉祥寺駅まで出る事にした。あの南口からさほど行かない所に、確が良いアンティークショップが在ったなと思ひ出したからである。

しかし、その背後に彩華のゲーム参加者が目を光らせていた事など思ひもしなかつたのである。

悠々自適に奈々子の言い付けなど忘れて少し遠出をしてしまった悠治は電車に揺られながら、イメージを膨らませていた。こういう時間は楽しい。他人の為に何かをプレゼントするって言う楽しみはなかなか味わえなかつた。

今までもこういう事が無かつた訳では無い。彩華に何かプレゼントを考えると、しかし、イマイチピンと来るものが無かつた。それは、自分の姿をしている彩華であつたからかも知れない。

でも今度は違う。ちゃんとした女の子だ。だから、イメージがすんなり出て来ていた。それも、ゴスロリ好きと言うハッキリ趣味が判る子だからかも知れない。

電車は目的地へと着く。悠治はすぐに腰を上げ南口から街に降りようとしたその時、

「彩華！ いざ！」

数人の男どもが後方から走り込んで悠治の回りを取り囲んだ。

「もしかして、ゲームの？ 駅がバレちゃ仕方ないわね」で、ここで

やる？それとももつと広い所に行きましょうか？」

周りを見回す。ロータリーこそ無いが、狭い道に建物が並んでいるここでは対処出来そうも無い。

「人の迷惑つてのも有るのよねー井の頭公園まで走って行こうか？」
と言うと、直ぐさま先を目指して走り込んだ。

男どもは我先にとその後を追う。そしてその影に隠れて変装した英二が後を追った。

「ここまで来れば、ゲーム出来るわね？じゃあ、スタート！」

彩華は以前と同じくサングラスと上着を取ると、軽快に立ち回りする。今回は、力自慢の者が多く苦戦気味だったが、自ら築いて来た技で全てなぎ倒し、顔に思いつき「x」印を付けてやった。

所々、傷が出来て血が滲み出ているが、そんな事感じる暇も無い。

この騒ぎに参加者が増えて来た為である。英二は、その乱闘騒ぎを直視していた。

「見かけと違って勢い有る奴だなあーまあ、この調子だと先が解るな」

その予想に反せず、悠治は全ての挑戦者に「x」を付け終わった。考えてみると、渋谷での路上のゲームより激しかったような？

「はい。お終いー残念だったわね？もう、挑戦は出来ないわよ？心してその顔を毎日見る事ね？」

せせら笑いながら悠治は、もと来た道を戻る。そして、目的を思い出し、店探しを始めた。記憶を辿りながら……

そんな、悠治の後を英二は気付かれないように追い掛ける。何だか探偵にでもなった気分だった。が、これも悠治の為だと思うと、彩華の行動を観察しなければならない。ある意味これは重要任務なのである。

「有ったーここだ！」

店の建物自体は古びているが、中は色んな貴重品を扱っている。悠

治自身も何度か訪れた事が有る。ある意味お気に入りのお店だ。そして色々見て回った時、ある一点に目を引かれた。

「これ良い！絶対奈々子に似合うよ！」

ボソリとこぼしながら、悠治は自分で試着してみた。首回りピッタシの黒色のリボンの先に、十字架が施されているチョーカー。一見何て事ないかも知れないが、銀色の十字架の装飾が精密で綺麗に施されている。

「これにしよう！」

悠治は楽しそうに何度もヒッピー姿でそのチョーカーを身に着けている。その様子を英二は不思議そうに隠れて見ていた。

『何故あの格好で、チョーカー？』

疑問が溢れて来る。あの服装には絶対合わないと思ったからである。というか、彩華には似合わない品物だ。もしかしたら、誰かにプレゼントするのか？それなら納得出来る。

物陰から見えていた英二ではあったが、お勘定を終えて店から出て来る彩華に気が付き、直ぐさま身を隠す。

『バレては無いようだな？』

確信を持つと、彩華がまた吉祥寺を離れんとして電車に乗り込むのを見届け、その後、隣の車両に乗って追った。

彩華は真直ぐ八王子駅で下車した。英二もその後を追う。すると、時間を気にしているのか？彩華は腕時計を見ていた。そして、近くのスーパーに足を運んだのに気が付き、慌ててその後を追う。

「人参に、ジャガイモ、牛肉に玉葱……と」

この食材で何を作るかは料理をしない英二にもすぐに分かった。カレーか、シチュー。でも、シチューって事はあり得ないだろう。季節はもう夏に入ろうとしている。

キャッシュャーでお金を払うと、普通に袋に詰め込み、そのまま店を出た。警戒心が無いのか、あちこちの店並みを見ながら行動している。そしてまた時計を見ている。何か用事でも有るのであるのか？

それとも約束？英二は何度も彩華の後ろを気にしながら歩く。すると、近くの自営の本屋に入った。

ここでは、雑誌を片っ端から読み漁っていた。ジツと隠れて観察する訳にもいかないし、英二も近場にあつた雑誌を手に取り読む振りをしながら観察する。時間はもう四時前になっていた。昼食も摂らず、彩華は平然としている。お腹は空かないのか？普通摂る物を摂らないと、人間イライラするものだが、どうやらそう言う様子もない。ただジツと熱心にのめり込んでいる。が、また時計を見ると慌てるかのように、店を出て行つた。英二もその後を慌てて飛び出した。

彩華は、そのまま駅近くに止めている自転車に跨がると、買い物袋を前籠に乗せ走り出した。英二はたまたまその道脇に止まっているタクシーを呼んで、彩華の後を追うように促した。

一体彼女は何処に行くと言つのだろうか？これは、興味でも有り、悠治の為の搜索だ。

別段問題は無いのだが、何故かこのまま追いかけていいものだろうか悩む。でも、ここまでやってしまったからには、最期までやり遂げなければ……その一念で彩華を追つた。すると、彩華が近くの中学校の門をくぐり抜けて入って行く所を確認し、タクシーを止め、そこで降りる。

校門の所には『美空学園』という名前が刻まれていた。

流石の中に侵入する訳にも行かず、その場で彩華が出て来るまで待っていた。そんな中数十人の生徒達がゾロゾロと出て来る。ここは私服可龍な学校なんだと思ひ少し安心した。なるべく目立たないように気を配りながら、時々中を覗き込む。サングラスだけの変装だけど、自分が英二であるという事は誰も気付かないようだったのでホッと息を吐く。

それから待つ事二十分。彩華が自転車に、一人の女の子を乗せ、出て来たのを確認する。素早く走り出て来たので、その後を追ひ掛け

る事は出来なかったが、情報を得る事はできる。その後から出て来た一人の生徒に、今出て来た二人の女性は誰なのか？それを尋ねると、

「ああ、あの子？うちのクラスの桐原奈々子って言う子」で、運転してたのはそのお姉さんだってさ。何か奈々子が怪我したとかで、ここん所ずつと送り迎えしてもらってるってさ。お姉さんスツごく面白い人でさ。」

たまたま問いかけた女生徒が同じクラスの子でタイミングは良かった。色々と情報がとれる。が、

「ねえ、お兄さん。英二に似てるって言われない？」

ヤバいと思いそれ以上は問いかねず、英二は近くに有る公道に出てタクシーを拾った。

何故、嘘を付いてまでこんな事をしているのか？彩華に妹がいるなんて話は聞いた事は無い。何かを隠しているのだと思う。怪我している、その桐原奈々子という女の子の為に、わざわざ動いていると言う事は、それなりの事が有ったはずだ。

タクシーの中で、色々考えていたが結論的には、彩華と桐原奈々子に怪我と言う共通点で接する何かが有った事だけは何う事は出来たのである。

「はい！プレゼント」

彩華は、わざわざ買ってきたチヨーカーを奈々子に手渡した。

「あ、この装飾、素敵！」

中を開けて取り出した瞬間、奈々子は喜んで身に着けようとしたが、
「でも、これ、本当に良いの？貰って……」

「その為を買ってきたんじゃない！着けてみせてよ」一目でこのチヨーカー奈々子に合うなって思ったのよ？自慢自慢！」

「あ、ありがとう」

奈々子は嬉しそうにそのチヨーカーを身に着けてみる。今日の黒いフリルの服にも合う。そう思った。

「彩華。センス良いね。何で分かつちゃうんだろう？」

「侮るなかれ！私を誰だと思っているの？」

鏡の前に座っている奈々子の後ろに立って、彩華は腰に手を掛け納得した表情でニコニコ笑っている。鏡越しでその様子が分かった。

ので、ちよつと照れくさかった。今の私の顔、笑っていたものね……

……バレちゃったかな？素直に喜んでるの……

「さて、夕食の準備するね。あ、その前に洗濯物入れなきゃ。ナナ、ちよつと退いてね？」

奈々子の気恥ずかしい表情を汲んでか、彩華はバタバタ動き始める。

「判ってるみたいだね……」

同居生活まだ始まったばかりで、こんなに身近に感じるなんて、嬉しいのか悔しいのか、もう解らなくなってきたけど、奈々子は、この彩華を完全に受け入れていた。嫌っていたのは事実だけど、本物はこんな人なんだって知った時から本当はもう受け入れていたのかも知れない。

実際、暴言は色々吐いて来た。でも、彩華はそんな言葉にも動じない。ごく自然に（ちよつと問題ない所が無いとは言切れないが）接する事ができる。

その内、彩華に自分の本当の気持ちが話せる事が有るだろうか？友達の人として接する事が可能かどうか？ちよつと考えて、試験勉強の用意をし始める奈々子であった。

「夕飯出来たよ。今日はカレーとポテトサラダでい！」

一時勉強を中断して、テーブルを挟み二人は晩御飯を食べはじめ。そして、ちよつとテレビを点ける事にした。

『本日、この吉祥寺で、彩華のゲームが繰り広げられる事件が有りました……』

ニュースの時間だった。アナウンサーは、流暢に話している。その事件を知り、奈々子は思わず口の中の物を吹き出しそうになった。

「彩華！」

「……はい」

奈々子に釘を刺されていた事をここではらされてしまった。彩華は取り繕うように、

「だつてさゝあのお店、私がこれって思う物が揃って無かつたんだもの」

言い訳がこうだと奈々子も怒る気が失せるが、ふと、奈々子は彩華の腕と手を見る。

「何？怪我してるの？」

所々切り傷、擦り傷が目に入った。

「何て事ないよゝ仕事中つて訳じゃなし？このくらいゲーム挑んだんだから当たり前でしょ？」

のほほんとしている彩華の顔を見て、一言引導を渡した。

「明日から外出禁止！絶対禁止！何が有っても禁止！」

「えーっじゃあ、奈々子の送り迎えは？」

「……それ以外禁止！」

「買い物あるじゃん！」

「買い物は許す！でも、直ぐそのスーパーで！」

奈々子の顔が見る見る真つ赤になっていた。

「じゃあ、分かった……そうする……」

バツが悪くなつて、悠治はそれを受け入れた。けど、隠れて何かしようつて思っていた。奈々子の目が届かない範囲で……

まず、地蔵の所には行かなければならない。奈々子を早く寝かしつけて、または早朝の行動。これだけは何が有っても欠かす事は出来ない。

「何か企んでも、絶対阻止してみせるわよゝあたしをなめないよぅに！」

「へいへい」

とにかく、返事だけは返してきた。

奈々子にしてみたら、実際土日しか彩華の行動を見守る事など出来ない。その他は、学校が有る。見届ける事は出来ない。分かつてい

るけど心配になる。大怪殺でもしたら……

「そうそう。捻挫少し良くなったみたい！」

そこまで考えて、奈々子は話を摩り替えた。

「どう？腫れが引いて来たんだよ？びっこはひくけどさ。見て？ちよつとずつだつたら歩けるの！」

食事が終わった奈々子は、その場に立ち上がり彩華の横に座って足首を見せる。

「あ、本当々大分良くなったね」

足首の腫れが目立たなくなつて来ているのに気が付き、彩華は目を見開いて喜んでいた。

「彩華さーリハビリがてらに、少しずつ歩く練習したいの。土日付き合つてもらえるかなあ？」

「あ、うん良いよ……でもどうする？買い物とかだったら、歩いても平気かな？」

「そうだね。ジツと家に籠っているのもなんだし、気分転換がてらにそうしよつか？……で、彩華に訊きたい事が有るの」

突然の事だけど、後一週間余りすれば彩華はここを出て行く。その前に訊いておきたい事があつた。

「どうしてこんなゲームしてるの？」

奈々子は再び隠さず、単刀直入に訊いた。

「ゲーム……そうねー気分が向いたら奈々子には話してあげるよ」と、悠治ははぐらかし、食べ終わった食器を片し始めた。

まだ話す事は出来ない。でも、いつかこの事は奈々子には話しても良いと思っていた。

「試験明日からでしょ？一夜漬けの！」

でも、ちよつと嫌がらせを言ってみる。

「悪うございましたね……一夜漬けで！」

ツンツとそっぽを向く。でも、自分から話してくれるなんて言うとは思わなかった。だから、心の中でクスリと笑って試験勉強に熱中する事にした。

「……と、言う具合なんだ」

その頃の彩華は、英二からの情報を入手していた。試験勉強中だったけど、この電話はすぐに取り上げて聴いた。

「桐原奈々子さん？……そんな子、彩華の回りでは聞いた事無いけど……一応中学校には行ってみることにするよ。でも、当分先になっちゃうな。試験は二日で終わるけど、来週月曜は仕事有るじゃん……張るのは、火曜日だね」

「俺は来週から試験だから付き合えないけど、一人で大丈夫か？」
「僕と彩華は幼馴染みなんだよ？直接会えば何とかなるだろうと……思うよ」

思うよじゃ無くて、何とかしなければならぬ。もう、その時の事を考えると悠治を一発殴らないと気が済まないだろうな……とか思いながら受話器を握りしめていた。

「ありがとう。英二……迷惑掛けてさ？」

「言いつこ無しだぜ？こっちは悠治の為にやっている事だしさ。気にすんなよ？」

「うん。じゃあ、またね。英二も試験勉強頑張つて。おやすみ」
携帯の電源を切り、彩華はホッと息を吐いた。ま、女の子と釣るんでいる限りは問題が無い。ただ、問題はゲームの事だった。

今日も、吉祥寺で一騒動が有った。このままじゃあ、身を減ぼす事になりそうだ。今はまだ何とかなっているかも知れないが、これから先、何かとんでもない事に巻き込まれそうな予感がする。とてつも無い不安。

その勘は当たっていた。この一ヶ月の間に待ち受ける最大最悪の大きな壁として……

13 変化

五日目。それは悠治にとって退屈な日であった。始発でお地蔵様の所まで行つた以外は、ずっと奈々子の家に籠りっぱなしであった。昨日の夜、奈々子が試験勉強を終えて寝入るまで、起きて最終の電車でお地蔵様の所に行つた。だから、寝不足気味で朝は隈を作つた目元隠しの為とも言わんばかりに、サングラスを掛けて出掛けた。御供えされている供物を見詰めながら考えてみると、彩華と会わない時間が気にならない自分がいる事に気が付く。好きなはずだったそれなのに、こんなに離れているのに、会わないでいるのに何故気にならないのだろうか？

帰りの電車に揺られながら色々と思いを巡らせる。しかし答えは出る事が無い。そして、奈々子を学校に送り届け、朝御飯の片づけ、洗濯物を終わらせ家でのんびりとお茶を濁らせている今、またその事を思い巡らせていた。

僕は、本当に彩華を好きなのか？ただ、幼馴染みの延長でそう思い込んでいただけなのではないだろうか……放つとけない子をただ心配して。

そう考えている今の環境だって、奈々子を心配している訳で。僕はお人好しなのでは無かるうか？とさえ思う。窓から差し込んで来る陽の光が眩しくて、そして、悠然とただそこにある空の青さが心地よくて、思わずそれを見上げながら絨毯の上に大の字で寝っ転がる。「外に出たいなあ」

思わず零してしまった。ここまで天気が良いと外に出たくなる虫が悠治の心を揺さぶる。そしてスクツと起き上がると、自転車の鍵と家の鍵を持って、まだ買い出しには早いが出かけようと動こうとした時、部屋の中の一点に視線が集中した。ナナが或る物を手で引つ掻こうとしている。

「奈々子……生徒手帳忘れて行つたんだ……」

ベッドの横に転がり落ちている手帳を手にとった。

今思い出してみると、これが引き金だったんだよねあ〜とクスクス笑った。

ページ目を開いた。奈々子の写真と名前が記載されたページ。自分を見てもらおうと考えて思い付いたのが名前を呼ぼう作戦。すぐに反応してくれた。あの時は、写真を見てしまい直ぐ閉じてしまったけど、今はこれをじっくりと見る事ができる。

次のページには、校歌が載っている。まあ、何処の学校の生徒手帳もこんな物だ。そして次のページからは、校則などの事を事細かく書き記されている。

悠治はいつの間にか出掛ける事も忘れて、じっくり腰を下ろしナナに手を掛けながらベッドに寄り掛かってその生徒手帳を読み始めた。実際、悠治が通っていた中学校に比べれば羨ましくなるほど校則が緩い。制服じゃなくても良いし、髪型だって自由。今思い出してみれば、奈々子のクラスの子達は、個性溢れる感じだった。髪の毛の色、服装。全てが自由で、この学校に入って慣れてきたら後ろ姿を見ただけでもそれが誰かって事が判るだろう。それに、バイトも可。と言う学校は少ないであろう。校則の厳しい学校を出た者であれば憧れて当然だろうなと思える。

そして生徒手帳を隅々まで見て納得した。

それから、見て行く先に現れた写真。あの時すぐに隠した写真を再び手に取った。あの時は、彼氏かなと思っただけど、学校に送り迎えしている際、この人物を目にした事は無い。彼氏と言う訳では無いんだと思うとシゲシゲと見直してみる。奈々子が好きな子何だろうなあ〜。とか思いはそっちに傾いた。

小綺麗な服装に、整った顔立ち。淡い茶色がかった髪の毛が陽の下で撮られた写真であろうから、綺麗に煌いている。優等生っぽいけど、センスは良さそうだ。もしかして隠し撮りか何かかな？一人だけで映っている写真だもんね〜あの時気付けば良かったかな？彼氏だったら、一緒に写ってるはずだし。

そして、思い出せる全ての事を思い返していた。あの騒動が起きた時、自分の事を嫌いだって罵った時、奈々子は何を口走ってた？初恋がどうか？余りにも昔の事に感じられ、ハッキリとは思いつけない。でも、あの言葉は確かに自分に対する嫌悪であつたはず。

この子と彩華としての自分。何がどうして繋がるのか？その辺りまでははっきり掴み取る事は出来ない。

そして、その写真を元の所に挟み込もうとした時、指先がざらりとした。裏を見ると、名前が書き込まれていた。

「岸田明彦……か」

その名前を書き込んだのは奈々子であろう。少し丸みがある、癖のある字に見覚えがあったから。

そして、その写真を表にして見返した。だんだん何故だか腹が立つて来る自分に気が付き、あれ？と思い返した。これって、嫉妬なのでは無いだろうか？彩華が英二を好きなんだと言つて相談して来た時と同じ感情。だけど、あれ？変だなあ。あの時とはちょっとだけ感情が違う気がする。不安。何でこんな気持ちになっているんだらうか？奈々子とはまだ会つて五日目だぞ？だんだんとイライラして来る。そして、胡座をかいた膝の上に腕をつき考え込んでいた。

彩華は、自分と魂が入れ替わつてからと言うものの、鏡を見て話をしている感じで……幼い頃から知っていて、今まで好きだつたからと言う思いだけで接して来た。だから、これは今では義務感として思い込んで来た事だったのか？彩華はどんくさいし、頼り無いし、自分で自分の事を上手く表現出来ないし。そんなところが可愛いし、助けてやろうって気になっていた。ような気がして来た。

でも奈々子はどうだ？確かに、器用な所は無さそうだけど、言いたい事は言うし、悠治自身に首を突っ込んで来るし、ダメな事はダメとはっきり意思表示してくれる。それは、悠治を独りの人間として前向きに接してくれている訳で……何だかそれを考えていると嬉しく思う。悠治はウキウキしているのが分かった。

そして、改めて心を整理し直して、奈々子のテーブルの上にあるペ

ン立てからボールペンを取り上げると、生徒手帳の一番後ろに有るメモ用に用意されている項にペンを走らせたのである。そして書き終わると、立ち上がった。

「さて買い出しに行つて来るか」

一つ伸びをしてゆつくり足を動かした。外は快晴。思い切つて玄関の戸を開ける。そして、鍵を掛け自転車置き場まで向つた。

#14 英二？悠治？

六日目、七日目は土日。奈々子は試験も終わり、後は夏休みを待つばかりという状況である。

「買い物、直ぐそのスーパーまで行こうか？」

リフレッシュした奈々子の心が手に取るように、悠治は少し気が楽であった。

「痛くなったら、ちゃんと云うのよ！」

「分かっているって！でも、リハビリは必要でしょ？少しくらい無理しないとダメじゃん？」

久し振りの外出に奈々子は上機嫌で悠治の横に並んで歩いている。改めて見ると、本当に小さい子だなんて思う。人込みの中で捜すのは苦勞するかもなあゝとか勝手に想像していた。

「駅前はやバイからね。このくらいが一番安心出来るよね？」

奈々子は心の中で、彩華には黙っているけど、二週間の同居生活を思いきり楽しみたいと考えていた。そして、彩華の本当の気持ちを訊いてみたいとも思っていた。気持ちと言っよりも、真実を知りたい。もっと彩華を知りたいと思っていたのである。

「今日は何にする？」

「中華料理が食べたいなあゝ」

甘えるのも良い。それを上手く聞いてくれる彩華は、聞き上手。何でもできるくせに、阿呆な事ばかりしている。でも、そう言っ彩華が面白くて……飽きる事なんてあり得ない。

「中華かゝ簡単な物でも良い？」

「うん。任せる！」

友人としてこの人を一人占め出来る自分が、とても恵まれているななんて思える。

今までは、恋敵としか思ってたのが嘘のよう。芸能人でも人は人だと思えるし、何より飾らない彩華の性格が好きなのだと改め

て思う。

もし、彩華が芸能人で無くても、その気持ちは変わらないであろう。そう考えると、今までの自分が凄くちっぽけな存在だったんだなっと思える。そして、心の中でごめんなさいって謝れる。決して口には出せないけれど。

「どう？足は……」

「うん。平気〜帰りまでちゃんと歩くよ！」

スーパーの中を歩き回って本当は痛く無いって事は無いけれど、我慢出来ない事は無い。何よりこの時間が楽しい。彩華と色んな物を見て回って、食材を選ぶ事が出来るなんて思ってた無かった。

二人してあれこれと買い込むと、キャッシャーでお金を払い外に出る。一日一日が早く過ぎて行く。もうこのまま彩華が自分と一緒にいてくれる事が出来るなら、何もいらぬのにとさえ思える程、奈々子は彩華という時間を大切にしていた。家族とも思える。お互い隠し事は有るけれど、でも、それでも、彩華は一番の友達だと思えていた。

八日目。その日もいつもと変わらない日が過ぎて行く。月曜だから奈々子は学校に行った。帰りはちゃんと彩華を迎えに来る。クラスメイトは、もう彩華に解け込んでいた。彩華の変わった服装に目を見はらせながら冗談を飛ばしている。

「お姉さん本当、面白い人だね〜！でも、桐原さんには似て無いんだ？」

察しの良い子是不思議そうに彩華と奈々子を見比べたりしている。

「奈々子は可愛い子だから自慢の妹なの〜」
それを見越して彩華はフォローする。

「似て無い姉妹なんて山ほどいるっしょ？皆が皆似てたら、気持ち悪いじゃん？あはは」

そして、クラスメイトとの団欒が終わると、奈々子を自転車に乗せて帰宅する。

「試験結果出たの〜見て見て〜今回は前より良い点数だったのよ！」
百点と言う訳じゃ無いけれど、奈々子にとっては良い点数なのであ
ろう。

「彩華が指導してくれたからかも知れない。ありがとう！」
いつに無く上機嫌で奈々子は笑っている。

「奈々子も受験生だものね〜頑張らないとね？」

「そうなのよね〜気が重いなあ〜あ、そう言えば彩華は何処の高校
なの？」

そんな個人的な話はした事無かったけど、訊いてみる価値は有る。

「大東高校だよ」

「大東高校か〜都立だね？彩華くらい頭良かったら私立くらい受け
てるのかと思った…」

意外な高校だなと思う。そのくらいだったら、奈々子も受けて受か
らない事は無い。レベル的には中の下にランクインしている学校だ
からである。

「幼馴染みがそこ受けたから。それに、単位は適当にくれるしさ〜
芸能活動もしやすいの」

それを聞いて、なるほどなっと思う。

「あたしも、来年そこ受けるよ！その頃には、流石に両親の件も片
付いてるだろうしさ？」

まだまだ、働くつもりは無い。それに、彩華がいる学校だったら、
楽しいだろうなっと思えたからそう言った。

「そうよね〜同じ学校にいたら、会う機会多くなるものね……」

ちよつと悠治は寂しい気持ちになる。奈々子は彩華としての自分に
好意を示しているし、もし入れ替わりが完了してしまった時、悠治
でいる自分に心を寄せてくれるかどうかなんて解らない。悠治とし
て会った事など無いのだから。

「あ、今日歌番組が有る日だね！チャンネル変えて良い？」

「あ、うん」

夕飯を終えてのんびりしていると、いつの間にか八時になっていた。

「本日は、今人気沸騰中ランキング一位のジェイズのお二方に来て頂きまして」

司会の男がそんな事を言っていた。そんな司会に、これ録画番組だろと突っ込みを入れたかった。が、敢えて言わなかった。そんな悠治に、

「そう言えばさ、彩華？英二に恨みでも有ったの？」

「え？」

「だって、ほら出逢った日、英二にだけすっごい落書きしてたじゃない？」

今頃思い出した。確かに英二にだけ落書きしたっけ。今はそんな事はもうどうでも良くなっていたが、ふと、テレビ画面を見て、英二とはこの先運命共同体で仕事していくんだなと思うと、今までの事は水に流して、これは良く観察しなければならぬ。

「あ、そういえばそうだったね。恨みか。今ではどうでも良い事のように思えるけど、恋敵だったのよ」

思わず口を滑らしてしまった。

「へ？」

奈々子は耳を疑った。彩華が言った言葉の意味が解らなかったからだ。

「へ？」

もう一度問いかけるつもりで、言葉を見失った。

「あちゃー！ま、いつか。実はこのゲームもさ、本当は私が好きな相手を振り向かす為に仕組んだ事だったの」

「こんなゲームしなくても彩華なら選り放題じゃ無い？振り向かすとかそんな……ちょっと待って？彩華が好きな相手って、一体？」

本当だったら、ここで嫌味たらしく突っ込む事も出来たが、奈々子の頭の中は混乱の渦だった。英二が恋敵で、振り向かせたい？

一体彩華は誰が好きなんだ？そんな混乱している奈々子に、

「奈々子は、ジェイズの二人のうち、どっちが好みのタイプ？」

突拍子の無い事を問いかけて来た。グルグル回っている頭にこんな

質問は奈々子を余計に動揺させた。

奈々子の顔を覗き込んで珍しく真剣な顔で問いかけて来るから余計混乱して……

「え……えっと」

俯きながら、なるべく彩華の顔を見ないようにして……

「ん？」

どう答えようか悩んだ。本当は、英二の方が好みと言う者に近い。容姿とかと言うのでは無く、性格が英二の方が自分を引っ張ってくれそうな感じだからだ。悠治は少し大人しいし、友人としては成り立つが？

「えっと……えっと……えゝ英二かな……」

言っではならない方の名前を言ってしまった気がする……シマツタと思った。

きつと、彩華は不機嫌な顔をしているに違い無い。そう思ったからこそ、全身から流れ落ちて来る冷や汗を背中にひやりと感じた。彩華の顔を見る事が出来なかった。しかし、

「やっぱ、そうよねゝ女の子ってああいうタイプの方が良いよねゝぼ……私には良く解らないけどさ……」

ちよつと待て？問題発言だぞ！奈々子は後ずさりしてしまっていた。「彩華さあゝもしかしてだけど……女の子が好きなの？あ、違ったらごめん！」

「ん？……女の子？あ、まっさかあゝそんな訳無いじゃんゝあはははは！」

悠治は危なく自分が彩華だと言う事を忘れかけて話をしてしまっている事に気が付いた。だから必死になって言い訳しなくちゃと思っただけ、それも逆効果になると思い立って、

「さてと！明日も学校だよゝもう寝るか！」

この話を忘れてもらおうと、話を寝る事に置き換える。

「え？寝るって……まだ八時半だよ！まだ眠く無い！」

「床、貸してもらっわねゝ一週間バタバタ忙しかったから、今日は

疲れちゃった」

奈々子の意見など無視していつもの我が儘彩華を演じる悠治は、ヨロヨロと立ち上がると、毛布を手に取り寝る準備をしている。そんな勝手な彩華でも、何故だかいつもの彩華らしく無い様子が手に取るように解り、奈々子は一瞬躊躇ったが、

「あ、うん……」

彩華の言った通りに寝る準備を始める。

ジェイズと彩華。この組み合わせは一体どうなっているんだろう？ なければの頭で考えてみても答えは出ない。それにこれ以上問い返す事も出来はしない。彩華と接している時間は他の見知っている者達より短い。そして、彩華は既に寝る体勢を整えている。

奈々子は、ベッドに身を預けると暫くの間色々考えを巡らせていたが、結局解らず終いで、いつの間にか襲って来た睡魔に勝てず、そのまま眠りに就いた。

上りの最終列車に乗り込むと、悠治は忘れてはならないお地蔵様の所に行った。

奈々子が寝入るのを確認して出て来たから、確かに安心出来る。それにこの時間だと、ゲーム参加者が現れる事も無い。

地蔵には、また葎大福を供えた。彩華もここに訪れている形跡がある。そして、連絡をとった一日目から先、メモを残す事は無かったが、今日はどうやら置いているらしい。

『悠治へ。明日から、悠治の搜索を始めます。今度は絶対逃がさないからね。覚悟しておいて！それから……悠治で有る私に、英二が告白してくれました。どうすれば良いのか悩んでいます。相談したいの。このままじゃ、英二に告白しかねない。助けて！』

今回は長い文章だった。

「そっか……彩華の恋は成就してるんだ……でも、悠治としての彩華に告白したとあつては気が休まらないだろうな」

今夜の話の中で、奈々子に危なく疑問を持たせてしまった訳だし……

…一度彩華に逢って何とか話はしなないとあゝ自分が悠治に戻った時、英二に惚れられるのも恐い気がするし。ノーマルなんだぞ僕達は！と一時ヤケになりそうだった。

「さあ、帰って寝るか。最終電車に間に合わなくなるし」

雲も無い夜空に星が瞬く中、悠治は彩華からの置き手紙をポケットに滑りこまずと、その場を立ち去る。

明日か……上手く捜し当てるよ。彩華！そんな思いで、悠治はその場を後にした。今夜のネット上での彩華搜索隊のホームページで何を囁かれているか知る事もなく。

#15 彩華V・S岸田

九日目。朝は清々しい一日の始まりだった。奈々子は悠治が来てから初めて一人で起きた。昨日早くに寝たものだから、自然に体内時計が反応したらしい。

「早いね、奈々子！」

「昨日早く寝たからかな？寝起きが良いよ」

と言いながら、今日学校へ行く為の服をあしらっている。微妙にだけど、昨日とは違ったコーディネート。それを楽しんでいるのがキッチンにいる悠治にも解る。

「さて、朝御飯も出来た事だし、食べよっか？」

彩華が今日来る。きつと、ここ八王子の駅までは……

いきなり気合いが入る。奈々子との同居生活がここまですなるのか？それとも、最稜まで続ける事ができるのか？そんな事を考えながらテーブルに向う。向き合った奈々子の顔をシミジミと見つめると、

「何？彩華。顔がにやけてるよ、あたし変？」

「気にしないで。食べて、食べて！」

元気良く勧める。

「彩華は食べないの？」

「さつき、つまみ食いしたから、平気！奈々子の食べっぷり見てる方が面白い」

「何。その食べっぷりって……」

奈々子がツンツとそっぽを向く。こういうやり取りが面白い。反応は直ぐ返って来るし、素直。初めからこうやって接していればもっと簡単に接する事が出来ただろう。短い間なのに何だか長く長かったような気がする。それだけこの同居生活が楽しかったのかも知れないと振り返る。

初めは、やりにくい子かなって思った。もっと物静かで……でも、

思いつきり叩かれた。嫌いだって言われたよな？今もそうなんだろうか？

嫌われてるんだろうか？

好意は示してくれてるけど、實際口に出して好きだと言われた事など無い。そして、生徒手帳の岸田の顔が頭を過る。

「奈々子さゝ今でも、私の事嫌い？」

「ぶっ！」

奈々子が吹き出しそうになって、悠治を呆れて見返して来た。

「本当に嫌いだったら追い出してるわよ！脳天気なんだからゝそっちこそ、もつと本音で接するくらいしたら良いじゃない！ごちそうさまゝ」

全て食べ終わった奈々子は、学校に行く準備を済ませて、ヒョコヒョコと動き回っている。何処までが彩華の本音なのか？何処までが本当の彩華なのか？昨日のやり取りで解らなくなった。

初めはとんでもない性格だと思ったし、冗談も本気だと思っていたけど本当の彩華はオブラートに包まれていて……奈々子には見せてくれてなかったのかも知れない。だから本気でむかついた。きつと彩華を本気で受け入れてしまっていたのだろう。

「ちゃんと接するから、まだ、待っててよ」

悠治は奈々子に聞こえないようにボソリと咳く。今の奈々子の言葉で十分だった。

「おはよー！」

奈々子のクラスは騒然としていた。今か今かと奈々子達がやって来るのを待っていたかのように。しかし、悠治がいつものように、奈々子連れ立って入って来るや否やシーンと静まり返った。

「どしたの？」

悠治はいつもワイワイと集って来る女の子達が、今日はやって来ない事に気が付き、近くに居た子に問いかけた。がしかし、遠慮しているのか拒絶しているのか？手を振って、教室から出て行く。

「何だろう？今日は変ね」

悠治は奈々子に耳打ちした。奈々子もこういうクラスメイトの反応は訳が解らなかった。が、

「チャイムも鳴るだろうし、帰りなよ。お姉ちゃん？」

とにかく、今日一日様子を見ようと思った。何事もなければ良い事だし。わざわざこの場所に彩華を止める必要もない。奈々子は席替えをした窓際の席に着くと、にこやかに彩華に手を振った。

放課後、怒濤の乱闘が起これとも知らずに……

そして、当然のように放課復はやって来る。奈々子は、ホームルームが終わって、鞆に全ての荷物を詰め込み彩華が来るのを待っていた。

しかし、クラスの子達は何だか不自然だ。奈々子に話し掛ける事などなかった今日一日。しかし、放課復のチャイムが鳴り一気にクラスの後で考えれば、男子がいなくなっている事に気が付く事になる。

「桐原さん！」

無気味だった、話し掛けられるのは今日初めてだった。そしてクラスの女子全員が奈々子の席の周りに集って来たのである。

「え？どうしたの？こんなに集まって……」

「お姉さんって、本当は彩華だったのね！」

怒っていると言うより、興味津々な様子だ。

「な、何言ってるのよ！んな訳無いジャン。あれは、あたしの姉で……」

言い繕うのも一苦労しそう。

「でもさ？あれは彩華だって！って、学校中の男子が噂しててさ！今皆、グラウンドに向ってるよ」

クラス中がワイワイと騒ぎ始めていた。奈々子はシマツたと思い窓際からグラウンドを見下ろした。

校門から自転車に乗って彩華が入って来ようとしている。それを察した男子がそれを取り囲もうと必死で走りよっていた。

『バレた〜！』でも、なんで？怪しい服装で彩華だつてばれる要素なんてなかったのに？

彩華は、自転車置き場に行くと、昇降口に向おうとしているらしい。そして、取り囲む中学男子に気が付いた。

「彩華！バレちゃった〜逃げて！」

二階の窓際から奈々子は必死で叫んでいた。クラス中にその声は響く。もちろん、女生徒もこの事にやっぱり噂じゃなかったんだと、窓際に押し寄せて来た。野次馬とはこういうものである。

「あら、バレちゃったの？」

奈々子に手を振りながら、周りの人数に怯まない。もう慣れたとでも言う感じがであった。

悠治は、仕方ないとサングラスを外すと、

「腕に自信の無いものは退いてなさいね？怪我するわよ〜？これだけの人数を相手にするんだから、手加減なんてしてられないからね〜んじゃ、ゲーム。スタート！」

忍ばせていたペンを取り出すと、御丁寧に手招きを始めている。その様子に、

「あ〜もう！煽ってるし〜！止めに行かなきゃ！」

奈々子はギエウギユウと押して来る女生徒達を掻き分けて、必死でグラウンドに駆け出した。止めなきゃ！その思いだけで足首の腫れはもう良いけれど、まだビッコを引かないと歩けない。でも、奈々子は必死で階段、廊下をひたすら走った。

周りから見ると急ぎ足くらいのペースかも知れないけど、奈々子にはこれが精一杯だった。

「ダメだよ。こんな事……間違ってるよ……」

奈々子は彩華にそれが言いたくて、この騒動を止めたくて走った。

どれだけ時間が掛かっただろう？昇降口で外に出られる靴に履き替える。そこから見える騒動がけたたましく耳に入ってくる。

たったこれだけの時間で、悠治はもう三分の一の人数の顔に「x」印を刻んでいる。でも諦め切れない者、まだ乱闘を続けている者達を取り囲んでいた。そんな中に、奈々子は潜り込もうと足を運んだ。「ダメ！彩華！こんな事してどうするの！何の解決にもならないよ！」

叫んでいるのに、彩華にはその声が届いていない。押され、引つpegされ、奈々子はその輪からはじき出される。

しかし、一人の男子生徒が、

「やめたまえ！僕はこんな事は許した覚えはないぞ！教室に戻るか帰宅したまえ！」

奈々子の肩を引き寄せ、前に進み出る。その人物が、懂れて告白した、現生徒会長の岸田である事は、慣れ親しんだ声を聞いた瞬間で判った。

騒動は、岸田の一声で一時止まった。

そして、岸田はその輪の中に進んで入り、奈々子を彩華の側に連れて行った。

「奈々子！それに……あなたは？」

写真で知ってはいるものの、わざと問いかける。奈々子はこの岸田のことを悠治が既に知っているなんてことを知りはしないのだから……だから敢えて問いかけた。

「桐原さんの言う通りだと僕も思いますよ。こんな莫迦げたゲームはあなたらしくない」

「御親切にどうも……あなたは紳士なのね？」

実は嫌味のつもりだった、僕らしくないってどうして言い切れるんだ？ちよつと癪に触ったから。こんな奴が奈々子の想い人だと考えるとよけい気分が苛つく。でも、岸田の言う事は最もではある。

今、彩華がそんな事を考えているなんて、奈々子は思いもよらなかった。そしてこういう形でまた岸田と対面するとは考える事など無

かった。

『やっぱりかつこいいなあ』

俯いて奈々子はあるのバレンタインデーの事を思い返した。良い事はなかったハズなのに、思いはやはり岸田に向けられている。心の何処かで忘れられないのだろう。感情は、どうする事も出来はしないんだ？止まった乱闘は、三人の方に向けられている。

「僕は、あなたの事に興味が有りました。ここでお会い出来たのも何かの縁ですね？お近づきの印に握手させて頂いてもよろしいですか？」

岸田は、彩華の側に歩を進めると、友好の印とでも言わんばかりに右手を差し出した。そして、二枚目の顔立ちでニコリと微笑んでいる。

悠治は苦々しい思いで、スツと右手を差し出した。その事で、二人の手は繋がれた。

奈々子はその有り様を見て複雑だった。彩華にはこういう態度なのに、あたしにはこういう態度で接してもらえなかった。彩華に嫉妬してしまいそうなその心を封じ込めて見守った。が、しかし繋がれたその手を、岸田は手繰り寄せ、一気に彩華を引き寄せたのである。

「え？」

奈々子は頭の中が真っ白になった。

岸田が、彩華の意表を付いたかのように腰を抱き止めると、彩華の唇を奪おうと一気に迷う事無く唇を近付けたのである。

外野は一斉にどよめく。しかし、その事を予測していたのか、それとも油断を怠らなかったのか？悠治は左手に握りしめていたペンを岸田の端正な鼻の穴に突っ込んだのである。

「あんた、ダサいわよ！こんな手に乗る彩華様じゃないの！したたかな事考えて、こういう行為に及んだのは褒めてあげたいけどさ？言ってる事とやってる事が全く違うわねえ？」

悠治は『アカンベ』と舌を出し、クルリと踵を返す。

「あゝあ、そのペン使えなくなっちゃったなあ！良いよあげるわ！

必要無いものね？」

悠治は言いたい事を言うと、奈々子の横に身を寄せようとする。奈々子と言え、複雑な思いでその行為を見ていた。

自分が好きだった、尊敬していたその人物の本性を見た気がしたからである。そして、身体を強張らせていた。でも、岸田がプライドを傷つけられたと、反撃に出て来たのを見逃しはしなかった

「この僕にこんな恥をかかすだなんて！」

怒りに満ちたオーラが周りを取り巻く。

「彩華、危ない！」

奈々子は咄嗟に声を張り上げたのである。岸田は、悠治の後方から襲い掛かっていた。悠治は、奈々子のその声に気が付いたのか？それとも予測していたのか？

「甘い！」

半身を捻ると同時に、岸田の二の腕を掴み取ると、綺麗な背負い投げが決まった。ドスンと言う地響きで岸田は地面に投げ付けられたのである。

「黒帯持っている私に何かしようなんて思わない事ね。あなたかなりダサイわよ！」

手の平をはたくようにパンパンと手を打つ。その様子を見ていた周りの者達から、ドツという笑い声が上がった。自らの学校の生徒会長でもあると言うのに、この行為は許されない行為だとも言わんばかりだった。

「さてと、帰ろうか？あ、それともこの岸田君に思いっきり落書きする？」

奈々子の目の前に、真新しいペンを取り出し手を差し伸べた。奈々子はまだ整理の付かない頭で、今の現状を把握しようとしていた。

「いやさ、こいつだろ？奈々子の初恋の何たらって……実はさ、渋谷での乱闘の際、生徒手帳の中身拝借してしまっちゃってたんだなこれが……」

彩華は、鼻の頭を掻きながら答える。

「ごめんよ？こういう形にしちゃってさ……何だか懂れをぶち壊しちゃったよね？」

奈々子はその言葉を受け止めたら、自然と涙が滴り落ちてしまったのである。

「あ、ごめん！泣かないでよ」

悠治はどうやったらこの涙を止める事ができるかと悪戦苦闘していたら、

「良いの……もう良いの……これでもう完璧に吹っ切る事が出来たから……」

ポロポロと涙が次々に流れ落ちて来る。でも奈々子は笑おうと必死になっていた。けど、今までの自分を振り返って、大声で泣き始めたのである。悠治はその奈々子の肩を抱き締めて泣き止むまで支えてあげようと思っていた。が、

「わーっ」

という大歓声で、その行為はお預けを食らわされた。頭上の方から、グラウンドから、大きな拍手と喝采が奈々子と悠治に向けられたのである。

「あらま……」

奈々子もその事に目を見はらせた。野次馬の教室から観覧していた女の子達。そして、ゲーム半ばの辺りを取り囲んでいるその者達は、一斉にこの出来事を喜んでいた。

「一気に味方が付いたのね！何か嬉しいような？悲しいような？」

悠治は、そんな中手を振ってその歓声に答えようとしている。

そんな様子を、校門から入って来た一人の少年に阻まれた。

「彩華！」

叫ばれた自分の仮の名前に、悠治はビクリと身体を強張らせる。

「その声は……」

せつかくの盛り上がりには水を差すその声の持ち主は紛れもなく……と校門がある方角へぎこちなく振り向く。やっぱり、と覚悟していた事を思い出した。

「この声は……じゃないだろう！」

「あ、バレちゃったのね」にしても良くここが分かったわね？」

周りは、何故ここに？と言わんばかりにその人物を見ていた。もちろん、奈々子も同様である。

「帰るよ！」

耳許で思いつきり叫ばれ、悠治はげんなりして、叫ばれた方の耳に手を押しやった。うんざりとも言いたげで、その態度にその本人はよけい怒鳴る。

「あれって、ジエイズの悠治だろ？何でこんな所に……」

周りの者達は今度はその事で野次馬状態になっていた。

「うつ。判ったわよ」良いからちよつと待ってて！」

悠治はとにかく彩華の口上に今は乗れないと、奈々子の方に振り向く。そして、躊躇いがちに、

「ごめん。こういう状態で……私帰らなくっちゃ……二週間同居守れなかったけど平気？」

「あたしならもう平気だよ。ほら、もうこんなに歩く事出来るしね？」

奈々子は強がって思わずそんな事を言つてのけた。彩華の事を止める事は出来たはずだけど、何より自分の目が曇っていた事の反省もあった。だから思わず、涙が溢れて来た。

「でも、彩華がいなくなると寂しくなっちゃうな……」

最後くらい素直な言葉を吐き出しておきたい。もうこうやって逢つて話す事が出来なくなる前に。

そんな奈々子の事が手に取って判った悠治は、思わず奈々子の肩を取り、自ら唇を奈々子の頬にあてがった。

「え？」

奈々子は驚きの余り、疑問符が頭をぐるぐる駆け回った。

「じゃあね！」

周りは、奈々子と悠治のその行為にドツと歓声が沸いた。何故こん

な事をしたのか、奈々子の頭では計り知れなかったが、そんな奈々子を背にし、悠治は彩華に指図されるように移動を始めた。

「全く……いい加減にしてよ！自分一人だけの身体だとも思っているのかよ！」

彩華はブツブツ文句を垂らしている。それを悠治は聴かない振りをした。

もう、奈々子には会えないだろうか？ただそれが気掛かりで、聴かない振りというにはちよつとばかり意味合いは違っけれども……そして、ハツと思ひ出した。

「奈々子〜！」

再び奈々子を振り返ると大きな声で呼び掛ける。

「え？」

奈々子は未だに、さつき彩華がした行為に慌てていたが、

「守れる約束！って物があつたら守る？あ、守ってくれる？」

「約束？」

「そう。絶対に守って欲しいの！奈々子なら守れるって信じてる！生徒手帳の最後のページなんだけど八月一日に見て欲しいの！絶対にそれまでは見ないで欲しいの！そしてまた奈々子に逢いに来れるから！それと、ナナは預かっておいてね。あ、鍵は私が持つてて構わないかな？」

悠治は、大声でそう言うその後ろ髪を引かれる思いで奈々子を見ている。奈々子はその様子が彩華なりの嘘の無い真剣な言葉なんだと思

い、

「うん！判った！絶対に約束は守るから！任せて！ナナの事も、鍵の事も許す〜！」

その言葉を受けた彩華は、ニツと小狡そうに微笑むとウィンクを投げかけた。

そのちよつとふざけた所は彩華のお得意の行為だと分かっているけど、奈々子は何だか嬉しかった。

そして、校門の所に止めてあるタクシーの中に彩華と悠治は消え去

つていく。奈々子はいつまでもその後を見送った。周りに学生がいなくなるそれまで、ずっと。

奈々子はこの彩華との約束を守る事になる。岸田の写真は破られるが、ラストのページにだけは決して手をつけなかったのである。彩華との約束を破る事は無かった。

タクシーを降りた後、彩華と悠治は直ぐさま地蔵がある場所に共に向った。そして、お互い今後の事を話す算段を立てるつもりであった。

そんな中、不機嫌な彩華とは裏腹に、悠治は上機嫌で冗談を繰り返していた。

「何、そんなに不服そうなのさ？もしかして、奈々子に妬いてんの？」

悠治は、もう彩華の事は友人……幼馴染みの一人しか思ってなかったから堂々と言える言葉である。

「あんたがどうなろうと私の知った事じゃないわよ！ふざけないで！でもその体は私の物なのよ。少しは考えて行動してよ！」

「へいへい」で、僕にどうしても知りたい訳？それに良く解かったな。あの場所にいること。探偵でも雇ったのかい？」

悠治はしらばつくれるだけしらばつくれるつもりだろう。はぐらかすのはこの悠治の特技なのだから。

「え、英二がかって出てくれたのよ。そうしたら、悠治の居場所を突き止めてもらえた」

「彩華ってさ、何でそんなに依頼心しかないのさ」はあ、英二も大変だったろうに……」

呆れるしかする事が出来ない。自分で調べる事も出来ないのか？

「私だって自分で足運んで捜すつもりだったのよ。でも、試験はあるし仕事だってあるし……」

こうして客観視してみると、本当に言い訳大王だなあ、と思える。

悠治は彩華のそう言う所が苛立たしい。今までもそう言う所があったけど、その時は自分がどうにかしてあげていた。今度は英二か……大変だぞ？ちよつと英二に同情する。

「で、英二から告白されたって？」

話を擦り変える。今さらこんな話をしてこの彩華を変える事なんて出来はしない。

「あ、うん。そうなのーどうしたら良い？」

英二は悠治としての彩華を好きなのだろうか？それとも、男としての悠治が好きなのだろうか？その点を知る必要がある。これは、今後の彩華と悠治の問題だ。

「そうだなあ、僕が悠治に戻った時そのままになってしまったら困るものなあ」

そう。それが一番の問題。仕事相手が自分に好意を持ってしまったら仕事所じゃない。

「なあ、こういう事って出来るかい？」

「何？良案が浮かんだ？」

少しは頭を働かせつーてのっ！て毒づきたいが、自分でもそう良い案は浮かばないなら、なおさら彩華には無理だろう。

「今日、僕（彩華）の両親に逢つてこう言ってくれるかい？彩華は近くのマンスリーマンションに越すからその横に悠治をあてがって下さいと」

「で？」

「とにかく、こういう事態だ。僕（彩華）の両親は納得すると思う。どうせ、自分で引き起こした事態だ。自分で解決するだろうと思うだろう？あの両親だし」

「うん。で？」

「僕は変装して、ジェイズの元で働く。決して彩華だと言う事を悟らせないし、悟られるようにはしない。下働きでも良いからね。その辺りは彩華がちゃんと事務所に掛け合ってもらい、手はずを整えて欲しい。それくらいは出来るだろう？出来なくてもしてもらわな

きや困るんだけどね。で、英二には、僕が彩華だとちゃんと知っておいてもらおう」

「うん、うん」

彩華はただ、悠治の言っている事に頷くだけだった。

「彩華と悠治は何の関係もない。英二は彩華みたいには鈍く無いらしいし？そしてある程度の見聞をしてもらえればそれだけで良い」

「でも、英二は私が悠治を好きなんだって思っているんだよ？そんな事可能かな？」

ここまで来て彩華はハツと思い出した。悠治は恐竜並みに判断が遅いぞと突っ込みたい気分だ。

「そう。そんな事思ってるんだ英二は……」

彩華と悠治を取り違えているにしても、やはり英二は結構勘が鋭いなあと思った。

「でも私は、ちゃんと否定しておいたけどね」

「あつそ……」

今まで彩華を甘やかして来た自分が情けなくなった。何でこんなに鈍いんだろう……率直な言葉にしか反応出来ないなんて。

「でも、まあ僕が彩華に好意を持ってないと知る方が良いだろう？初めからそんな気があったら、とても出来ないぜ？下働きなんて……それに、僕の性格が解れば英二だって何かしら考える所あるだろう？それに僕としても、これから先英二とは仕事を共にしなければならなくなるだろう。解るかい？今の内に相方の事を知る必要性があるんだ！」

それがいつかは教えてやらないけどね？心の中で思いつきり舌を出してやった。このくらい覚悟してもらわないと、今までの自分を否定する事になる。

「あ、英二と二人きりになる事があつたら、僕が上手い事仲裁に入るよ。彩華には対応しきれないだろうからさ？」

「そ、そうだよな？判った。とにかく私がしなければならぬ事は……今夜、私の両親に掛け合って今の事を話してみる。で、事務所

には悠治の仕事をあてがうように話を通す。それで良い？」

何となく納得している彩華に、

「じゃあヨロシク！僕は今日、近くのお寺の片隅にでも宿作って寝るよーばーい」

こんな風に一方的に話は纏まった。

「あ、それから僕の携帯取って来て欲しいんだ。それも宜しくな！」
こうして二人の密談は終わった。明日からは、新生活が始まる事になる。そしてこれが、悪夢への始まりになるのであった。

#16 彩華、マネージャーになる

「今日からこの事務所で働いてもらう結城礼子君だ」

「初めまして結城礼子です。こちらで働かせて頂くとこになりました。解らない事がたくさん有ると思いますが、宜しくお願いします」
彩華と話合った日から三日後。悠治は彩華の補助マネージャーとして働く事となった。

「へー何だか彩華みたいな子だな？まさか本人だったりして？」

印象のある目元のメイクを少しばかり、髪型をウィッグでおかっぱに妖魔化したにもかかわらず、ある一人の男がそんな事を言い始めた。でも、その言葉は直ぐに冗談だと解る。まさかこんな事務所で働くはずもないのだから……

「じゃあ、マネージャーの野口君と色々話し合ってくれたまえ。悠治のお勧めが効いているが、これからは、今売り出し中のジェイズの補助マネージャーなのだから、気合い入れて働いてもらわないとな？」

「そうですね。では宜しく。野口圭です」

サラリーマンの鏡の様な野口が右手を差し出し言葉を発する。

「あちらの部屋で具体的に今後のスケジュールを話しましょう」

あちらと言っても、ただ仕切られた衝立の部屋だ。少し埃っぽいし、無意味に雑誌が積み重ねられている部屋である。

「そうですね。宜しくお願いします」

悠治はニコリともせずに、ちょっと芝居がかった真剣な表情で野口の後を追った。

「おい、悠治！あれって、彩華だって言ったよな。良いのか？こんな所で下働きなんかさせて……」

英二は彩華の耳許で他の者に聞かれないように注意を払って問いかけた。

「あ、うん。平気……だと思つよ。本人が言い出したんだから、何

とかするっしょ？」

余りにも軽々しい、ちょっと突き離れた言い方が、今までの悠治の言葉とは思えないので英二は不審がっていた。

あれだけ大騒ぎして彩華を捜し出したのに今度は補助マネージャー？何か話し合いでもしたのか？彩華から言い出したと言っのも余りそう考えることは難しい。

確かに彩華は頭の回転が早い。こういう仕事も簡単にこなしてしまうであろう。でも、あれだけ自分をアピールしていたゲームをこんな所で隠れなければならいなんて考えるとは思えない。

悠治が誘ったのか？確かにここだったら彩華を隠しておけるし、騒動は起こらないだろう。でも、英二はこの事が面白くはなかった。悠治の元に、彩華がいるからである。恋敵とやはり思っているのだから。

「あと、僕引つ越したから。彩華の部屋の隣に。あいつ目を離すところな事しないからね？」

余計イライラする。なんでそこまでして彩華の肩を持つんだ？これが幼馴染みと言うものだろうか？男女の幼馴染みと言うものがよく解らない英二には、ここまでする悠治を訝しげに見詰めていた。

「何？何か変かな？」

「焼けるなと思っただよ」

「え？だって、幼馴染みなんだよ」これくらいしなくちゃ、あの彩華だからね。見張ってないと困るんだよ。もともと家が隣だし、両親同士が仲が良くってね。頼まれたって事も有るんだ」

なるべく、英二とは距離を保たなくっちゃならない。そうしたくないけれど、悠治からの助言でも有る。鈍い彩華であっても英二からの言葉を逸らせなければならなかった。

それに、今英二に、

『好きなんだ』

と言われでもしたらそれに本音を返してしまいかねない。でもそんな事は出来ない。彩華の身体に戻る為の試練だから。

「さてと。それじゃあ、今日はスタジオへ行かないとね？」

野口と悠治が戻って来た。彩華はホッと息をつく。これ以上英二と二人きりで話しているのは困る。

「英二さん、悠治さん。車を用意して参りますから、ここで待っていて下さいね？」

悠治はそう言うと、そそくさと事務所の駐車場へと向う。

「車の運転が出来るなんて良かったわ」

野口は有り難いと思っているようである。そういう雑務を任せられるからであった。

悠治は、今年の春の彩華の誕生日に車の免許を取得した。だから、こういう雑務を引き受ける事は問題なかった。車の運転くらいなんて事は無い。逆に、こうして運転する機会があれば、ペーパードライバーなんて事にはならないから、まさに都合が良いのである。

テレビ局入りしたジェイズの二人はすぐに控え室へと案内される。

「今日は、生放送だから気を付けて下さいね？」

悠治は慎重に二人に話し掛ける。これが彩華だとは思えないだろう。演技もここまですると彩華は笑いを堪え切れない。

「ま、お二方は慣れていらっしゃると思いますが、一応忠告です」

「あ、うん。ありがとう」

英二と悠治はメイクをし始める。そして、用意された衣装に着替え終わると、スタジオ入りまでの時間をのんびり過ごした。

マネージャーの野口はすぐに他の出演者達に挨拶をして来るからと控え室を出て行く。当然悠治も行くものだと思っていた。今日は悠治の仕事始めなのだから。しかし、どうやら今回は野口のみで行動するらしい。

「初めまして、英二さん？」

ここには三人だけ。だから、悠治はここぞとばかりに英二に話し掛けた。

「あ、初めまして……悠治からは色々噂を聞いてました」

英二は少しぶつきらばうに答えた。

「私の事調べて下さったそうね？こんな奴だけど仲良くして下さいね？」

「そうですね……仲良くさせて頂きます」

余計つつけんどんにされる。根に持っているのかなと悠治は思ったが、

「悠治は、私のただの幼馴染みですよ？」

悠治なりにこういう待遇を受けると、ちょっとからかいたい気分になり、意味ありげにそんな事を言つてのける。

「そう……らしいですね」

こうやっていちいち幼馴染みを言い訳にされると気分が悪い。すると、彩華に悠治に告白した事を相談しているのかも知れないと考えが及び、回りくどく、

「悠治は彩華さん？あなたに何か言いましたか？」

「何かって、何ですか？私の後を探偵気取りでつけた事？」

悠治はクスクスと笑ってみせる。英二の言いたい事は手に取る程よく解るが流石にここは、彩華を立ててやらねばと思った。

「あ、僕飲み物買って来る」

これ以上聴いてられないと、彩華は控え室から外に出た。悠治なら何とかしてくれるだろうと、後を任せたつもりだろう。

「！」

突然席を外した悠治に英二は、やはり彩華に話しているんだと気が付いた。英二の顔が少し引きつっているのに気が付き悠治は、彩華のアホがと苦笑いをした。

どう繕うかと頭を働かせようとしたが、先に英二が切り出して来た。「悠治、俺があいつの事好きだって告白した事、話したんだな？そうだろう？彩華？」

もう既に、彩華さんではなくなっている。悠治は苦笑いしたくても流石に笑えない。

「どう思う？こういう事私がどうこう言う事じゃないけどさ……英

二は悠治の何処が好きなの？あんな情けない男なんて私だったらお断りだわ」

悠治も負けじ劣らじと、英二を呼び捨てしている。ま、本音話している時にこういう事を気にするものじゃないけれど、やはり張り合いたいじゃないか？長い歲月、彩華を好きだった事への一つのけじめだった。

「だってあいつ、可愛いじゃないか！」

「可愛い？あつはははは、確かに可愛いわね、少女趣味もほとほと尽きる事無いし？阿呆だし、鈍いし」

「それって、悠治を莫迦にしてるってことなのか？」

その言葉は心外だとも言わんばかりに、悠治に対抗して来た。

「莫迦にはしてないわよ、あの子らしいって言ってるの。長年一緒にいれば良く分かってるわよ？そう言う所に気が付いているんだったら別に言う事はないわね」

悠治は、この英二がそう言う彩華をちゃんと知っているんだと言う事が分かってホッとしていた。男だから好きだと言うんじゃない、困るけど。

「ただ、男を好きになつていふと言ふんじゃない事だけ解れば、私は別段口出するつもりは無いわよ？」

「え？悠治は男だけど？」

「ま、確かにね。でも、男に惚れる人種つてのいるでしょ？そう言うのとはちよつと異質っぽいじゃない？英二の場合？」

そう。だから悩んでいるのでしょ？と彩華は英二に目配せする。

「だから悩んでいるんだよ。こういう事ってないからな、実際三回告白してるんだ。でも悠治からはその返事を貰っていない」

彩華が、よくその告白に应じてないものだと思つた。悠治は感心した。あの直情莫迦なら返事してそうなのに……でも流石に入れ替わらないと彩華自身気分も晴れないだろう。

「英二？私って勘が凄く鋭くてね。こういった類の事に関しては天性の予知ができるのよ」

悠治はしょうがない。一つ人肌脱ぐかと進言する。

「予知？」

「そう、ここにランプやタロットカードがあつたら占つてあげても良いんだけどさ？でも無くても解る事だから一つ言っておくわ」

「何？」

「今は想いは届いてるけど叶わない。でも、ある時期が来たら、あなたはちゃんと手に入れる事ができる。ただし……」

そこで悠治は一息入れた。

「ある意味成就するけど成就しない。それだけよ」

英二には悠治が言つた事の半分も解らなかつた。成就するけど成就しない？それは、どう言う意味なんだろうか？悠治との事なんだろうけれど、想いは届いているけど叶わない？それは、やはり悠治は自分の事を快く思つてないって事なんだろうか？でも、ある時期が来たら手に入れる事ができる……解らない。

「ま、気長にやってみる事ね？一応言っておくけど私は英二の味方だからね」でも、悠治に何かしたらその時は黙っていないから……私の力は知っているでしょ？それが、私にできる幼馴染みとしての悠治への好意よ」

軽くウインクしたところで、彩華が戻つて来た。頭を掻きながら英二は今までの彩華との話を考えている。これから仕事だと言つのにイマイチ乗り気になれない。

「あの〜ジュース飲む？」

彩華はこの状況下少しオロオロしていた。

悠治は一体英二と何を話していたんだろうか？席を外しておきながら気になって来る。しかし、悠治はにっこりと笑っている。ま、全てを悠治に託してこの場を外したのだし、文句を言う事など出来はしないのだ。だから、少し元気の無い英二に、

「もう出番だつて野口さんが言つてた。スタンばらないとね？」

背中を叩いていつも通り振る舞う事にした。

こんな風に過ぎて行く一日。彩華はドジをよくする。それをカバーするのが英二。チグバグな感じはするけど、意外に上手くいっている。スタジオの端からそれを観察するのは凄く面白い。やはり、芸人としての悠治の洞察力は鋭かった。そのスタイルが、このジェイズを愛してくれるファンを作るのであるう。

「ほんと、仲がよろしいんですね？お二方は？」

スタジオ内での司会者もそう言う所を気に入っているらしい。

もし、彩華と自分が入れ替わらずにこの英二とコンビを組んでいたならば？こういう風にファンには愛されていないかも知れない。

戻った時、演技でもしながらこのコンビを上手く作り続けなければならぬだろう。そう思うと、何だか難しい気がした。

彩華のボケは天然だから成り立っているしなあ。今からボケの作り方を研究せねば。と、番組の最中ずっと二人の様子を客観視している悠治であつた。

「お疲れ様！」

野口は、控え室に戻るといつもの儀式でも有るかのように同時に二人に声を掛ける。

「僕、また歌詞忘れた……」

彩華はすまなさそうに、英二と野口に謝っていた。

「良いつて事よ。何とか繋ぐ事出来たしさ？」

英二はそれを上手くなだめている。ユニットである以上、もちつもたれずだと言わんばかりだった。それがコンビの鉄則なのであろう、悠治も納得して、二人にその旨を伝える。

「今日は遅いから、私がお二方をお送り致しますわ」

悠治は、自ら進んで野口に伝える。確かにこれから先の事を考えると、この二人を送り届けるのは自分の仕事だろう。

「そうね。夜も遅い事だし、運転出来る礼子さんに送ってもらったら？」

野口もその言葉を受け取る。本当だったら、マネージャーの管轄な

のだろうけど、野口は運転が下手らしい。一度ベントにぶつけた事が有るとか？有能だけれど、こういう事はしない方が無難だろう。マネージャーの癖にと思えるが、彩華も英二も、今まで不満を垂れた事は無いらしい。そしてテレビ局を離れる時、

「先に悠治を送り届けますから」

悠治は彩華を後にすると、ろくでもない会話が飛び交うのではないかと心配だった。それに、車を自分のマンションに置いておく訳にはいかない。そう思ったからこそ、先に彩華を送り返した。

「彩華？念のため、携帯番号教えてもらえるか？」

悠治が彩華を送り届けると、英二は少し経ってからちよつと控えめに問いかけた。

「あ、うん良いよ」英二だったら問題ないしね？何か相談事が有ったらいつでも連絡くれて良いから。こちらはね？」

「すまない」

すると、交差点で待ち時間が有る時にスケジュール帳に番号を書いて渡す。英二はそれを直ぐさま携帯電話に登録した。

「……俺の味方って言ってたけど、本気でそう思っているのか？」

英二は登録を終えると、ワンコールの電話を悠治に送った。

「今送ったの、俺の携帯番号だから……」

「了解。登録しておくわ。私、結構嘘付くけど、これは本当。それにしても英二ってさ、テレビで見るより意外と臆病なのね？もつと男らしいかと思ってたわ」

「芸能人やってたら、そう見えるかもな？それでも役者志望なんだよ。俺」

「へーそうなんだ？じゃあ、歌手やりながら俳優目指す訳？」

交差点の信号が青に変わり、まだ雑然としている夜の街を再び車で移動し始める。

「そうなるな」本当は一本に絞りたいんだけど、事務所がうるさくてね。今成功しているんだから、もう少し待ってくれて頼まれて

るんだ。彩華は色々な方面で活躍してるから、こういう気持ちは解らないかも知れないけど」

その言葉は受け入れかねた。悠治は歌手になりたいのだから。でも、自分の意志とは反する事をやっていると言う点では共感出来る。

「ま、この先どう転ぶかなんて考えるより、今を生きた方が最善の策よ」

「……それは言える」

「望みは高く持つ事も大切だね？」

「そりゃそうだ！」

そこまで話すとわだかまりが解けて、二人して笑った。

「意外だったな」頭の働く切れ者だと俺思ってたけど、こうやって話すと、彩華って普通なんだな」あんなゲームまで仕掛けなんてさ？」

「普通？確かにそうかも知れないね。自分を作るの大変でさ」いつの間にかこういう技を拾得してしまった訳よ。ほとほとそれが本当の自分か解らなくなるけどね？」

「別に作らなくても良いんじゃないか？」

「芸能界にいるのよ？作らなくてどうするのさ！周りは敵ばかりなんだもの」

英二の指示通り、ハンドルを右に切る。

「確かに敵ばかりだけど。信頼関係つてのは演技で通用するものじゃないぞ？時には本音がちまけた方が良い時だってある」

「そう言う英二は本音がつける事って有るのかね？」

「あるさ。正直に生きているつもりだ。だから困る事がたくさん有る」

「悠治の件とか？」

「そうだな……」

「余り深く考えない方が良くよ。成るものはちゃんと成るんだしさ」

「それも一理有るな……あ、俺の家ここだから、どうも悪いな」

と、止まった先は築十年と言う感じのアパートの前の道。

売れて来たのにこういう所で一人暮らしか……地道に苦勞しているんだなと悠治は思った。英二への印象が少し変わった気がする。

「次は明後日の雑誌の仕事が有るからね。それから、五日後には、マキシシングル用のカバー写真も！また連絡するから、暫くの間は学校に行つて勉強に励む事ね？」

車の窓ガラスを下げ、それ越しに英二にこれからのスケジュールを伝える。

「分かった。でも後一週間もすれば、夏休みかゝ補習が有るかも知れないけど、大丈夫だろうか？」

「スケジュールに穴が空かない程度に、学校に行つておく事だわ。じゃあ、おやすみなさい」

悠治は窓ガラスを上げ、この英二の自宅を去る事にした。

今日一日が慌ただしく過ぎて行く。でも、欠かす事の出来ないお地藏様の所には行つた。そこには既に、彩華が供物を供えていた。

「悪党！帰つて来たわね」

「悪党つて何だよ！人聞きの悪い言葉使うなよな！」

マンスリーマンションの一角に宿を取っている悠治と彩華。二人は隣同士に部屋を借りている。悠治が言つた通りの事を彩華は実行したのであつた。

「ママは嘆くは、パパは深刻になつてゐるは、あの日の心地悪さつて悠治には解らないでしょ？あゝもう最悪」

「んな事言つたつてさあゝもうこつなつちやつたものはどうにも変更する事なんか出来ないつしょ？」

諸悪の根源の悠治は別段反省するような姿勢が無い。

「撤回なさい！今直ぐ！」

「出来ないね！それは！」

悠治は、戸口でこんな話を話すのもなんだしと、彩華を部屋に入れる。

「この間からそればかり言つてゐるな。彩華は少し他の事に頭働

かせるよ？苛ついてると、ぼけやすくなるぜ？」

クククと悠治は笑う。他に気が散って、歌詞忘れるなんてのも、仕事やってる資格ないと思われる。ま、それも悠治がやらせているとはいえ……

「パパとママにあんな心配させるなんて……いくら私の家庭が芸能一家だからって許される事じゃないわ！悠治が直に会って怒られてみなさいよ！」

「彩華は、どうせ芸能界引退するんだろう？だったらこれくらいやらかして引退した方が良いつて！印象悪いけどな？」

「引退するのしないのは別問題でしょ！それにもつと普通に引退したいわよ！勝手にこんな事やらかしてる人が言わないで欲しいわ！」これはもうヒステリーの域に達している。と悠治には分かっているので話を逸らそうとした。

「英二……と仲良くする為にもこれは必要だろ？」

「え？英二？」

話を変えると静かになる。なんて単純な奴なんだと悠治は心の中で苦虫を潰した。

「お前なあゝあんな話をしてる時、席を立つなよな」英二、僕に彩華が話したって気付いたぞ？」

この言葉は彩華にダメージを与えたらしく、暫く黙り込んだ。そして一言、

「どうしよう？」

だから、始末におけない。自分で何も処理出来ないんだから……でも、こういう彩華であるからこそ放つとけないのだ。

今にしてみれば、幼馴染みとしてだけだ。

「こっちは上手く話しておいた。彩華が相談した事は余り気にはして無いようだったけどな。あばたもエクボってやつだろう。でも、普通こういう事を異性に話して聞かせるのは相手にとって不愉快だと言う事考えとけよ？ただでさえ、英二にとつたら僕（彩華）は恋

敵だと勘違いしてるんだから！」

「あ、うん……分かった。気をつけるよ……で、何とか成るものなの？」

「何とか成るじゃ無くて、するものなの！って、こういう場合無理だけどなあゝ考えてみて分かった事は、英二に彩華をアピールさせておく事だ。で、僕はお前達の側で見守る事にした」

「いってても、入れ替わり完了の期限を判っている悠治だからこういう事ができる訳で、彩華にとったら何の事だか解らない。」

「英二は、彩華の性格が好きなんだと判った以上、中身が変わったらもしかしたら、彩華を好きになってくれるかも知れないだろう？それも、一種の賭けだけどな？」

そこまで話して、

「英二は、美人は苦手なんだって、前話してくれたこと有るよ。大丈夫なのかな？入れ替わってそんな簡単に私を好きでいてもらえるのか解からない……」

彩華は弱音を吐く。

確かに容姿つてのは、気になるものだろう。誰だつて見た目から入る訳だし。でも、そう言う域を英二に超えてもらわなければ困るのは、悠治だつてそうだ。男に惚れられているままなんて考えたくは無い。世のそう言う関係の人達には悪いが、やはり困る要因だ。

「一つ言っておくけど、僕には今好きな子がいる。それも、彩華として知り合った子だ」

「それつてもしかして……あの中学生？」

「そう！桐原奈々子ちゃんつて言う子なんだけどね。今度もし奈々子に会う事が有る時は、悠治として逢わなければならない。それに奈々子が僕を好きになってくれる可能性なんて無いに等しい。相手は彩華として認識してる。奈々子には好きだつて言われた事など無い。解るか？彩華だけが苦しい思いしてる訳じゃ無いんだぜ？」

自分の事にしか気が回っていない彩華の頭を冷やさせるにはこれを言っておくべきだと思う。少しくらいは、悠治の想いと言うものを

考えてもらいたいものだっただ。

でも、今の話を聞いて少しくらいは気が付けよ？上等なヒントを言っただから？

でも、彩華は、気が付く事は無かった。悠治として逢う。と言うヒントに気が付かないなんてよほど頭の回転が悪いのだろう。か、あの時悠治が奈々子に言った言葉を把握していないのであるのか？

「そうだよな？私だけが辛い訳じゃ無いんだよな？」

少し彩華の頭が冷めて来たらしい。このままじゃいけないと考えは及んだのだろう。

「そう言う事だから、ま、僕の気持ちも伝えただし？部屋に戻ってこれからの事考えな。とにかく、英二とは上手くやって行けそうだと思うし、心配する事は無いよ。彩華は彩華らしく振舞ってれば良いとだけ言っとくわ」

悠治がこれ以上ここに彩華を置いておく事もなんだしと話の腰を折ると、彩華はその場を去る。こうして、暫くの間は何とかなるであろう？悠治はそう思っていた。

#17 悠治誘拐事件

二日後、歌番組用の雑誌の取材のスケジュールが入っていたので、悠治は二人を車に乗せ事務所に入った。そして、野口を乗せ、取材用に設定された場所に急ぐ。

「礼子さんこつちへ……こちらが担当の原口さんです」

取材担当者を紹介され、悠治は頭を下げる。頭を下げるなんて滅多に無い事なのに、悠治はいとも簡単にこなす。その様子を彩華、英二も見ていたが、自然すぎたので思わず笑いが溢れた。

「では……」

始まって一時間。長たらしい取材に悠治は座っている椅子から転げそうになった。

周りは結構話に華が咲いているようだが、どうもこのノリについていけない。何でこんなに長いんだ？と思いつながら聴いてると、どうやら彩華の『のりくらり』した話し方に問題が有る事が原因だと分かった。でも、それを楽し気に盛り上げカバーしているのが英二。ま、こういう二人だから何とか成り立っているのだろう。端から見ている分には辛い、取材陣が楽しいのならば問題は無いだろう……しかし、こんな彩華がよくオーディションに合格出来たものだな？よほど他の者達に適任者がなかったかだ。欠伸しそうになって、直ぐに口を紡ぐ。マネージャー補助としての立場に気が付いたからである。

「さて、この後はもうスケジュール無いから解散ですね？」

三時間にも渡った取材。聴いてるこちらはいい加減眠くなっていたので、悠治は思わず野口に進言する。

「あら、何処かでお茶でもして行きませんか？せっかく時間も有る事だし？」

「経費ででしょうか？」

悠治は、ちょっと嫌味を言ってみたくなった。小さな事務所なのにこういう事にお金をかけるなって言うの！

「そうですね。経費で落としましょう。では何処に行きたいか、決めて下さい？」

決めて下さいって……悠治は結局運転しなくちゃならない。乗ってる方は気が楽だろうけど！と毒づきたいけれど、

「悠治さん、英二さん？どちらまで行きたいですか？」

引きつりそんな笑顔を隠して悠治は笑った。

それから三日後はマキシシングルの撮影。曲のイメージからも受け取れる、夏らしく、晴天で良かったと心から思う。

炎天下にレフ板は眩しかったが、彩華も英二も撮影を快く引き受けてやっている。この日は少し遠出して湘南の海に来ていた。

夏休み前だと言うのに、遠巻きに人が集まって来ていたが、撮影陣はそれを上手くあしらひ撮影を始めた。

何も湘南で撮影しなくても。沖縄とか、ハワイとか……と思うけど、そこまで資金が出ないのであろう。悠治にしてみれば、ちょっとこの撮影は不服では有るが、一日で帰れる所で無ければ困るのは、地蔵の事が有るからだ。

一日に一回必ず訪れなければならないなんてなあ、彩華のモデルの仕事で海外とか、一日で帰れない場所とか指定されても絶対行かなかったものである。せつかくの旅行も今までした事が無い。なんて面倒な話だろう？こんな事まで見通されているのかと思うと、腹が煮えくり返りそうだが、自分が蒔いた種だし？といつも心の中で納得する。

天の啓示に抗う事など出来はしないのであるのだから。

にしても、余りにも気持ちが良い。ここで、泳ぎに行きたいなあ、なんて言い出す事も出来ないし。タオルを被って日陰を作るだけで止まった。何だか残念な一日である。

こうやって、ジェイズの仕事を片っ端からこなして来た悠治であったが、世間はついに夏休みに突入した。

学校の補習に行けない悠治は、単位を気にしなければならぬが……ただでさえ、期末試験を受けていないしで考えなければならない事は山ほどある。が、これは最終的には彩華が背負って行くものであると知っているので余りそこまで考える気にもなくなっていた。

彩華は朝早くから学校に補習に行っている。自分のツケをちゃんと払ってくれている訳だ。思わずニマリと笑う。こういう悪知恵は人一倍の悠治だからこそできる技である。彩華がいくら出来が悪くても、堅実にやっているだけ問題は無い。後は、彩華が引き受ける問題だ。きっと驚くだろうなとか考えると、冷房の掛かった部屋で寝っ転がって雑誌を読んでいる自分が本物の悪党のような気がして来る。

「悪党上等！」

思わず口に出していた。この時の悠治は知らなかった。期日まで後一週間。こういう考えをしている自分に跳ね返って来るしっぺ返しと言っものを……

「今日も悠治は家で寝てるつもりかな？」

学校の補習を受けに行く為に彩華が玄関でばやいていた。

ここでの一人暮らしにも慣れた。自分で作る食事はそんなに美味しいうと言っ訳でも無いけど、結構何とかなるものだと思っ。時々、悠治におかずの作り方を伝授してもらっ事も有ったが、教えてもらったものは一通り作る事はできるようになった。

これだけは、不器用な彩華にとって自慢したい事である。料理が上手くなれば、良いお嫁さんになれる。その下準備だと思っていた。

そんな事を考えながら玄関のドアを開けた。しかし、突然視界を覆った物体に跳ね返され、玄関に倒れ込んだのである。

「いったゝ……」

玄関に立っている知らない男。それに気が付き、

「誰？」

「悠治だな？一緒に来てもらおう！」

二の腕をきつく握りしめられて彩華は何が起こっているのか分からなかった。とにかく、これは尋常な事では無いと悟ったまでは良かったが、逃げ道は無かった。

「黙ってついて来れないならば……」

後ろにも誰か居るのか？二本の碗が、彩華の顔に近づいて来る。

『布？』

白い木綿のようなものを彩華の口元にあてがって来る。そこまでは覚えていた。が、その後の事は一切覚えていない。何だか薬物の匂いがかがされたらしい。事は解る。けど……

ボーっとした頭の中は直ぐに暗闇の中。身体が宙を浮いているような感覚。それだけだった。

「電話だよ！電話だよ！出てちょうだいな」

繰り返し携帯の着信音が耳に届く。昨日は遅くまで起きていた為、悠治はこの着信音がウザくて仕方なかった。どうせ彩華だろうと思つて、手繰り寄せたその着信が、英二からの物であると気が付くと、
「あ、ごめん。寝てた」

直ぐに目が醒めた。

「悪い。悠治に電話してるんだけど出なくてさ。そっちにいるか？」

「悠治？うつん。今日は補習で学校に行ってるんだけど……変だね？この時間にまだ帰って無いなんて……」

「いつも、この時間なら大丈夫だって言ってたから、掛けたんだけど……そうだな。変だな……」

「隣、行ってみるわ」ちよつと待ってて、折り返し電話するから」

悠治は、そう言つと玄関から外に出る。そして、彩華の部屋の呼び鈴を鳴らした。が、一向に出て来る様子は無い。

「地蔵の所にも行ってるのか？にしても、英二からの電話に出ないなんて事、彩華がする訳ないんだけどなあ」

ポーツと考えていた。そして、彩華の玄関のノブを回した。鍵は掛かって無かった。

「鞆が転がってる？どうしたんだろう？忘れて行ったなんてあり得ないしなあ」

不思議に思ったが、自分の部屋に帰ろうとした時、頭を殴られた感覚に陥ったのである。

『悠治の身柄はこちらが預かった。彩華自身で捜しに来い！警察には連絡入れるなよ！』

悠治の部屋のドアの内側にパソコンで打ち出した用紙がセロテープで貼り付けてある。

「しまった！彩華！」

悠治は、彩華が誘拐された事に今になって気が付いたのであった。

「ごめん。英二！悠治……誘拐された！」

自室に戻るや否や、悠治は携帯で英二に連絡を入れる。

「悠治が誘拐？一体どうして！」

考えれる事はただ一つ。彩華のゲームが忘れ去られた訳じゃ無かったと言う事だ。

ここ数日補助マネージャーとして働いたり、マンションに隠れていた為すっかり忘れていた。平和すぎる日々には頭が慣れ切ってしまったのだ。

どうしてここが漏れたのか？それは解らないが、こうやって悠治の部屋の中に貼り紙を残している限りバレてしまったのである。そして、彩華ではなく悠治を狙ったのは、幼馴染みである事を利用して犯行を行った為であろう。それしか考えられない。

もしかしたら、奈々子の学校での騒動を見聞きした者が、彩華を説得出来る唯一の人物が悠治だと聞き習ったのかも知れない？

考えれば考えるほど、要因は色々有る。今回の件は、悠治にとって

の失敗であつた。

「私のゲームが原因だわ、きつと……どうしよう?」

流石の悠治もこれには頭が働かない。どうやって見つけるって言うんだ? 犯人の目星もつきはしない。場所も解らない。

「ちよつと待つてくれ。落ち着けよ、彩華?」

「落ち着けたつて……落ち着けるはずないじゃない?」

「分かつた。今からそっちに行くから事情を話してくれ」

意外に落ち着いている英二に少しホツとした。きつと貶されるかと思つたから。

「電話回線か、ケーブル引いてるか?」

「うん。それは大丈夫……」

「俺専用のノートパソコン持つて行くから、それまで待つていてくれ」

「ネットでもする気?」

「一番手つ取り早いからな……きつと、ネットで検索掛けられると思う。最近騒ぎはなくなつていようだけど、この手のは、きつとネット絡みだと思えるんだ」

「分かつた。じゃあ、待つてる」

悠治は、英二が来るまで待つた。実家に戻れば自分専用のパソコンが有るが、持ち出す為に戻る訳には行かない。こんな時にまで、自分が言い出した事を曲げる事は出来なかつた。最後まで貫き通さなければ、このゲームを終わらす事は出来ないからだつた。それが、悠治のエゴであつた。

一時間後、英二は言つた通りノートパソコンを持ち出して悠治の部屋にやつて来た。

「ケーブルで良い? さつき、契約しておいたからすぐにでも使えるわよ?」

「うん。サンキュ!」

英二はテキパキと配線を結んで、ネットを稼働させる。

「で、何処から検索するの?」

「彩華に組みする物を片っ端から当って行く。何処かにぶち当たるだろうからな？」

それからは、念入りにチェックして行つた。

しかし、該当する物はことごとく違つていた。

「でも、何処かに無くちゃ、捜しに来いなんて言つ文句はつけられないだろう？」

「確かにそうね……しかし、このゲームがこんな誘拐事件にまで発展するなんて……」

その通りだった。言うなればこれは犯罪だ。それをこんなに考え無しにするなんて、馬鹿げている。

「警察は動かせないからなあ」

「でも、仕事があるでしょ？悠治がいなければ、事務所だつて誤魔化しきれないわよ！」

「そこを逆手にとるんだ。警察がダメなら、こちらはこちらのやり方が有るだろう？それに君は彩華だ！」

「そうだけど……一体どうやって？」

「こういうのはどうだ？」

ボソボソと英二は悠治に話して聴かせる。

「なるほど。警察がダメなら、これしか無いわね！ちよつと携帯で話さなきゃならないけど。良い？」

言うや否や、悠治は彩華の父親の携帯に電話を入れた。

「判っているわよ！それより聴いて！大事な事なのよ……」

叱られるのを覚悟でかけたけど、急用の話は、父親を黙らせていた。一通り話し終えると、

「じゃあ、パパ宜しくね！これは、悠治の為でも有るんだから。今まで悠治には色々世話になつて来たでしょ？お小言は全てが終わつてから聞いわよ！じゃあ！」

これ以上話を聴いてる暇は無い。直ぐさま電源を切る。

「テロップの件は聞き入れてくれたわ。私が彩華で良かったわね？」

自分に言い聞かせる気分だった。

「これで、こちらのホームページにアクセスしてもらえば、話がつけられるわ」

その言葉を受け入れて、英二はホッと息をつき、絨毯もひいて無いフロアーに胡座をかいた。

「いつ頃流れるんだろうな？それまでに、ホームページを作らないとな……」

英二は慣れた手付きでホームページ作成に励んでいる。

「簡単で良いだろう？どうせ、緊急ものだし」

一応、彩華のホームページになる訳だ。お伺いをたてなければならぬだろう。

「良いわ。なり振り構ってられないからね」

悠治は真剣に答えた。テロップが流れたのはそれから三時間後だった。もう、既に夜の九時だ。

『緊急告知！彩華のゲームはまだ終わって無い！つわもの共！いざ勝負！アクセス先は……』

「さて、これを見る人がどう反応するかよね？それに一番肝心なのは犯人がこれを見ていれば良いけれど？」

「見てもらわなきゃ困るな。たった一回だし、見逃されたら一貫の終わりだぜ？」

そんな英二のセリフを聞き、悠治は大事な事を今ハッと気がついたのである。

「もう、全てが終わったんだ……」

そう、悠治が発したこの言葉は、拘束されている彩華のことを考えたからだった。

全て、自分勝手な行動をしたばかりに……これは天罰なのかも知れない。彩華は、地蔵の所に行く事が出来ないはずだ。それは、地蔵との約束を違える事になる。つまり、悠治と彩華が入れ替わる事は

出来ないと言う事なのだと。

入れ替れない。それは、未来が無いと言う事になる。今もし彩華が死んでいたとしても、生きていたとしても、一生自らの器に入る事は出来ない。僕達は、どうする事も出来ない。

彩華に凄く悪い事をしてしまった。叶うかも知れない恋を、ぶち壊した。どうすれば良い？……一生このままでどうしろと言うんだ？自分はもうどうだって良い。奈々子の事を忘れて、仏門の道を歩く事だってできる。

それで償いきれるのであれば、こんな命くれてやったって良い。でも、彩華は？彩華を不幸にする事なんて出来はしないんだ。これ以上、自分がやった事の不始末をつけられない状況を作る訳にはいかない。せめて、彩華には幸せになつて欲しい。

「終わりつて……まだ何も解決してないだろう？何、悲観的になつてるんだ？彩華らしくないぞ？」

既に自棄になつていた。ここで、全てばらしてしまふのも良い。悠治は彩華で、彩華は悠治で……だけど出来なかった。

そつだ、まだ勝負を捨てる訳にはいかない。彩華は生きているはずなのであるのだから。生きてる彩華に申し訳ない思いで一杯だった。「あ、ごめん、ちよつと混乱しちゃてさ……」

そつだ。英二も、いてもたつてもいられないはずだろう。それをこんなに落ち着いていられると言う事は、それだけ彩華を信じていたいのだろう。

「営利誘拐と言う訳じゃない。犯人は、彩華をターゲットにしている訳だ。つまり、彩華が行かない限り犯人からのゲームは終わらない。そして悠治は戻つて来ない。時間は、一週間。どうする？持久戦だぞ？」

英二は、真剣に問いかけて来る。そりゃそつだ。悠治が関わっているのだから……

「それは大丈夫。こつちも受けて立つわ。でも、英二？悠治が仕事に出れなければ、問題が起こるわよ？事務所にはどう言い繕うつも

り？」

「それは任せて貰うよ。悠治は旅立ちましたとでも銘打って、ファックス流しておく。その間は俺も動けないな」

「じゃあ、私に手を貸して！当分ここに居てもらう事になるけど……平気？」

「あ、でもそれはまずいんじゃない？」

「構わないわ……あなたは悠治が好きなんですよ？そんな人が私に何かするとは思えないものねえ？」

悠治はやつとここまで来て笑う事が出来た。せめて、入れ替わりが出来ないとしても、彩華と英二の味方になってあげたいと思う。そう言う世界に足を踏み込んで良いだろう？

変な事だけど、変じゃない。好きな者同士上手く行けば良い訳なのだから。

そんな事を考えていると、

「早速アクセスして来たぞ……」

簡単なホームページにアクセスし飛び込んで来たメール。

「悠治は手厚くもてなしているよ。早速こういう方法で連絡取ろうとした事は褒めてあげるね。で、良ければこんな映像が有るんだけど見るかい？アクセス先は……」

英二と悠治は直ぐさま、そのアクセス先のアドレスを打ち込み、そして裏ホームページへと入り込んだ。

どうやら、自家製のビデオカメラで撮った映像だけを取り込んで成り立たせているページらしい。色んな項目が有る中、本日の項目に当る日付けを選んでクリックする。すると、何処かの港が映し出された。遠くに大形の船が見える。そして、目を布で塞がれた彩華らしき人物がその画像の前を横切った。そこまでで画像は切れている。「これは、悠治が生きていると言う事を言いたいんだろうか？」

英二は不思議そうに問いかけて来た。

「いや、この場所に悠治が居るって事を言いたいんだと思うわよ？

港ね……まだ陽が落ちてない位だから、結構前に撮っている画像だわ……つまり、東京近辺だと言う事よ！」

「そうか……なるほど。この辺りだと、港って何処になる？」

英二は、そこまで言って、今入ったホームページを記憶させている。「地図が有れば一番良いんだけど……明日買いに行つて来るわ。丁度良く、直ぐそこに本屋有るしね。今日はこれ以上犯人からアクセスして来る事はないでしょうよ。寝ましようか？英二、ベッド使つて良いよ、私、ここで寝るから……」

悠治はフロアーにそのまま横になる。

「ここは、彩華の部屋だろ……良いよ。俺がこつちで寝るから……」「良いの！使つてちょうだい！私が巻き込んだんだから、これくらいさせてよ！」

その前に、一応憎たらしい地蔵の所に顔を出して来るか……もうどうでも良い事なんだけど、この責任は自分で払わなきゃ気が済まない。

「ちよつと、買い出し行つて来るけど、何か必要な物有るかな？」

「出掛けるのか？」

「まあね。いつもの日課だからしようがないのよね」

『日課』と言う言葉に、家に顔を出すのだろうか？と思つたらしい。英二はそれ以上突っ込んで問いかけなかった。

「じゃあ、一週間寝泊まりするだけの服と、携帯歯ブラシ買つて来てくれるか？レシート渡してくれると、こつちがそれを計算して払うから」

でも、悠治はその支払いは気にしないでと言ひ放ち、一つ念を押す。

「それじゃ、先に寝て……私は適当に寝るから気にしないでね」
その夜から戦闘が開始された。

#18 搜索・手がかり・地蔵

「帰って来たら、床で寝てるんだもん！怒るわよ！」

次の朝は、けたたましい怒りの声で英二は目を醒ました。

結局ベッドは使わなかったらしい。悠治が起そうと思ってても気持ち良く寝てるし、それを遮るなんて出来なかった。

「はい！御飯！」

適当に作った御飯を英二に渡す。英二は、寝起きが悪いのかモゾモゾと遣いずり回っている。しかし、何とか御飯を食べ終わった頃には、目が醒めたらしい。

「昨日、あれから見てただけど……」

「ああ、あの映像？」

「昨日の映像以外の日付けを確認したんだ。そしたら……」

「何これ！」

それらは、悠治のこの一ヶ月をストーカーしたのか？全て映像として映し出されていた。

「犯人は、ゲームには参加せず、彩華を追い掛けこうやって映像に撮ってみたいだな」

悠治は気持ち悪い思いをした。こんな映像を撮っているなんて、ゲームに堂々と参加した者達に比べて陰険に感じられた。

「それからコレ！昨日の映像だけど……」

英二がダウンロードしたのか、その映像をまた見ている。

「この奥に見えてるの、横浜ベイブリッジか、レインボーブリッジか？大きな橋のように思えるんだ」

薄ぼんやりとして、霧が掛かったかのようなその映像は余りはつきりしないので、悠治にはよく解らなかった。

「そうなの？」

「これだけだから判らないけど、この近辺で大きな橋としたら……間違いないと思うな」

英二はそこまで考えて、途方に暮れた。

「もしそうだとしたら、その辺りを背景にした港ね……」

「地図買って来たら、当たりをつけよう。それに、今日もしかすると、また映像更新して来るかも知れないし、そちらの方も確認しておくよ」

お互いの話がついたところで、悠治、英二はそれぞれお互いの配分を決めて、結論に到る為に動き始めた。

「ここら辺に見えてるって事は、川崎か横浜。多摩川の下流付近の港……船橋、浦安辺りかな？木更津までは流石に離れてないとは思うが……」

地図を買って来て二人はそれを広げた。そしてあり得る港に赤マルを付けチェックする。

「お台場って事は無いかしら？」

「あの辺りに港なんてあったか？」

そんなに港に出る事なんて無い。よって未知の世界だ。空想を働かせるしか無い。

「こんなに広いと、何処だか解らないな」

目の前のテーブルに広げられている地図に英二は何かを考えるようにしてちよつと、一息つく為に缶コーヒーに手を伸ばす。

「不愉快だけど、親父に頼むか……」

「お父さん？何してる人？」

「警視庁総監やってる……」

苦笑いして、溜め息を漏らした。

「でも、そんな警察に知らせたら……ていうか、警視総監の息子が芸能界に何でいるの！」

悠治は今知らされた事柄にあぐりと口を開けて驚いた。

「俺、三人兄妹の末っ子でさ……一番上の兄貴は弁護士で、姉貴は検事。そんな中で育ったからあぶれてる訳よ。で、昔から俳優に憧れててさ？この道に入りたかったのさ。姉貴は賛成してくれたんだ

けど、両親はそんなヤクザな仕事を反対してね。勘当状態。だから一人暮らししながら励んで行こうかなとか思ったり……人それぞれだよな？」

確かに、親の反対は当然だろう。悠治はいたたまれない思いを英二に抱いた。

「結構遅しく生きてるのね？」

「でも、これはやはり俺達だけじゃ解決出来そうに無いな……奥の手に、親父に出て来てもらわないといけないかもな？」

その言葉に、悠治は両親に頭を下げる英二の姿を思い浮かべると何だか気の毒な気がした。

「それは、奥の手に取っておくようにしようよ？何も頭下げるなんてしなくても……」

「しかし、これは立派な誘拐事件だぜ？犯罪だ。敵がどう思おうと、やはり打つ手は考えておかないとな？」

「でも、奥の手に取っておくのよ！それからでも遅くは無いわ？ねえ？それより映像の方はどう？」

再びホームページを開く。

「これ、今日の日付けじゃない？見てみようよ！」

その日付けをクリックすると、立ち並ぶ空きの倉庫の列が露になっている。その内の五番倉庫のシャッターの前に彩華が両手首、両足を結ばれて座らされている。そこで、また映像がストップする。

「あんなに立ち並ぶ倉庫なんて一体何処よ？」

悠治はイライラしながら英二に問いかけるが、解らない。

「この映像だけだな？一人がカメラを持っている訳だろう。で、誰かが悠治を誘導している。少なくとも二人以上の人間が関わっている可能性が有ると思うんじゃないか？」

「あ、そうね……一体何人がこんな事してるんだろう？悠治、大丈夫かな……」

悠治自身こういう画像を見ていると彩華が不憫で仕方ない。ちゃんと御飯は食べさせてもらえているのか？脱水症状なんて起して無い

だろうか？だんだん心配になって来る。

「やはり、これは親父に頼むしか無いかもな。これだけで警察本庁が動くかどうかは解らない。極秘で捜査してもらえるのなら、相手も解らないだろう？こんなガキの騒動に大人を加えるのは些か不満だけだな……」

悠治の事を心配しているのが手に取って判る。だけど……

「ねえ、私のホームページに行ってみてよ。誰か掲示板に情報入れてくれてるかも知れないし？」

情報ね〜と英二は思ったが、実際掲示板は大賑わいであった。リンクとして張っている、あの裏ホームページの映像を、不審に思った者達が集っていた。中には、悠治が誘拐されていると言う事まで感じ取った者までいる。皆が皆色々な情報を寄せていた。

「彩華？これって、良い具合に情報提供してくれる者がいるかも知れないぜ？」

「私もそう思うわ！」

俄然やる気が湧いて来る二人。

「色んな人がこのホームページに目を向けてくれている。きっと、この事件は公になる事だろう……事務所知られるのは時間の問題だけど。警察に知られると、場所を移動する恐れは有るな……まあ、知らせた訳じゃないが、気をつけなければならぬ」

「でも、これなんかは立派な情報よ？」

「埠頭の名前が書かれてるな……」

「私、そこに足運んでみる。英二はここで待機してて。何か又情報が入ったら、携帯に連絡ちょうだい！」

悠治は直ぐさま行動を開始する。しかし、その場所に行ってみたは良いが、何の手がかりも得られなかった。

次の日も次の日も、そのホームページは倉庫の中で、柱に縛られた悠治の姿しか撮られていなかった。見覚えが有る倉庫ならまだ良いがそう言う訳では無い。だから二人には全く解らない。

どうやら、あの立ち並んだ倉庫の五番倉庫の内部なのであろう。しかし何も解決する事なく日は過ぎて行く。次から次に情報提供者が彩華のホームページに訪れては書き込みしてくれてはいるが、どれもその倉庫の物では無かった。悠治がひたすら情報の通り動いてはみるが、全く手がかりはない。

そして、この事は、一般人達の中で噂となり伝わっていた。中にはジェイズの悠治のファンまでも訪れるようになった。

悠治の誘拐事件。

そう言う事で、ワイドショーにも取り上げられるようになった。

悠治も、英二もこの事件を振り払うように行動しはじめる。英二はもう悠治の部屋から外に出る事は無かった。

マネージャーの野口はそんな事実はない……と世間に訴えている。

悠治は休暇を取って旅に出ていると発言していた。ファックスでそう告げられていたから当然だった。それは結構抗力は有るが、ファンは心配だろう。英二に連絡して来た時も、勿論そう言った。そうしないと、警察が本当に動き始めるであろう。そして、一週間はあつと言う間に来た。時間が足りない。ついにゲームの最終期限が来てしまったのである。

その日まで悠治は、お地蔵様の所に毎日通っていた。彩華の無事を祈る為であった。もう、入れ替わる事は出来ないとしてもこういう形で反抗してみたかった。その反抗が、地蔵に届くかどうか解らないが、彩華の分まで祈りを捧げる。夜に朝に、一度はそこに通う事になっていた。

期限日それは、悠治と英二の神経をすり減らしていた。そして徹夜でその日を迎える。

色んな情報提供者がいてその場所に悠治は時間が許す限り何度となく足を運んだ。しかし何も手がかりなく一週間は直ぐに過ぎた。せめて、相手がこんなまどろっこしい事をしなければ、悠治は足をすぐにでも向けられるのに……と一人ゴチ、英二にまた情報が入るか

も知れないからと言いきをし早朝、家を出た。

本当だったらこの日を最後に入れ替わりが完了しているはずと、この期日をこれほど恨んだ事は無かった。

でも、足を向けた先、そこには一人の老女がお地藏様の収まっている祠を掃除している。そしてぼったり顔を合わせた。

「お前さんかい？この地藏にお供物をいつも持つて来るのは？」

見知らぬ老女は、顔中の皺を寄せニコニコと笑い掛けてきた。

「そうです……けど……」

悠治は何故この老女が笑っているのか？その理由が解らなかった。

「このお地藏さんは、女性には優しくての？」

「女性に優しい？」

んな事ないぞと言いたいが、老女の手前そんな事は言い出せなかった。

「知つとるか？ここにどうしてこの祠が建てられたか？」

「いえ？」

考えてみれば、そんな事気にも止めなかった。そんな事を考えるより、自分自身の事にしか頭は回らなかった。

「大昔の事じゃよ。この場所で一人の女性が恨みを持って死んだそうじゃよ。好いた男に裏切られ、死を選んだとか。好いた男には、他に女がいての。それも有力な力を持つ貴族の女でのもう何も信じられないと、男を殺して自分も死のうとした。しかし、道連れにする事叶わず死んだのはその女だけだったとか……それからじゃよ、ここで自殺者の遺体が一時期数体転がったのは……男と言う男を道連れにする様になった。だから、供養する為にここに祠が作られたまゝそう言う訳じゃよ」

そんないわく付きの話がこの地藏に有ったのか……と初めて聴いた。「女性に優しい地藏ですか……」

「そうじゃよ？拜んでおく事じゃ。きつとその想いは届くじやろうて？」

そう言うと、見知らぬ老女は掃除を終えてその場を去った。

悠治はもしそれが本当なら、いつも通り彩華の事を思い祈る事にした。もしかしたら、期限を決めたお地蔵様の言葉が自分にしか聴こえなかったのは……彩華の期限と言うモノが最初から存在しなかったのかも知れない。

ならば、こうして罰を受けた自分だけの抗力が有るかも知れない？悠治は、そこまで考えて今日中に何とかケリを付けなければならなうと考えた。時間は、あと十二時間。悠治は、この勝負に挑む。それが当たりか外れか？そんな事は解らない。でも一縷の望みを持っていたかった。

そして、一つの案を講じた。もし入れ替わるのなら、至上最高の演出を試みたいと思いを巡らす。そして、直ぐさま英二の待つマンションへと駆け出したのである。

「彩華！これを見るよ！」

「何？」

悠治が帰って来るなり英二は、悠治をパソコンの前に招く。

「今日付けの映像で、倉庫の端を拡大したら、名前が書かれてあった」

拡大され、止まった映像に、微かだが書き込まれている。

「これが最後の手がかかりだ！すぐに出発だ！」

「そうね。でも、英二寝てないでしょ？少し休んだ方が良いわ？」

この一週間ずつとこの状態でホームページ観察と、映像に目を見張っていた為、二人の疲労は凄まじかった。

「彩華もな。目の下、隈出来てるぜ？らしくない」

「私の方は良いの！メイクすればこんなの直ぐに消えるんだから。」

これは貴重な最後の手がかかり。これを突き止めるしか無いわ！」

時間は刻々と過ぎて行く。でも、最後の力だけは温存しなければならぬ。

「私は、タウンページを片っ端から洗ってみる。もう、使われて無い倉庫だとしても、名前が解れば場所も解るかも知れないからね？」

悠治は、タウンページを一気に調べはじめ。眠いけど、疲れてるけど、望みは最後まで捨てちゃいけない。お地蔵様の事を少し信じてみたい。これは最後の賭けだった。

入れ替わりが叶うか叶わないかの最後の賭け。だから、フロアーにゴロンと横になった英二を見届け、直ぐさま行動を開始したのである。

「有った！」

タウンページを片っ端から一つ一つ確認して行った先に、その倉庫に関係有りそうな名前が書かれていた。英二はその悠治の言葉に、飛び起きる。

「何処だ？」

悠治の肩ごしからそのページの番号を確認するように覗き込んでいる。

「メモって。番号言うから……」

英二は直ぐさま近くに有るメモ用紙にその番号を書き留めた。もう、夕方に近い時間帯だった。

「電話してみる。もう使われて無いかも知れないけど……ダメもとだ！」

携帯を取り上げると、英二はその番号を打ち込み電話した。この電話が繋がりますようにという思いを込めて。

暫くすると、

「判ったぞ！横浜の第二埠頭だ！倉庫は今使われて無いけれど、事務所はまだ潰れて無かった。運が良かった……」

英二は大きく息を吐いた。

「今直ぐ出なくちゃね……あ、そうそう、これだけの事やらかしてくれたんだからさ、犯人には、ちゃんとけじめ付けて貰わないと気が済まないわね」

悠治は不敵な笑いを浮かべながら、言い放った。

「彩華？何を企んでるんだ？」

「私達が芸能人として動ける事。証明しておかなきゃね」さて、電

話すから！」

悠治は直ぐさま携帯を取り上げ何処かに電話をかけはじめ。そして、車を使う為に、英二の事務所に行くと言い始めた。

「英二を乗せて行くくらいはできるじゃ無い？このくらいはさせてもらうわね。野口さんには適当に繕っておくから！」

何かを企んでいるようだが、英二にはその真相は解らない。テレビ局を動かすつもりなのは解る。が、その時、どう行動するというんだろう？

「この時間からだ、着くのは深夜になるわね〜ふふふ〜」

悪意とも言える不敵な笑いが溢れている。プツン切れてしまっているんじゃないだろうか？とさえ思い、英二は一瞬彩華が恐く感じられたが、

「少しここで待ってて。車回して来るから」

言うや否やメイクを施し、礼子の姿に変装し始め、ドアを開けて走り出た。英二は呆氣にとられて、ただ視線の外に彩華を送りだしたのである。

一時間後、悠治は車を携えて帰って来た。

「野口さんには、口裏合わせておいた。悠治を捜しに行くから、車貸して下さいと言っておいたわ」

手回しが良い彩華に、

「捜しに行くね……失踪したのは悠治にとってマイナスだけど、まあ、今はこれで良いか……」

相槌を打って、英二は運転する悠治の助手席に乗り込んだ。

「第二埠頭までのナビゲーションは宜しくね！」

「あ、もちろんさ」

そんなナビゲーターの英二の言葉以外は、他に話す事が無かった。始めの内は、二人とも黙まり込んでいたが、渋滞する首都高に乗った頃には、悠治が今の状況を和らげるように英二に話し掛けた。

今までの、このゲームの意図を、英二に話そうとそう心に決めたからである。

「私ね、このゲームを始めたきっかけは、悠治に私の気持ちを知って貰いたかったからだったの」

「？」

「あいつってさ、莫迦がつくくらい鈍感でしょ？私の気持ちなんか分かって無かったのよ」

「それって、彩華は悠治が好きだった。てことか？」

英二には彩華が言いたい事をすぐに理解した。

「俺の勘は正しかったってことか……不思議だったんだ。でも、悠治も彩華のこと好きなんじゃ無いか？俺の勘は結構良い方だけど？」その言葉に、悠治は苦笑いした。

「悠治にはもう好きな人がいるのよ。そして、今の私にも好きな子がいる」

「彩華が好きな『子』？子って……」

「それはいくら英二であつても言えないけどね？企業秘密だから」

悠治は、英二が疑問に思っている事が分かって無かった。『子』と言う響きに疑問を感じているなんて……

悠治が奈々子の事を考えを巡らせていて、思わず口をついて出た言葉だった。

「ふ〜ん。で、その事で今は心変わりしているって事なんだな？」

「ま、そう言う事ね〜だから、英二は安心して良いのよ？」

「悠治が好きな人ってのは？一体誰なんだ？」

「それも企業秘密。大どんでん返したのは、最後の最後にとっておくモノでしょ？違う？」

英二には、悠治のその言葉が解らなかった。でも、何だか今までのわだかまりが消えている事に気付き、

「嫉妬するのは、何だか自分が醜くて嫌だったけど……こうして、彩華に話してもらえてスッキリした気分だよ」

しがらみが、複雑に絡まりあった糸が……スルスルとほどける。そ

んな感じがした。

「また一つ予言してあげるわ。あなたの恋はちゃんと叶うって事……でも、それを受け止める事ができるかどうかはすべて英二次第だ……ってことだからね……助言は以上よ」

悠治は、英二を見て笑っていた。彩華と悠治が今まで仲良くやって来れたのが、今の英二には判った。こんなにお互いを尊重しているならば、全く異なった性格の二人でも上手くやって来れたのだと。

「さて、もう十時ね。後一時間有れば辿り着くわね？見てらっしゃい。この怒りは百倍にして返してあげるから！」

悠治は話を切り替えた。車の時計が目に入ったのである。

後は、目的を達成するのは時間の問題。全ては当地に着いてからだ。そう思うと、悠治の中の血がかなりの勢いで流れ始めていたのである。

#19 決着・乱闘・入れ替わり

「着いたわね……」

確かに、映像と同じ倉庫の立ち並ぶ場所。辺りに灯りが無いが、そうだとはつきり分かった。二人は、その中の五番倉庫へと車から下りると向った。

静かすぎるその倉庫までの道のり。生きた心地がしないほど、鼓動が脈打つ。

閉ざされている倉庫のシャッターを『ガラガラ』と押し上げると、オイル缶の奥にライトが灯っている場所が有った。

薄ボンヤリだが、そこに彩華が縛り付けられている。悠治と英二はスタスタと中に入り込んだ。

「私が彩華よ！このゲームを誘拐事件にまで発展させるなんて、私自身の価値を何だと思っているのかしら？」

人影の無いその場所に足を向けると、悠治は周りに潜んでいるだろう敵に大声で問いかけた。

そして礼子の姿を暴露するかのように、ウィングを投げ捨てた。すると一人のオタクっぽくてヒョロヒョロした人物が姿を現した。手には、ハンディーカメラを携えている。この騒動をきちんと撮り逃さないようにと思っているらしい。その十メートル先に彩華がグツタリとして紐で柱に縛り付けられていた。

「こんな奴に誘拐されたの？悠治……」

これくらいなら、いくら力が無い彩華でも罠には落ちないだろうと考えると、呆れてしまった。しかし、その悠治の奥に五人ほど男がナイフや、鉄の棒、チェーンを片手にシャキシヤキと出し入れしながら現れたのである。

「なるほどね……コイツラなら納得出来るわ」

まだ未成年であろう？悪意の有る顔つきをした連中が悠治の前に足

を運んできた。彩華は、縛られた手足と、口にかまされている布で返事出来ないで、縦に首を振って肯定の意志を示す。どうやらこの連中には逆らえないのだろう。彩華には……と思っていると、連中の一人が、そんな彩華の腹を蹴りあげる。

「何するのさ！この莫迦野郎！」

悠治は、今彩華にした行為を非難した。が、相手は気に止める様子はない。そして、本題。と言うように話し始めた。

「さて、彩華？ここまで来たんだ。悠治を助けたかったら、俺達に従うんだな？」

と、うめき声をあげている彩華の顎をしゃくり上げて、首元に一本のナイフを突き付ける。

「武器が無いと喧嘩も出来ない軟弱者なのね。男として情けないんじゃない？」

悠治の怒りはマックスに達し始めていた。

「ゲームのルールにそんな事は無かったよな？」

また一人がこれ見よがしに言つてのけた。

「屑にそんな事言われたく無いわね」

いちいち勘に触る事を言ってくれるなと思ひ、悠治は憤ったが、

「彩華？少し落ち着けよ……」

英二が、悠治の肩に手を乗せて来た。こちらからどう言おうと、ただ単に相手を刺激させるだけだと思っているらしい。

「そっちにいるのは、英二かい？ボディーガードのつもりでついて来たのかも知れないが、お前に俺達が止められるかね？」

また一人が話し掛ける。

「いいから、一人でこっちに来い！」

悠治は、限界に達していた。そして、その言葉を受け入れようとした時、

「彩華！」

英二は、良案が有るという風に悠治を引き止めると、耳許で囁いた。
「……分かったわ。任せて！」

悠治は、その言葉を受け入れ、今度は軽やかに足を踏み出す。

「今は、悠治は関係ないでしょ？ 私に用が有るんだったら、あんた達がこつちに来なさいよ」恐くて近寄れない？」

この言葉には、五人もカチンと来たらしい。悠治と彩華の距離の半分まで悠治を取り巻くように進んで来た。

「で、誰が私の恋人になりたいって思っている訳？」

悠治は、あっけらかんと言った。その言葉に、五人はお互いに視線を泳がせていた。五人はそこまで考えていなかったようだった。

そんな時、『ピーッ』と英二の指笛が鳴り響く。

それを合図に、悠治は一番手近にいる者のナイフを持った手を踵落として叩き落とす。そして、御丁寧にペンを取り出し、『x』をその者に書き込むと、転げ落ちたナイフを取り上げ、彩華が縛り付けられている柱に向い走るとロープを切り解放した。

英二は、彩華が動くと同時に、駆け出し、鉄の棒を持っている一人の男に背負い投げを掛けると、その男は受け身も出来ず、ドスンという大きな音を立て転がる。それと同時にカラカラと鉄の棒は転がって行った。

「体育の柔道が役に立つ事が有るなんて思わなかったぜ？」

まさか、こんな乱闘騒ぎに自分自身加担するとは思わなかったが、流石に武器を持っている者と彩華一人では対処は出来ないだろう。

「悠治ごめん」ドジっちゃったよ」もう私お腹ぺこぺこ」

猿ぐつわされてた布を取り外すと同時に、彩華はボゾボソと話し出す。

「良いよ。もう黙ってな？ この酬いはちゃんと、僕受ける心構え出来てるんだから……」

辺りは騒然としているから二人の会話など気にしてはいない。彩華は力無く、そこに蹲る状態で座り込んでいたままだった。

そんな彩華のポケットに奈々子の家の鍵を滑り込ませる。

そんな時、ざわめきと大勢の足音が鳴り響いて来た。そして倉庫の外から急にライトで照らし出されたのである。

『ここがそうなのでしょっか？』

一人の男がマイクを持って、実況放送を始めた。その後を追い掛けるかのように、ライトの下カメラが数台入り込んで来る。

「さて、やつとお出ましか？んじゃま、彩華としてのラストの仕事して来るか！」

悠治は口走るといきなり立ち上がり、残りの男共の方に走り出す。まだ四人。顔に『x』を付けていない。英二は猛然と健闘しているが、このゲームは彩華のゲームだ。だから、その仕事を取られまいと駆け込んだ。

「ちよいとお兄さん？私はこつちよ？」

肩に手を掛けると、ナイフを握りしめたその右腕を捻りあげる。護身用の決め技であった。

「この腕、一生使い物にならないようにしてあげようかしら？」

こぼれ落ちるナイフを倉庫の端に蹴り飛ばすと、締め技に入る。

「いつっー！」

悲鳴をあげる男に、

「このくらい我慢出来なくちゃね！酬いはちゃんと受ける仕組みなの、この世の中は！」

そして、体落としをかます。相手が伸びたところで、顔に『x』を書く。

後三人！

「英二！後はこつちに任せて！」

彩華は叫ぶと、英二は、

「恨みはこつちも同じだ！いらん気は回すなよな！」

今まで我慢していたモノを吐き出すとも言いたげに、英二は相手を殴り倒している。

『これは凄い！彩華のゲーム最終日！これを見逃す事など出来ません！テレビの前の皆様！今直ぐチャンネルはこのままでいて下さい！』

生放送？英二は彩華の魂胆がここで分かった。ならば、トコトンや

ってやるうじや無いかと立ち回る。

「ほい！彩華！こっちは片付いてるぜ！」

一人の男を悠治の前に放り出す。悠治は、

「お生憎様だったわね」

また一人『x』を付ける。

残り二人。

英二と、悠治は二手に分かれ相手を始める。

『何と、ここに英二が居ます！と言う事なのでしょうか？そう言え、ここ一週間、ジェイズの活動が無かったのは、この彩華と関係があつたのでしょうか？おや？あそこにいるのは、悠治のようですね！』

カメラはズームで悠治を映し出していた。

『何だかやつれてます！大丈夫なのでしょうか？あつと、今ナイフを持った青年が彩華に飛びかかりました！』

実況中継は悠治の思惑通り進められている。まるで、悠治が主役とでも言わんばかりであつた。

その頃の奈々子は、深夜のその番組に釘付けだった。ニュース速報で、彩華の騒動が生放送されると知らされてチャンネルを変えたたん、この騒動が映し出されていた。

「彩華……またこんな無茶して！」

心配で、でも心はドキドキと鳴っている。やはり、彩華に惹かれている自分に気付く。

明日、約束の日が来る。生徒手帳の中はまだ開封して無い。何があるのか？知りたいけど、約束は約束だ。だから、絶対に見ない。

「彩華！頑張つて！」

奈々子はナナを膝に乗せ観戦していた。

この日のこのチャンネルの視聴率は、ゴールデンタイムの視聴率を上回っていたのである。

「彩華！こつちは片付いたぞ！」

立ち回っていた相手の意識が失せたところで英二は納得したのである。身柄を彩華に渡そうとした。しかし、彩華の方は苦戦していた。何年も前に無くなったであろうと思われる、チェーンの武器を振り回され、彩華は相手との距離を縮める事が出来ずにいたのである。

懐に入り込めない。どうにかしてあのチェーンを止めなければ！

何か方法が無いか考えていると、悠治の目の端に鉄の棒が目に入った。これを使うか？滑り込んで棒を取り上げると、ぐるぐる回っているチェーンに放り投げる。すると、上手く絡まり、もうそのチェーンの抗力は失せ果てた。

「さようなら！つと」

怯んで拳を振り上げている相手に悠治は、瞬発力を生かし懐に入ると、鳩尾に一発当て身を食らわせた。

「ぐぼっ！」

相手は海老のように背中を折り曲げそこに崩れ落ちる。

「喧嘩は道具で片を付けるんじゃないわよ！やるなら素手にしときな。時代が違うのよ？」

滑り込んで汚れた衣服を叩きながら悠治は、中指を立てていた。

こうして、残り二人の顔に落ちていて「x」を書きこみこの騒動は一件落着いたのであった。

『御覧下さい！彩華が勝ちました！手許の時間はまだ十一時五十八分です。このままゲームは終わりなのでしょいか！』

アナウンサーは、報道を続けている。何の真相も掴めずに。

この状態をただのゲームだと知らしているのは、問題だが……

そんな時、その報道陣をかき分け、ソロソロと警察が入って来た。

その様子を悠治が気付き英二のもとに駆け寄った。

「遅いぞ。親父……」

英二がそんな事を咳いていた。

「いつ、知らせたの？」

「彩華が、車を取りに言つてた時にな。もしもの時の事を考えてね…… 実際、怪我人出てる事だしな？」

周りを見渡す。確かに怪我人が出ている。大した怪我とは言えないけれども怪我人は怪我人だ。

「悠治ん所行かないと……」

英二には柱に背を持たせかけて、座り込んでいる悠治が目に入った。今直ぐ駆け出そうとしている英二に、

「あ、その前に……」

時間は、五十九分。最後の最後にとつておいた時間を使う気に悠治はなつていたのである。これも、何かの因縁だろう？ こういう事になつて、もう入れ替わりが出来るかどうかなんて解らない。でも、賭けてみようと思つた。もし、入れ替れなくても……

そんな中、報道陣のカメラはこちらを映していたり、警察の方に気を張つていたり右往左往している。今が最高のチャンスだった。

「悠治の事は心配無いか！ それより英二。大事な事を言わなきゃならないの。ちょっと耳貸して……」

悠治は、頭一つ大きい英二に少し屈んでもらつた。そして、不意を付き、

「！」

見事に悠治は、彩華の身体で英二にキスをお見舞いした。

その行為に英二は何が起こつたのか解らず固まってしまった。

時刻は八月一日午前零時。

そして、脳天に今彩華にキスされている事に気が付いた英二は、それを押し退けた。

「な……何を！」

英二は真っ赤になって何を口走って良いものやら解らなかった。

「ん？……あれ？英二！どうしたの？」

「どうしたのじゃ無い！」

「何怒ってるのさ？あれ？それより、僕ここで何してるんだろう？さっきまで柱に縛り付けられてて……お腹蹴られて、彩華に助けられて……」

彩華は、自分が今までされていた事を思い出していた。

「何言っているんだ？おい！しつかりしろよ？彩華？」

「彩華？何言っているの？僕、悠治だよ？」

彩華はまだ気付いて無かった。自分が悠治と入れ替わった事を。

「？……もしかして……お前本当に悠治なのか？」

英二は、混乱した頭を整理しようとしていた。

「悠治だよ！何、莫迦な事を……」

と、自分の手を見る。

「あれ？僕の手こんなに細かったっけ？それにこの服……」

彩華は、驚いたかのように、自分の顔を手で触っていた。悠治としての顔とは全く別人のような手触りを感じ、

「英二？僕……もしかして彩華になってる？」

それに対して、頷いてみせる英二。

「やった！戻ったんだ！」

突然跳ねながら喜びを隠しきれない様子の彩華に、

「戻った？」

「話せば凄く長くなるんだけど……あ、その前に、告白の件。あれ、僕……あ、ううん、私であつてもちゃんと好きでいてくれる？私はずっと英二の事が好きだったの！」

思いきり良く、ハッキリと彩華は告白した。そして、その返事を待った。

「それは……ちょっと待ってくれ？今、頭が混乱してて……」

どう接すればいいのか？悠治が本当は彩華で、今まで悩んでいた事が全て洗い流されて。白紙の状態のその心に、迷いが有る。

だからジツと彩華の顔を見詰めたまま硬直していた。そんな意味ありげに向い合っている二人に、突然カメラが近づいて来た。

『突撃インタビューです！いつから英二さんと彩華さんは出来上がつてたんですか？』

辺りの騒動の中、この様子を捉えていたカメラとアナウンサーが取り囲んだ。

「あ！これ全て、テレビに撮られてる！」

英二は、真っ白な頭の中が現実の世界に向けられ、よけい混乱してカメラの前に手を差し出して抵抗した。が、もうその現場は撮られてしまったのだ。

英二は喜んで良いのか？それとも、嘆いて良いのか判らなかった。でも、今まで、予言として悠治である彩華から言われて来た事を鑑みると、なるほど。こういう事だったのかと理解がやっと出来た。そして、見事に一芝居打った頭の回転の早い悠治に少し感謝した。これから先どうなるか解らないそんな状況下で。

#20 エピローグ

当の悠治は、他の怪我人と一緒に救急車で運ばれた。一週間の彩華の苦痛が身体にしみ渡っている。これも、仕方ない事だと思いながら病院のベッドに横になった。今夜はこのまま入院。脱水症状で身体が上手く動かないからであった。

理由はどうあれ、駆け付けた両親にはこっぴどく叱られ、マネージヤーの野口には、ここ一週間旅に出ていた事の理由を問いただされ、良い事など無かった。

けれど、今頃彩華と英二も問いただされているんだろうなと思うと少ししたり顔をした。

幸せになるのだったら、それ相応の代価を払わなきゃね？それに関しては、自分自身も然りである。

そんなベッドの中で、悠治は、彩華のポケットの中に滑り込ませた鍵を取り出すと、横になってそれをマジマジと見つめる。入れ替わりが成功した。これで、悩みはもう無い。

「あゝ今日には退院出来るんだろうか？」

日付けの変わった今、眠れずにいる自分に気が付き今日、奈々子の所に行かなきゃならないと言う事を思い返していた。

「寝なきゃな」

疲れが蓄積されているその身体をベッドに落とす。そして、深い眠りが悠治を誘った。

次の朝のスポーツ新聞。臨時の雑誌は一気に売れた。そして、テレビニュースの芸能界の話題は彩華の騒動で、英二と彩華が実は『出来ていた』と言う見出しが後を立たなかった。

大人から子供まで、その話題は尽きず、一日が過ぎ去る。

実際、英二も彩華も否定しなかった。これから先、どうなる二人なのか？それはこれからの問題だが、取り敢えず悠治はその事に安堵

を覚えていた。それから退院した足で、直ぐに奈々子の元に走ったのである。

奈々子は、朝からテレビを点けっぱなしであった。この騒動の裏に、悠治の誘拐事件が絡んでいたと知るのも時間の問題だった。そして、今日解禁出来る生徒手帳を、鍵を掛けてしまっておいた引き出しから取り出すと、ベッドに腰を掛けてその最後のページを見開いたのである。

『前略。奈々子様。うーん。話せばとてつもなく長い事になるし、今の時点で本当の事はまだ言えないんだけど、とにかく一ヶ月後のゲームが終わったら全て片が付くので、その時になったら逢いに行きます。逢って驚くとは思うんだけど、まだ本当の事話して無い事あつて……それを話さなければならぬって思ってる。奈々子が良ければ、こんな奴だけど、友人になつてもらえると嬉しいなつて思う。奈々子以外の女の子に友人がいらないからさ……それがこれからの人生のスタートになる。そんな自分を前向きに考えて行きたいから手助けして欲しい。それじゃ……一ヶ月後。悠治拝』

奈々子は最後の行に有る悠治と言う名前に驚きを隠しきれなかったが、思い当たる節はいくらでもあつた。

彩華が悠治であつたら、説明が付く事。そしてジェイズが絡んでいた事。

詳しくは彩華がここに来て説明してくれなければ確実に理解をする事は出来ない。でも、彩華が悠治だったら？英二を恋敵としていても不思議では無い。そして、好きだと言っていた相手は多分悠治である彩華だったのであろう。魂が入れ替わっていた？それがどうしてそんな事になっていたのか……そんな事は考え付かないが、漠然と理解した。そして、またテレビに釘付けになる。

この騒動で、彩華は芸能界を引退する表明を出した。この人が本当

は悠治だったのか？だから、あの時……『美空学園』に出現した時、あんなに怒っていたんだと想像した。
そして、悠治が病院から抜け出したと言う報道がなされた。

「彩華……ううん悠治はもしかしてここに？」

奈々子があんな身体でここに来るなんてあり得ないと思っていた時、玄関のチャイムが鳴った。

「！」

胸がドキドキと跳ね上がりそうなくらい緊張した。そして、

「はい」

裏返しそうな声を落着かせようとして、奈々子は玄関のドアを開けた。

「ごめん。遅くなって……」

そこに顔を出したのは、まさかの悠治だった。奈々子は目を見開いて、

「え、えっと……初めましてってのも変だよね？彩華。ううん、悠治？」

もう、夕方。赤く染まった陽の光が、悠治の姿を映し出す。

「いてて……」

脱走して来た病院。まだ動ける身体じゃ無いけれど、約束したのだから果たさなきゃ。

「大丈夫？無理するから……」

その身体を支えようとした。すると、

「生徒手帳見たんだね？」

テレビの中の甘い整った顔がゆっくりと微笑む。

「うん、見た。驚いたよ。でも、真実は解らないけど嬉しかった！」

「こんな奴だけど、初めは友人として付き合ってくれるかな？」

「勿論よ！彩華の……悠治の性格は良く分かっているから！そう言ってくれて、あたしも嬉しい！ここじゃなんだから、中に入って。話を聞かせてよ？」

奈々子は微笑んで悠治を中に誘い入れた。これから訊く事は、きつと誰にも想像出来ない不思議な話。それがどんな事でも、悠治から聴かされる事を素直に訊き入れられる。そんな予感……

「ナナは？」

「今は寝てるよ」

遠くで風鈴が鳴っている。夏はまだまだこれから。そして、二人が歩き始める道もこれから……

「私、彩華の……悠治の性格好きだよ？」

いつだって相手に信じて貰える。それが、一番の特効薬。悠治と彩華の話はこれからもまだまだ続いて行く。

そう。この四人の物語は始まったばかりなのだから。

FIN -

#20 エピローグ（後書き）

終わりました。

本当にハチャメチャですが、色々な想いの交錯と、行動の果てに有る物が描けて楽しかったです。

今思えば、彩華も悠治も主人公だったんですが、悠治（彩華の中の魂）の方の思い入れが高かった気がします。

女性のあたしにとって、男性側からの意識って難しい視点でしたが、こんなキャラクター居たら楽しいかな？何て思いながら描いた作品でした。

また機会があればこういうハチャメチャなの挑戦してみたいな
次回は、ちょっとシリアス物を投稿していきたいです。

基本シリアス書きなので^^;

此処までお付き合い頂きありがとうございますm（- -）m
皆さんの心に何かが残れば幸いです。

楽しい恋して生きていければ良いですねv

では、またお会いしましょうvv

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7793c/>

AYAKA

2010年10月9日11時39分発行